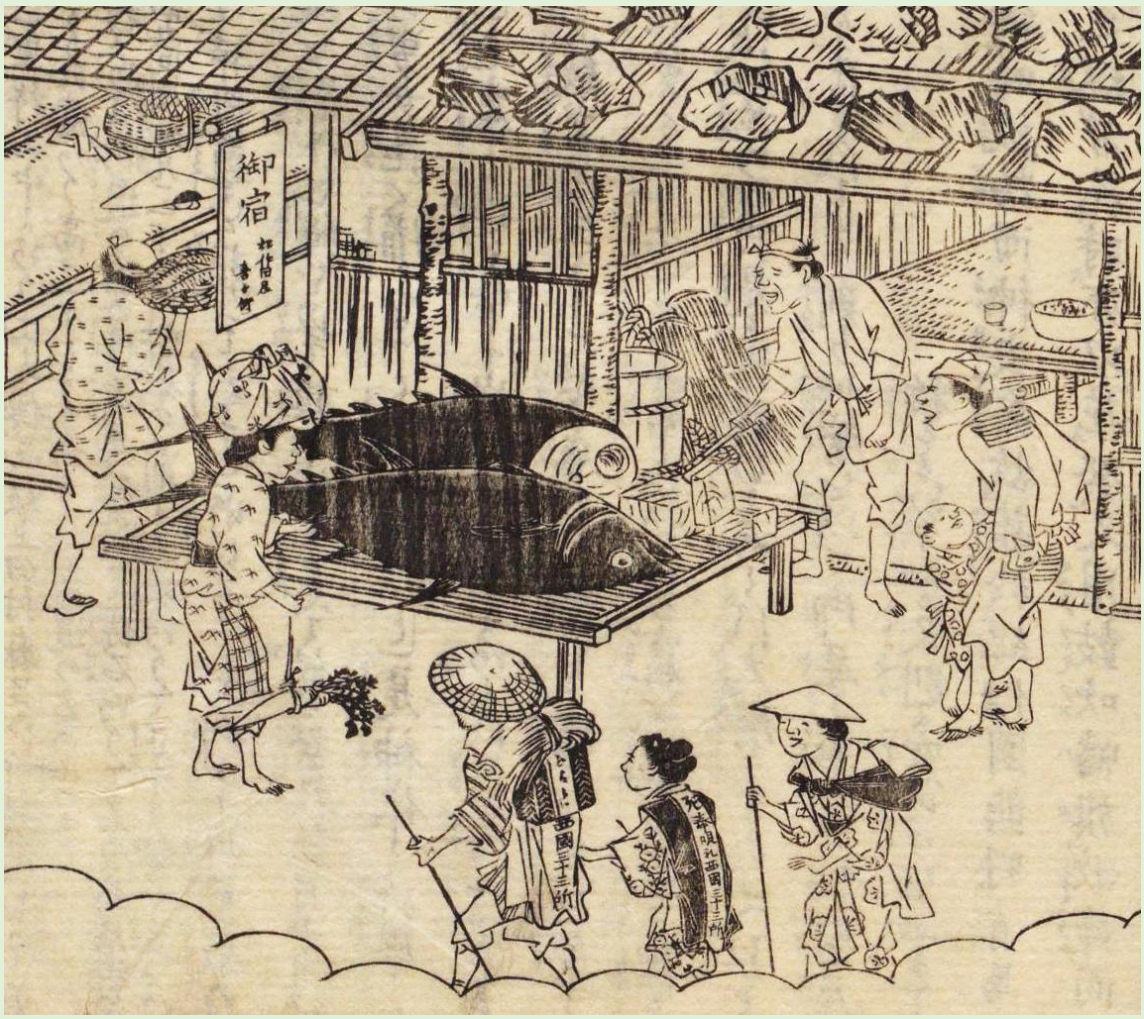
熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅲ

（尾鷲市～紀宝町）



令和８（2026）年３月

三重県教育委員会

例　　言

１．本書は、熊野参詣道伊勢路の学術調査報告書である。

２．熊野参詣道にかかる調査報告はこれまでに、三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ－熊野街道－』1981 年、三重県教育委員会『伊勢街道・朝熊岳道・二見道・磯部道・青峰道・鳥羽道－歴史の道調査報告書―』1986 年、三重県教育委員会『熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅰ（伊勢市～大紀町）』2024 年、三重県教育委員会『熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅱ（大紀町～尾鷲市）』2025 年を刊行した。本書はこれらの成果に加え、令和７（2025）年度に実施した調査成果を報告する。

３．調査は下記の体制で実施した。

調査主体：三重県教育委員会　社会教育・文化財保護課

熊野参詣道伊勢路調査報告書検討委員会：小澤毅（三重大学名誉教授：考古学）、板井正斉（皇學館大学教授：宗教社会学）、谷戸佑紀（皇學館大学准教授：歴史学）

調査・執筆担当：新名　強（第１章、第２章）、小原雄也（第３章１・２・４・５節）
伊藤裕偉（第３章３節）、宮原佑治（第３章６・７節）、鐸木厚太（第３章８節）

４．調査にあたり、下記の方々からご指導・ご協力を得た。（敬称略・順不同）

家崎彰、伊津見孝明、伊藤文彦、内山裕紀子、梅谷陽子、川口有三、小林高太、坂本亮太、更屋好年、清水鎮一、塚本明、出口眞一、中西尚文、三石学、向井弘晏、矢賀久廣、脇田大輔、和歌山県立博物館、和歌山市立博物館、和歌山市和歌山城整備企画課、わかやま歴史館、新宮市教育委員会、熊野古道センター、三重県環境生活部文化振興課、尾鷲市教育委員会、熊野市教育委員会、御浜町教育委員会、紀宝町教育委員会

凡　　例

１．三重県地図は、2017 三重県共有デジタル地図（数値地形図 2500（平成 29 年度撮影））三重県市町総合事務組合を使用した。新宮市地図は、新宮市長の承認を得て、同市所管の新宮地形図（1/2500）を使用した（承認番号令和 8 年 2 月 12 日　新都第 648 号－1）。明治時代発行の紀伊国南牟婁郡の地籍図（三重県指定有形文化財〔歴史資料〕三重県行政文書）は、三重県庁が所蔵する「特定歴史的公文書等」の掲載承認を得て使用した。

２．下記の資料は、著作権保護期間が満了したものである。

『西国三十三所名所図会』『伊勢参宮名所図会』（国立国会図書館デジタルコレクション）、『西国三十三ヶ所めぐり絵図』（奈良県立図書情報館まほろばデジタルライブラリー）CC ライセンス。

３．写真はすべて社会教育・文化財保護課職員が撮影したものを使用した。

４．文中に記載した金石文等は、以下の記号で示した。

「／」‥‥改行

「〈　〉」‥‥割注または２行取りの文字

「文字」‥‥読みが不確定な文字

「□」‥‥判読不能文字（１文字）

「〔以下不明〕」‥‥判読不能文字（字数不明）

５．本書では、熊野参詣道に相当する道については「熊野道」と表記した。熊野参詣道以外の「街道」と重複する部分は、必要に応じて「街道」と表記した。

６．挿図上での熊野道の表記は、史跡指定（世界遺産登録）範囲は赤色実線、この他の現存部分（アスファルト舗装部分を含む）は黒色実線、遺存していない部分や想定部分は黒色破線で示した。巻末の地図については、煩雑となるため、全て赤色実線で示した。

７．原則として常用漢字を用いたが、必要に応じて常用外漢字を用いた。

目　　次

例言　凡例

第１章　はじめに ･･････ 1
　１　調査に至る経緯 ･･････ 1
　２　調査報告書の位置づけ ･･････ 1
第２章　熊野参詣道伊勢路の概要 ･･････ 2
　１　概要 ･･････ 2
　２　調査対象 ･･････ 2
第３章　熊野参詣道伊勢路（尾鷲市・熊野市・御浜町・紀宝町） ･･････ 5
　１　曽根から甫母・二木島を経て新鹿 ･･････ 5
　２　新鹿から波田須 ･･････ 22
　３　波田須から磯崎（古泊浦）を経て大泊 ･･････ 26
　４　比音山清水寺と観音道（大泊側） ･･････ 44
　５　大泊から木之本を経て有馬 ･･････ 55
　６　有馬から下市木 ･･････ 67
　７　阿田和から井田 ･･････ 77
　８　井田から鵜殿・成川 ･･････ 83
広域図 ･･････ 94

挿図目次
表紙　『西国三十三所名所図絵』木本湊
図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山の位置 ･･････ 2
図２　『西国三十三ヶ所めぐり絵図』 ･･････ 3
図３　尾鷲市曽根町の向井地墓地 ･･････ 5
図４　曽根次郎坂・太郎坂　登り道 ･･････ 5
図５　曽根次郎坂・太郎坂　登り道の石段 ･･････ 5
図６　曽根の一里塚 ･･････ 5
図７　曽根次郎坂・太郎坂① ･･････ 6
図８　曽根次郎坂・太郎坂② ･･････ 7
図９　「紀伊国南牟婁郡甫母浦全図」 ･･････ 8
図 10　曽根次郎坂・太郎坂　九十九折の登り道 ･･････ 9
図 11　甫母峠 ･･････ 9
図 12　甫母峠の祠と地蔵菩薩坐像 ･･････ 9
図 13　甫母峠の地蔵菩薩坐像 ･･････ 9
図 14　甫母峠から移転された地蔵菩薩坐像 ･･････ 9
図 15　熊野市甫母町の墓地にある地蔵菩薩坐像 ･･････ 9
図 16　六字名号碑と供養塔 ･･････ 10
図 17　曽根（弾生）五輪塔 ･･････ 10
図 18　庚申祠　青面金剛立像 ･･････ 10
図 19　曽根石切場跡 ･･････ 10
図 20　巡礼供養塔１ ･･････ 11
図 21　巡礼供養塔２ ･･････ 11
図 22　「楯見ヶ丘」からの楯ヶ崎の眺望 ･･････ 12
図 23　楯ヶ崎の近景 ･･････ 12
図 24　曽根次郎坂・太郎坂　下り道の石段・石畳 ･･････ 12
図 25　曽根次郎坂・太郎坂　下り道沿いの猪垣 ･･････ 12
図 26　曽根次郎坂・太郎坂　二木島側降り口 ･･････ 12
図 27　国道 311 号から二木島の集落間にある墓地 ･･････ 12
図 28　猪垣造成記念碑 ･･････ 13
図 29　六字名号碑 ･･････ 13
図 30　巡礼供養塔３ ･･････ 13
図 31　「紀伊国南牟婁郡二木島浦全図」 ･･････ 14
図 32　二木島峠道・逢神坂峠道① ･･････ 15
図 33　二木島峠道・逢神坂峠道② ･･････ 16
図 34　二木島集落の逢川渡渉地点 ･･････ 17
図 35　二木島公民館付近の地蔵菩薩立像 ･･････ 17
図 36　二木島集落から一里塚間の道 ･･････ 17
図 37　二木島の一里塚にある庚申祠２基 ･･････ 17
図 38　二木島の一里塚にある庚申祠内の石造物 ･･････ 17
図 39　供養塔１ ･･････ 17
図 40　供養塔１～４ ･･････ 18
図 41　供養塔５～８ ･･････ 18
図 42　海福山最明寺 ･･････ 18
図 43　二木島の津波地蔵 ･･････ 18
図 44　二木島峠道　登り道 ･･････ 19
図 45　二木島峠道　沢付近 ･･････ 19
図 46　沢手前の祠にある供養塔 ･･････ 19
図 47　二木島峠の平場 ･･････ 20
図 48　二木島峠から逢神坂峠間の下り道 ･･････ 20
図 49　二木島峠から逢神坂峠間の沢 ･･････ 21
図 50　沢手前にある祠と供養塔 ･･････ 21
図 51　逢神坂峠の平場 ･･････ 21
図 52　逢神坂峠道　九十九折の下り道 ･･････ 21
図 53　逢神坂峠道　開削の道と石段 ･･････ 21
図 54　逢神坂峠道　降り口の庚申祠 ･･････ 21
図 55　「紀伊国南牟婁郡新鹿村全図」 ･･････ 22
図 56　新鹿の道 ･･････ 23
図 57　湊川の渡渉地点 ･･････ 24
図 58　湊川と里川間の集落内道路 ･･････ 24

図 59　里川橋右岸の道標（左面、正面、右面、背面）…… 24
図 60　徳司神社 …… 25
図 61　新鹿湾南側からの眺望…… 25
図 62　新鹿湾南側から波田須への道…… 25
図 63　山裾から庚申祠間の石段跡…… 25
図 64　山裾から庚申祠間の登り道…… 25
図 65　甫本庚申 …… 25
図 66　竜門山大仙寺 …… 25
図 67　新鹿の嘉永の「津波留」の碑…… 25
図 68　波田須の道　東波田須北部(1)…… 26
図 69　波田須の道　東波田須北部(2)…… 26
図 70　波田須の道　東波田須北部(3)…… 26
図 71　波田須の道　東波田須北部(4)…… 26
図 72　波田須の道　東波田須から中波田須…… 27
図 73　西行松の図（『西国三十三所名所図絵』）…… 28
図 74　波田須の道　東波田須北部(5)…… 28
図 75　波田須の道　世界遺産部分(1)…… 28
図 76　波田須の道　世界遺産部分(2)　石切場跡…… 29
図 77　経塚標識塔（矢賀・波田須神社前）…… 29
図 78　庚申祠（波田須神社前）…… 29
図 79　粗製角柱形塔婆と神号碑（波田須神社裏）…… 30
図 80　「木本組全図」のうち波田須・古泊浦・大泊部分…… 30
図 81　「紀伊国南牟婁郡波田須村全図」…… 31
図 82　波田須の道　中波田須(1)　道標付近…… 31
図 83　中波田須道標 …… 31
図 84　波田須の道　中波田須から西波田須・大吹峠道…… 32
図 85　波田須の道　中波田須(2)　弘法足跡水付近…… 33
図 86　西波田須の「モトミヤ」祠…… 33
図 87　西波田須道標 …… 33
図 88　波田須の道　西波田須(1)　集落内…… 33
図 89　波田須の文字岩…… 34
図 90　宝珠庵跡の石造物…… 34
図 91　波田須の道　西波田須(2)　巡礼供養塔付近…… 34
図 92　西波田須　巡礼供養塔…… 34
図 93　波田須の道　西波田須(3)　庚申祠手前…… 35
図 94　西波田須庚申祠…… 35
図 95　大吹峠道　波田須側(1)…… 35
図 96　大吹峠道　波田須側(2)　猪害の古道…… 35
図 97　大吹峠道　波田須側(3)　峠付近…… 35
図 98　大吹峠道　峠から磯崎側の道…… 36
図 99　大吹峠道　磯崎側(1)　茶屋…… 37
図 100　大吹峠道　磯崎側(2)　石段…… 37
図 101　大吹峠道　磯崎側(3)　石段…… 37
図 102　大吹峠道　磯崎側(4)　古泊浦地蔵堂跡…… 37
図 103　大泊地内の熊野道…… 38
図 104　大泊の道標 …… 38
図 105　大泊の熊野道…… 39
図 106　昭和７年段階の大泊・古泊（現磯崎町）の道…… 40
図 107　「紀伊国南牟婁郡大泊村全図」…… 40
図 108　大泊の渡河地点…… 40
図 109　大泊の庚申祠…… 40
図 110　観音道　波田須側(1)…… 41
図 111　観音道　波田須側(2)　猪垣を渡る…… 41
図 112　観音道　波田須側(3)　岩盤上のステップ…… 41
図 113　観音道　波田須側(4)　土橋…… 41
図 114　観音道　波田須側(5)…… 42
図 115　観音道　登り口と石造物…… 44
図 116　観音道　猪垣沿いの道と分岐点…… 44
図 117　観音道　岩盤を削平した路面と石畳…… 44
図 118　観音道　九十九折の石段…… 44
図 119　清水寺境内跡平面図…… 45
図 120　清水寺境内跡　岩窟…… 46
図 121　清水寺境内跡…… 46
図 122　地蔵菩薩坐像…… 46
図 123　石垣造成記念碑…… 46
図 124　石槽…… 46
図 125　清泰寺…… 47
図 126　清滝…… 47
図 127　観音道　江戸時代と大正時代の道…… 48
図 128　江戸時代の道標…… 48
図 129　大正時代の道標…… 48
図 130　観音道　大正時代の道標　左から一丁石、二丁石、六丁石、七丁石、八丁石 …… 48
図 131　開創碑…… 48
図 132　観音道　登り口の石造物…… 48
図 133　観音道　沢付近の石造物…… 48
図 134　観音道の石造物　左から西国三十三所第一番、第二番、第三番、第四番霊場 …… 49
図 135　観音道の石造物　左から西国三十三所第五番、第六番、第七番、第八番霊場 …… 49
図 136　観音道の石造物　左から西国三十三所第九番、第十番、第十一番、第十二番霊場 …… 50
図 137　観音道の石造物　左から西国三十三所第十三番、第十四番、第十五番、第十六番霊場…… 50
図 138　観音道の石造物　左から西国三十三所第十七番、第十八番、第十九番、第二十番霊場…… 50
図 139　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十一番、第二十二番、第二十三番、第二十四番霊場…… 50
図 140　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十五番、第二十六番、第二十七番、第二十八番霊場…… 51
図 141　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十九番、第三十一番、第三十二番霊場、第三十三番霊場…… 51
図 142　観音道の石造物　左から地蔵菩薩立像、阿弥陀三尊立像、文殊菩薩立像、千手観音立像…… 51
図 143　観音道の祠と馬頭観音…… 51
図 144　清水寺境内跡の歌碑、記念碑 …… 51
図 145　大泊側から大観猪垣道への登り道 …… 54
図 146　大観猪垣道　登り道の土道…… 54
図 147　大観猪垣道　登り道の石段…… 54
図 148　大観猪垣道　祠手前の登り道…… 54
図 149　大観猪垣道　祠と山の神…… 54
図 150　尾根上の猪垣に沿った道…… 54
図 151　観音道までの下り道…… 54
図 152　大観猪垣道　下り道の石段…… 54
図 153　松本峠江戸道　登り道…… 55
図 154　松本峠江戸道　石垣下の登り道…… 55
図 155　松本峠江戸道　石垣周辺の平場…… 55
図 156　石垣周辺から大泊への眺望…… 55
図 157　松本峠道…… 56
図 158　松本峠江戸道　石垣周辺の石造物（地蔵菩薩立像、供養塔正面・右面） …… 57
図 159　松本峠江戸道　石段…… 57
図 160　松本峠江戸道　開削の道…… 57
図 161　松本峠江戸道と明治道の合流地点…… 57
図 162　松本峠明治道　石段…… 58
図 163　松本峠明治道　石橋と石段…… 58
図 164　松本峠の平場…… 58
図 165　松本峠からの下り道…… 58
図 166　松本峠道　割石の石段…… 58
図 167　松本峠道　自然石の石段…… 58

図 168　松本峠道　降り口 …… 58
図 169　松本峠道降り口から木之本間の石段 …… 58
図 170　松本峠　地蔵菩薩立像と蓮台下部の銘文 …… 59
図 171　大乗妙典普門品書寶塔 …… 59
図 172　松本峠　無縫塔 …… 60
図 173　松本峠　地蔵菩薩立像 …… 60
図 174　松本峠　供養塔 …… 60
図 175　松本峠　供養塔　正面 …… 60
図 176　松本峠　供養塔　左面 …… 60
図 177　松本峠　供養塔　背面 …… 60
図 178　松本峠　供養塔 …… 60
図 179　三界萬霊塔 …… 60
図 180　庚申祠 …… 60
図 181　鬼ヶ城から大泊への眺望 …… 62
図 182　鬼ヶ城　千畳敷 …… 62
図 183　木之本の道 …… 63
図 184　「木本組全図」 …… 64
図 185　笛吹橋 …… 64
図 186　木本神社 …… 64
図 187　要害山 …… 64
図 188　稲倉稲荷神社 …… 65
図 189　地蔵堂の「手無地蔵」 …… 65
図 190　称名寺 …… 65
図 191　極楽寺 …… 65
図 192　祐福寺 …… 65
図 193　瑞雲寺 …… 65
図 194　獅子巌 …… 65
図 195　花の窟 …… 65
図 196　「紀伊国南牟婁郡井戸村全図」 …… 66
図 197　七里の濱（『西国三十三所名所図会』） …… 67
図 198　大観猪垣道からみた七里御浜 …… 67
図 199　口有馬竜宮塔 …… 67
図 200　口有馬道標 …… 68
図 201　有馬の道標「熊中奇観」 …… 68
図 202　南有馬文字庚申塔 …… 68
図 203　有馬立石の巡礼道標（正面・裏面） …… 68
図 204　有馬の道 …… 69
図 205　有馬丁塚一里塚跡 …… 70
図 206　大前池と海岸砂州 …… 70
図 207　志原川河口部 …… 70
図 208　志原尻の龍神燈 …… 70
図 209　志原川渡し場（「紀伊国南牟婁郡有馬村全図」） …… 70
図 210　水門・秋葉神社 …… 70
図 211　有馬から志原の道 …… 71
図 212　旧志原橋 …… 72
図 213　志原の供養塔及び墓碑 …… 72
図 214　壺の池 …… 72
図 215　下市木の茶屋（「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」） …… 72
図 216　志原から下市木の道 …… 73
図 217　池大明神石燈籠（正面・裏面） …… 74
図 218　市木川水神塔及び石碑 …… 74
図 219　市木川河口部 …… 74
図 220　市木川周辺の道（「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」） …… 74
図 221　下市木から阿田和の道 …… 75
図 222　市木一里塚 …… 76
図 223　緑橋 …… 76
図 224　萩内の庚申祠・碑群祠 …… 76
図 225　稚子塚乙姫神社 …… 77
図 226　子安地蔵 …… 77
図 227　尾呂志川の道（「紀伊国南牟婁郡阿田和村全図」） …… 77
図 228　新道・旧道の分岐点 …… 77
図 229　阿田和の道 …… 78
図 230　尾呂志川渡し場推定地１ …… 79
図 231　尾呂志川渡し場推定地２ …… 79
図 232　尾呂志川渡河地点と夷島 …… 79
図 233　地蔵祠（明治 41 年） …… 79
図 234　慶応３年銘の六部の墓（正面・左面・右面） …… 79
図 235　阿田和から井田への道 …… 80
図 236　井田川河口部 …… 81
図 237　井田川河口の分岐点 …… 81
図 238　比丘石様 …… 81
図 239　井田観音標石・道標と巡礼板 …… 81
図 240　井田観音 …… 81
図 241　井田観音道標（明治） …… 81
図 242　井田道標（大正） …… 81
図 243　石造地蔵菩薩立像（井田観音） …… 82
図 244　井田庚申祠と燈籠 …… 82
図 245　井田神社 …… 82
図 246　徳本上人名号碑（正面・左面） …… 82
図 247　鵜殿経由道と井田上野道の分岐 …… 83
図 248　王子谷の坂を上がる道との分岐 …… 83
図 249　井田の地蔵菩薩坐像 …… 83
図 250　井田から鵜殿・成川への道 …… 84
図 251　梶鼻王子付近の道 …… 85
図 252　梶鼻王子付近の大岩 …… 85
図 253　梶鼻王子社（移転後） …… 85
図 254　供養碑 …… 85
図 255　鵜殿（「紀伊国南牟婁郡鵜殿村全図」） …… 86
図 256　地蔵祠と大小の庚申 …… 86
図 257　宝篋印塔と常夜燈 …… 86
図 258　庚申祠 …… 86
図 259　烏止野神社 …… 87
図 260　鵜殿西遺跡の調査 …… 87
図 261　鵜殿城跡主郭部 …… 87
図 262　貴祢谷社参道と矢渕中学校 …… 87
図 263　鵜殿氏石塔群 …… 87
図 264　鵜殿集落内の鵜殿経由道 …… 88
図 265　見松寺 …… 89
図 266　一里塚跡の石柱 …… 89
図 267　横手地蔵 …… 89
図 268　道引地蔵・首無地蔵 …… 89
図 269　道引地蔵（墨書） …… 89
図 270　粥森様 …… 90
図 271　龍光寺 …… 90
図 272　成川屋佐兵衛の墓 …… 90
図 273　中村神社 …… 90
図 274　地蔵菩薩坐像 …… 91
図 275　「熊中奇観」に見る舟番所 …… 91
図 276　「字渡シ上」の表記 …… 91
図 277　成川周辺の道と渡し …… 92

表目次

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名 …… ４
表２　曽根次郎坂・太郎坂、二木島峠・逢神坂峠道に関する記述 …… ８
表３　比音山清水寺、松本峠に関する記述 …… 47
表４　観音道の石造物一覧① …… 52
表５　観音道の石造物一覧② …… 53

関連史料目次

史料 …… 43

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

三重県内に所在する熊野参詣道（伊勢路）が、平成 16（2004）年７月７日に「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する資産として世界文化遺産に登録されてから、令和６（2024）年度で登録 20 周年を迎えた。三重県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）では、世界遺産登録後も、関係市町・地元関係者・学識経験者等との連携のもと、登録地域内外の道標や石仏、道の石段・石畳等、熊野参詣道伊勢路に関連する資産の調査を継続して実施するとともに、伊勢路においてまだ解明されていない道の区間や隣接する資産等の把握・情報収集に努めてきた。

およそ 20 年間のこうした取組の中、当時の状態が保存された新たな古道の存在が現地調査によって発見されたり、歴史的・学術的評価が不明であった資産に関する新たな情報が寄せられたりするなどの成果が得られた。これらの新たな資産（世界遺産未登録）の存在は地元の人々の間でも広く認められ、保存会等の方々による保全活動も熱心に行われるようになった。新型コロナウイルス感染症の影響で訪問者が一時的に減少した時期があったものの、状態よく保全された古道への来訪者は年々増加している。そして、地元を中心に、これらの新たな資産の歴史的・学術的価値を明らかにし、文化財指定および世界遺産追加登録による保護措置を要望する声が次第に大きくなってきた。

これまで、熊野参詣道伊勢路については、「熊野街道」として昭和 55（1980）年度に県教育委員会が「歴史の道」の調査を実施し、その成果を公表しているものの、調査から約 40 年が経ち、研究の進展によって新たな学術的価値が見いだされたり、内容修正が必要な箇所が生じたりしている実情もあった。

そこで、県教育委員会では、熊野参詣道伊勢路の参詣道としての歴史的・学術的価値を再評価するため、令和５（2023）年度より伊勢路の全域を改めて調査することとした。

２　調査報告書の位置づけ

今回の調査は、伊勢市から紀宝町に至る熊野参詣道伊勢路に関連する資産について、伊勢市からの巡礼路の順に実施し、令和５（2023）～７（2025）年度に分けて調査報告書によって成果を報告する。そして令和８（2026）年度以降の調査報告書においては、補足する資料等を示すとともに、総論的な視点でとらえた歴史的・学術的価値を評価する。

この調査報告書で示す歴史的・文化財的価値の評価は、新たな資産の文化財指定に供するとともに、既知の文化財の新たな価値づけに資するものと考えている。

第２章　熊野参詣道伊勢路の概要

１　概要

熊野参詣道は、紀伊半島の南端にある熊野三山（本宮、新宮、那智）へと向かう巡礼の道である。この巡礼道は複数のルートがあり、紀伊半島の東部を経て伊勢から熊野へ至る伊勢路、紀伊半島の西部を経て京・大坂方面から熊野へ至る紀伊路・大辺路・中辺路、高野山と熊野三山を結ぶ小辺路、吉野と熊野三山を結ぶ大峯奥駆道がある。これらは、古代末期から近世・近代に至るまで、貴賤を問わず多くの人々が熊野三山への信仰と憧憬によって歩んだ道であり、わが国の歴史・社会・文化を考える上で欠くことのできない交通遺跡であるため、平成 14（2002）年に国史跡に指定されている[1]。また、「史跡熊野参詣道」は熊野三山、高野山、吉野・大峯の霊場とともに、平成 16（2004）年 7 月 7 日に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。

伊勢路は、平安時代中期の日記[2]や紀行文[3]から 10 世紀ごろには利用されていたものと考えられるが、現在、古代末から中世に遡る道の存在は確認されておらず、世界遺産に登録されている道は、すべて近世以降に用いられたものである。なお、熊野参詣道の中で、10 世紀以降継続的に利用されていたのは中辺路のみであり、大辺路、小辺路も利用の盛期は近世以降となる。

江戸時代中期以降には、伊勢神宮への参詣が盛んとなり、伊勢神宮参詣後、西国三十三所巡礼に向かう者もあった。伊勢路はこのような西国巡礼者が通った道として評価されている[4]。巡礼者が通った経路については、当時の絵図（図１）や道中案内記[5]（表１）に見られるように、伊勢山田（伊勢市）を出発し、田丸（度会郡玉城町）で伊勢本街道から分岐して熊野へと至る道であったことがわかる。参詣道としては、紀伊路・大辺路・中辺路が熊野三山と京・大坂間の、小辺路が熊野三山と高野山間の双方向の道であったのに対し、伊勢から熊野への一方通行であったことが伊勢路の特徴といえる。なお、巡礼者が通った道は紀州藩により整備された街道でもあり、巡礼者以外の者は双方向に利用していたことには留意が必要である。

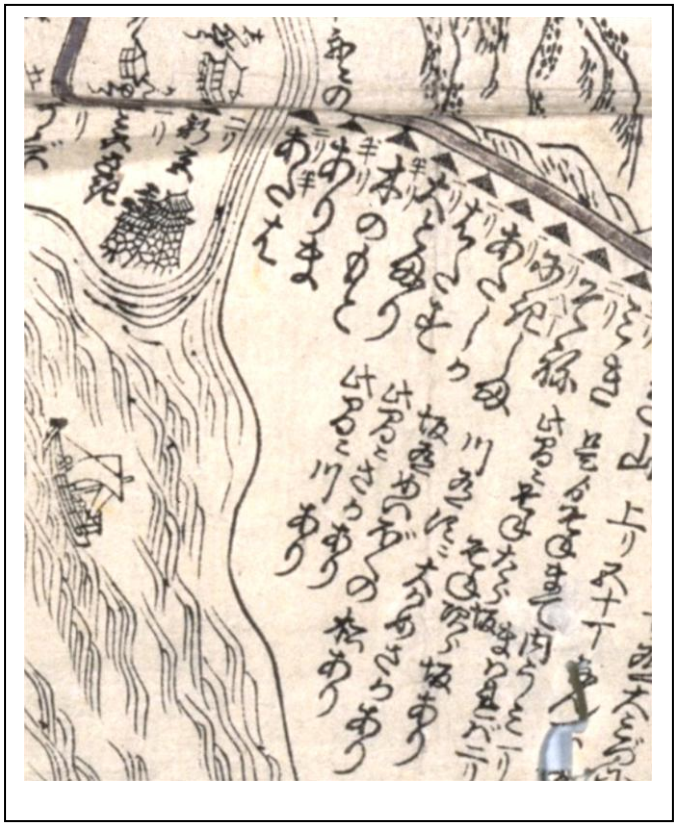
図１　熊野参詣道伊勢路と熊野三山の位置

２　調査対象

本書で記述する参詣道は、現在の尾鷲市から熊野市・御浜町を通り、紀宝町に至る、近世以前に利用された道を

対象とする。ちなみに、伊勢から熊野までの道は、時期による変遷、大水時の渡河不可による迂回路、寺社参詣のための寄り道など、さまざまな理由により複数存在する。本書では、道中案内記、絵図等の史資料、現地の踏査により確認された遺構・石造物などから、近世に最も多くの巡礼者によって用いられたと想定される道を中心とし、他の道は必要に応じ補足的に記述する[7]。

令和７（2025）年度は、尾鷲市から紀宝町までの参詣道、主に浜街道周辺の熊野道について調査を実施し、その成果を当報告書に記載した。また、世界遺産の追加登録候補資産については、県教育委員会職員のほか、学術調査活動員による現地調査も実施しており、度会町から南伊勢町および南伊勢町から紀北町にかけての参詣道に関わる道や資産は、門野隆一・竹田憲治・西村美幸が学術調査活動員として調査を実施した。



▲そね　此間ニそね太郎坂（ニリ）
そね次郎坂あり
▲にきしま　川有次ニ大かめさかあり（一リ八丁）
▲あたしか　坂有めいぼくの松あり（一リ）
▲はたす　此間ニさかあり（一リ）
▲大とまり　此間ニ川あり（半リ）
▲木のもと（半リ）
▲ありま（二リ半）
▲あたは

図２　**『西国三十三ヶ所めぐり絵図』**文化９（1812）年より一部抜粋（奈良県立図書情報館蔵）

註

（１）平成 14 年 11 月 15 日 文化審議会答申。
（２）『いほぬし』（『群書類従』巻第 327）。
（３）『権記』（『増補史料大成』）。
（４）『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」保存管理計画』2015 年、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会。
（５）『順礼案内記』享保 13（1728）年のほか、『西国三十三所道しるへ』元禄３（1690）年、『西国巡礼細見記』安永５（1775）年、『順礼道中指南車』天明２（1782）年、『西国巡礼道中細見増補指南車』文化３（1806）年、『新増補細見指南車』文政 12（1829）年、『天保新増西国順礼道中細見大全』天保 11（1840）年などが刊行された。
（６）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」2018 年。
（７）巡礼者が本書で記述する道以外の道を用いて熊野へ至った可能性を否定するものではない。

表１　道中案内等に見える伊勢山田～熊野新宮間の地名（6）

西国三十三所道しるへ	順礼案内記	西国巡礼細見記	順礼道中指南車	西国巡礼道中細見増補指南車	新増補細見指南車	天保新増西国順礼道中細見大全	国土地理院発行地図
元禄３年	享保13年	安永５年	天明２年	文化３年	文政12年	天保11年	平成10年
1690	1728	1755	1782	1806	1829	1840	1998
宇治橋	伊勢山田	山田	山田	山田	山田	山田	伊勢市
		やなぎ	やなぎ	柳	柳／河端	川端　柳	川端町
					ばんと村	ばんど村	坂東
					上地村	上地村	上地町
		（ゆた野）	ゆだの	いたの	いた野	ゆた野	湯田野
			のしば	のしば	しば		
					田丸新町	田丸新町	
たまる	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸	田丸
						野篠村	野篠
池辺						蚊野村	蚊野
	原	原	はら	原	原	原	原
あふか						野中村	野中
					鳴川村	鳴川村	成川
さな	あふかせ	あふかせ	大かせ	おおかせ	大がせ	相鹿瀬	相鹿瀬
						千代村	千代
					柳原村	柳原村	柳原
北とち原	とち原	とぢ原	とちが原	とちが原	栃原村 橡原	栃原	栃原
						神瀬村	神瀬
					下楠	下楠	下楠
あお	あを	あほ	あを	あを	粟生	粟生	粟生
三瀬村	ミせ	みせ	三せ	みせ	三瀬	三瀬	下三瀬
野尻	のじり	野じり	のじり	のじり	野尻	野尻	滝原
あそふ	あそ	あそ	あそ	あそ	阿曽	阿曽	阿曽
柏野	かしハの	柏野	かしわの	かしわの	柏野	柏野	柏野
山崎	さき	さき	さき	さき	崎	崎村	崎
こま	こま	こま	こま	こま	駒	駒村	駒
まゆミ	まゆミ	まゆみ	まゆみ	まゆミ	間弓	間弓	間弓
		大津村	大津村	大津村	大つ	大津	大津
梅が谷		梅が谷村	梅が谷村	梅が谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷	梅ヶ谷
					片上村	片上村	片上
にがう		から村	にがう村	ニがう村	かう村	かう村	東長島
長嶋	長嶋	長島	ながしま	長嶋	長嶋	長嶋	長島
古里		ふる里村	ふる里村	ふるさと村	古里村	古里村	古里
たう瀬		どうぜ村	どうぜ村		同瀬村	同瀬村	道瀬
三浦	ミうら	三うら	三うら	三浦	三浦	三浦	三浦
馬瀬	むまぜ	馬瀬	むまぜ	馬ぜ	馬瀬	馬瀬	馬瀬
鳥井村			とりい村	とりゐ村	鳥井村		
上里村		上里村	上ミ里村	上さと村	上里村	上里村	上里
中里村		中里村	中里村	中里村	中里村	中里村	中里
下里村		下里村	下里村	下里村			
						船津新田	新田 中新田
舟津		船津村				船津村	船津
香の本	この本	香の本	こうのもと	香の元	香本	木本	相賀
原びんの村		ひんの村	びんの村	びんの村	びんの村	びんの村	便ノ山
			まごせ村				鷲下
おわし	おハし	おわし	おわし	尾わし	尾鷲	尾鷲	尾鷲市
					八之濱村	八之濱村	矢浜
三鬼	ミき	三鬼	みき	三鬼	三鬼	三木	三木里町
かた					加田	加田村	賀田町
曽根	そね	そね	そ禰	そね	曽祢	曽祢	曽根町
二鬼嶋	にきしま	にぎ島	にぎじま	二鬼嶋	二鬼嶋	二木嶋	二木島町
あたしか	あたしか	あたじか	あたしか	あたしか	新鹿	新鹿	新鹿町
はたす	はだす	はだす	はだす	はだす	波田須	波田須	波田須町
大泊	大とまり	大とまり	大とまり	大泊	大泊	大泊	大泊町
木之本	木の本	木の本	木の元	木の本 木の元	木本	木本	木本町
有馬	ありま	有馬	ありま	ありま	有馬	有馬	有馬町
			一木村	一木村		市木村	下市木
あたわ	あたハ	あたわ	あたわ	あたわ	阿田和	阿田和	阿田和
伊田		伊田村	井田村	井田村	井田村	井田	井田
うハ野					宇和埜村	宇和野村	上野
なる川		なる川	なる河村	なる川村	鳴川村	鳴川村	成川
新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮	新宮市

第３章　熊野参詣道伊勢路（尾鷲市・熊野市・御浜町・紀宝町）

１　曽根から甫母・二木島を経て新鹿

○　曽根

曽根次郎坂・太郎坂　熊野道の曽根次郎坂・太郎坂は、尾鷲市曽根町の南側から甫母峠を経て、熊野市二木島町に至る峠道である（図７・８）。道中日記ほか文献資料では「曽根次郎坂、曽根太郎坂」などと記載される（表２）。また、『巡礼通考』（延宝８〔1680〕年）には、「坂アリ、登リヲソ子次良ト云、下リヲソ子太良ト云、上下一里半ナリ、コノ峠ニ暫ク休ラヒテ南海ヲ遠タ望メハ渺々タル波ノヒニヨリサニ八嶋山見ユル」とあり、峠道から海への眺望について言及されている。

曽根次郎坂・太郎坂の登り口は向井地墓地付近にあり、近現代のコンクリート舗装の階段や土道に延石を据えた道が墓地内を通る（図３）。墓地を抜けた先には、六字名号碑や庚申祠などがある（図４）。この地点から甫母峠にかけた登り道は、地形に沿った山寄せの道であり、路面には主に自然石を用いた石段や石畳が確認できる（図５）[(1)]。『熊野日記』（天保 10〔1839〕年）では、曽根次郎坂・太郎坂について「この山もたたみ石あり」という記述がある。

甫母峠までの登り道の区間には「曽根の一里塚」があり、道を挟んだ両側に塚跡が確認できる（図６）。塚跡は２基あり、平面は直径約５ｍの円形とみられ、高さ１～1.5ｍほど残る。また、この区間には、江戸時代以降の石切場跡がある。賀田湾に向けて発達した尾根や谷には石切場や転石が点在しており、曽根次郎・太郎坂の石畳の一部には切り出した石材が使用されている（図 19）[(2)]。

甫母峠は、中世以前に志摩国と紀伊国の国境とされ、現在では尾鷲市と熊野市の市境である。峠は延長約 30ｍ、幅約10ｍの平場となっており、「紀伊国南牟婁郡甫母浦全図」（明治 19〔1886〕年）には、字名「傍示茶屋」とある（図９）。この地点には『西国三十三所名所図会』（嘉永６〔1853〕年）などで記される「ホウチ茶屋」や「甫母地茶屋」と呼ばれる茶屋があったと推測される（表２）。『熊野日記』には、「峠にいたれば茶屋ありて、まへに地蔵堂あり」という記述がある。峠の祠（石室）には地蔵菩薩坐像が安置されており、台座には宝暦７（1757）年の銘がある。

図３　尾鷲市曽根町の向井地墓地

図４　曽根次郎坂・太郎坂　登り道

図５　曽根次郎坂・太郎坂　登り道の石段

図６　曽根の一里塚

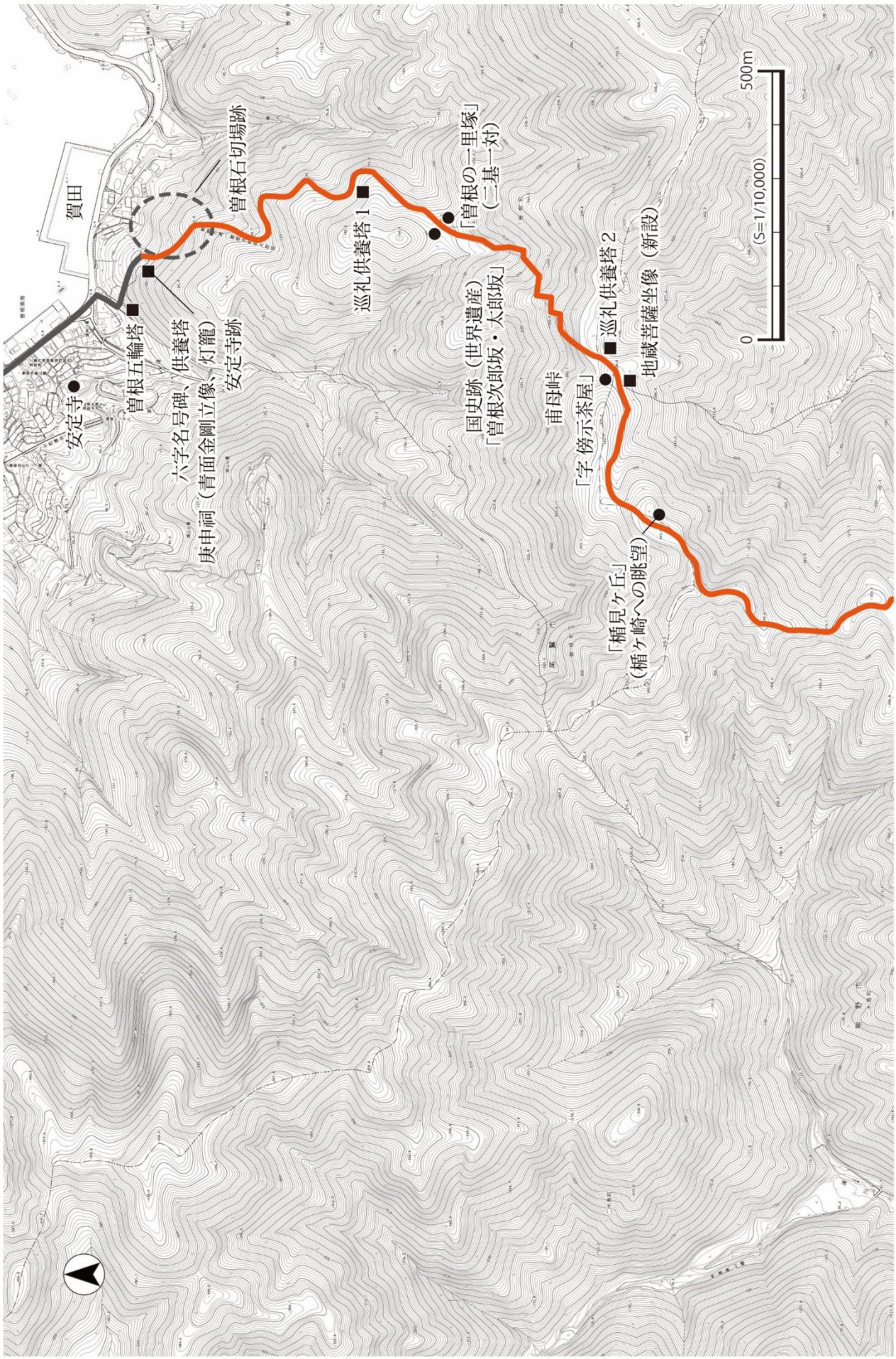


図７　曽根次郎坂・太郎坂①（1/10, 000）

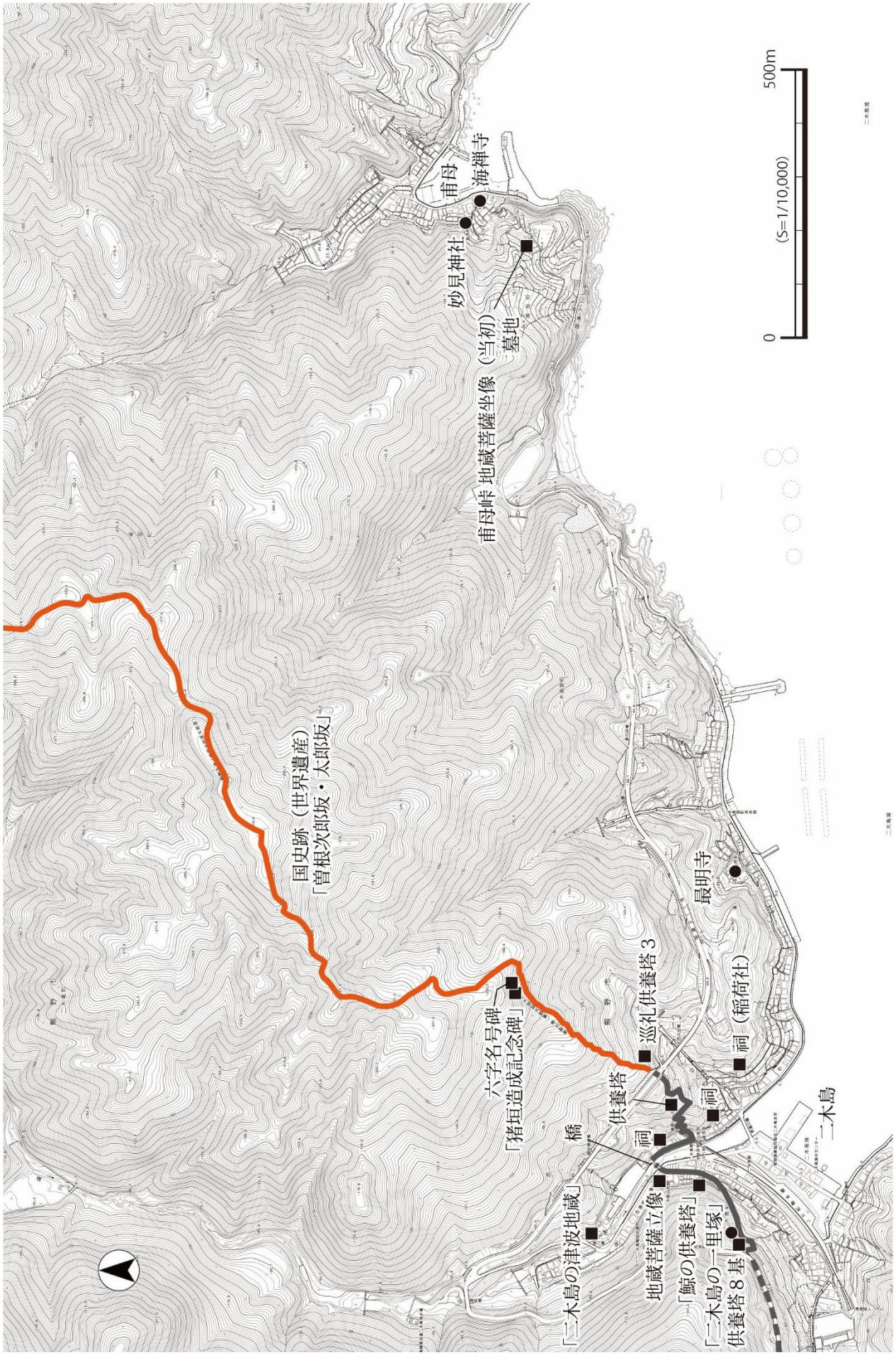


図８　曽根次郎坂・太郎坂②（1/10,000）

表２　曽根次郎坂・太郎坂、二木島峠・逢神坂峠道に関する記述

№.	資料名	刊行年	曽根次郎坂・太郎坂	二木島峠道、逢神坂峠道
1	巡礼通考　一名　西国名所記	延宝８(1680)	坂アリ、登リヲソ子次良ト云、下リヲソ子太良ト云、上下一里半ナリ	狼坂　茶屋アリ
2	西国三十三所道しるへ	元禄３(1690)	曽根次郎曽根太郎という坂あり	大かめ坂という坂 坂中茶屋あり
3	伊勢西国道中日記	享保元(1716)	此間そね太ろう、そね二ろうとて、峠二つ有り	大かめ坂有
4	巡礼案内記	享保13(1728)	そね大ら坂そね二ら坂	大かめ坂
5	西国巡礼細見記	安永５(1776)	そね太郎坂そね次郎坂あり	大かめ坂
6	順礼道中指南車	天明2(1782)	そ禰太郎坂、山中に茶屋あり、そ禰次郎坂	大かめ坂茶屋あり
7	西国順行要路談	天明3(1783)	上下一里ノ坂アリ登リシ曽根治郎ト云下シ曽根太郎ト云	大亀坂上下一里坂ノ中程に茶屋アリ
8	順礼道中記	寛政3(1791)	そね大郎坂、そね次郎坂	大かめ坂
9	巡礼しなん車	寛政11(1799)	そ祢太郎坂、山中に茶やあり、そね次郎坂	大かめ坂茶屋あり
10	西国巡礼道中細見増補指南車	文化３(1806)	一リ八丁曽根た郎坂、山中に茶屋あり、曽根次郎坂	おうかめ坂茶屋あり
11	新増補細見指南車	文政12(1829)	曽根太郎曽根次郎坂難所なり、坂一ツ也	大亀坂上下一リ
12	熊野日記	天保10(1839)	この曽根村よりたゞちにかゝる坂を曽根太郎曽根次郎といふ	この村よりただに狼坂といふにかかる
13	天保新増　西国順礼道中細見大全	天保11(1840)	曽根太郎曽根次郎坂	大亀坂
14	西国三十三所道名所図絵	嘉永６(1853)	甫母峠　俗に曽根太郎坂曽根次良坂という、之坂二つあるにはあらず峠より村の領分を分かつ故に其れはいうなり（略）峠に茶屋一軒ありて俗にホウチ茶屋といふ是又甫母地茶屋の轉語なり	相神坂　或ハ大亀坂狼坂ともいふ
15	熊中奇観	江戸時代後期	曽根次郎坂登り十八町、甚険にて難所なり、傍示茶屋俗に法善茶屋といふ、峠より少々前辻堂に石地蔵有、是より絶頂までは四十町ありといふ、峯通はげ山にて、左に入海、南海の浦の見へて景色よく東南を望めば（略）楯が崎がよくみゆる、此峯通を俗に太郎坂といふ	次の坂を逢神坂といふ 俗に大かめ坂又狼坂ともいふ、此坂半より楯か崎よく見ゆる

出典：三重大学人文学部　塚本明研究室『道中日記に描かれた三木里～曽根次郎坂太郎坂』2008年。左記にない文献は原典より記載。

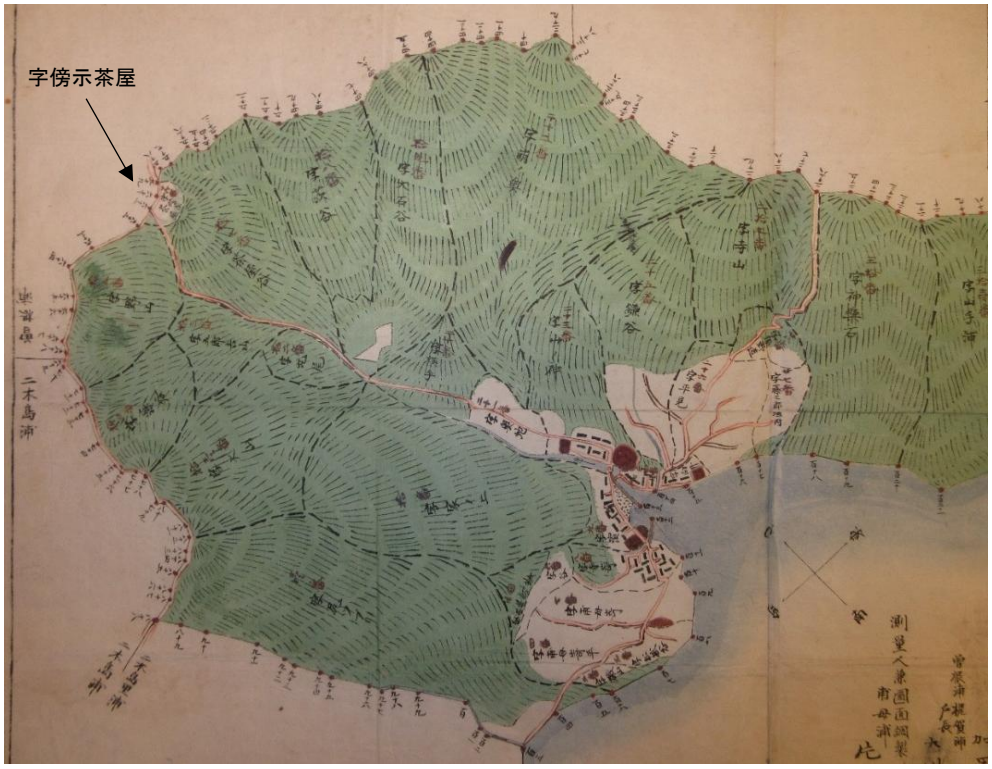


図９　「紀伊国南牟婁郡甫母浦全図」部分

この区間には、巡礼供養塔が２基あり、登り口から峠までの中間地点と峠付近にみられる。巡礼供養塔１は、文政 13（1830）年の武州足立郡中之田村（埼玉県さいたま市）からの巡礼者のもの（図 20）、巡礼供養塔２は、寛政７（1795）年の武州葛飾郡小松川村（埼玉県吉川市）からの巡礼者のものである（図 21）。

【六字名号碑】　尾鷲市指定有形文化財。向井地墓地を抜けた先に所在する（図 16）。享保３（1718）年に安定寺の元空竜辰和尚が、巡礼者の安全を祈願し建立したものである。この地点は、弘治年間（1555～1558 年）に佐佐木宇右衛門正吉（曽根弾正）が関所を設けた場所とされる。

図 10　曽根次郎坂・太郎坂　九十九折の登り道

図 11　甫母峠

図 12　甫母峠の祠と地蔵菩薩坐像

図 13　甫母峠の地蔵菩薩坐像（新設）

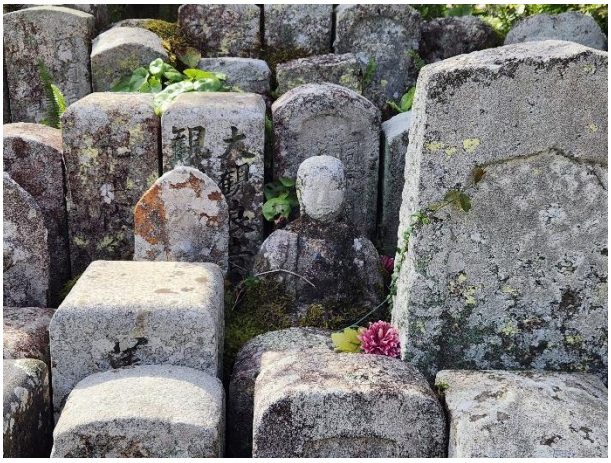


図 14　甫母峠から移転された地蔵菩薩坐像（甫母町）

図 15　熊野市甫母町の墓地にある地蔵菩薩坐像

江戸時代に関所が廃止された後、寛文元(1661)年に安定寺がこの地に建立され、文政 11(1828)年に現在地へ移転したと伝わる[3]。全高 126 cm、幅 39 cm、奥行 31 cm。正面「南無阿弥陀仏」、右面「當寺三代　元空」、左面「戊戌年三月日」。

六字名号碑の隣には、供養塔が 1 基ある(図 16)。全高 66 cm、幅 24.5 cm、奥行 13.5 cm。正面「月□妙□信女」、銘下に線刻の蓮華文がみられる。

【曽根（弾生）五輪塔】　尾鷲市指定有形文化財（図 17)。向井地墓地に所在する。室町時代末期の五輪塔、江戸時代初期の五輪塔と板石塔婆があり、五輪塔は曽根弾正とその夫人、板石塔婆は長男のものとされる。『紀伊続風土記』（天保 10〔1839〕年）には、「曽根弾正の墓は安定寺にあり」と記述される。

【庚申祠】　六字名号碑付近に所在する（図 18)。祠の中には、青面金剛立像が安置される。青面金剛立像は全高 68 cm、幅 30 cm、奥行 20 cm。

【曽根石切場跡】　江戸時代に尾鷲地域一帯を治めた紀州藩に御用石として重宝された石材「曽根石」の石切場跡で、江戸時代前期から中期頃のものと考えられる（図 19)。周辺の小杉Ｃ石切場跡は、尾鷲市指定記念物（史跡）[4]。

【甫母峠の地蔵菩薩坐像】　甫母峠の石積みの祠内にある（図 12～13)。現在の地蔵菩薩坐像は、昭和に新設されたもので、当初の地蔵菩薩坐像は昭和 55（1980）年頃に熊野市甫母町の海禅寺から南西側にある墓地に移設された（図８・14）[5]。蓮華座と台座は当初のもので、台座に宝暦７（1757）年の銘があり、願主は京都紫野の大徳寺禅門浄佐である。なお、大紀町にある三瀬坂峠道の地蔵菩薩坐像は、宝暦６(1756)年の銘をもち、京都村崎野（紫野）の大法寺清祐院が施主で、京都紫野の寺院が関連する石造物である[6]。蓮華座は高さ 13 cm、幅 38 cm、奥行 31 cm。台座は高さ 31 cm、幅 24 cm、奥行 24 cm。台座正面「願主　京紫大徳寺地中禅門浄佐」、右面「宝暦七丁丑七月日」。なお、甫母町の墓地には、類似した地蔵菩薩坐像があり、関係性が想定される(図 15)。地蔵菩薩坐像は像高 40 cm、幅 36 cm、奥行 30 cm。蓮華座は全高 21 cm、幅

図 16　六字名号碑と供養塔

図 17　曽根（弾生）五輪塔

図 18　庚申祠　青面金剛立像

図 19　曽根石切場跡

41 ㎝、奥行 35 ㎝。台座上は全高 30 ㎝、幅 23 ㎝、奥行 19 ㎝。台座中は全高 18 ㎝、幅 51 ㎝、奥行 46 ㎝。台座下は全高 18 ㎝、幅 84 ㎝、奥行 84 ㎝。台座正面「心□自凉女」、台座右「元文元」、台座左「辰七月日」。

【巡礼供養塔１～２】　巡礼供養塔１は、文政 13（1830）年銘で、現在の埼玉県さいたま市からの巡礼者のもの（図 20）。塔高 53 ㎝、幅 26 ㎝、奥行 15 ㎝。正面「東雲須道信士」、右面「武州足立郡中之田村/俗名八郎」、左面「文政十三寅四月廿四日」。

巡礼供養塔２は、寛政７（1795）年銘で、現在の埼玉県吉川市の巡礼者のもの（図 21）。塔高 43 ㎝、幅 18 ㎝、奥行 15 ㎝。正面「速心向道信士」、右面「寛政七□午四月二日」、左面「武州葛飾郡小松川村/俗名茂兵衛」。

図 20　巡礼供養塔１

図 21　巡礼供養塔２

○　甫母

甫母峠から二木島　曽根次郎坂・太郎坂の熊野道は、甫母峠を越えて約 400m進むと、この区間の最高所である標高約 340mの地点に至る（図７）。この地点は、「楯見ヶ丘」と地元で呼ばれており、二木島湾の岬に突き出た岩壁「楯ヶ崎（たてがざき）」を望むことができる（図 22・23・32）。『西国三十三所名所図会』では、「楯ヶ崎　甫母の浦の東南十八丁許にあり。高五十間、廻九十間許ありと云。これ街道にはあら

ず。土人云、此地むかしは伊勢紀伊の国境なりしとぞ」とある。『熊中奇観』（江戸時代後期）では、「二鬼嶋　（略）海へ出たる鼻を楯か崎という名所なり」とある。この他には、曽根次郎坂・太郎坂からの眺望を讃える記述がよくみられることが指摘されている[7]。『熊野日記』には、「峠をすぎては、海ばらもことさらによくみえつつ、島に波のよるさまもおもしろし」とある。

甫母峠から二木島集落までは尾根伝いの道となり、急傾斜地には石段が連続してみられ、緩傾斜や平場になると石段や石畳が断続的となる（図 24）。二木島集落に近づくと高さ約２～３ｍの猪垣（ししがき）に沿った道となり、ここには猪垣造成の由来を記した「猪垣造成記念碑（ししがきぞうせいきねんひ）」がある（図 25・28）。この銘から、猪垣は寛保元（1741）年３月上旬から翌年２月にかけて、頭取才領の松場清右衛門が代表となり

図 22　「楯見ヶ丘」からの楯ヶ崎の眺望

図 23　楯ヶ崎の近景（熊野市甫母町から）

図 24　曽根次郎坂・太郎坂　下り道の石段・石畳

図 25　曽根次郎坂・太郎坂　下り道沿いの猪垣

図 26　曽根次郎坂・太郎坂　二木島側降り口

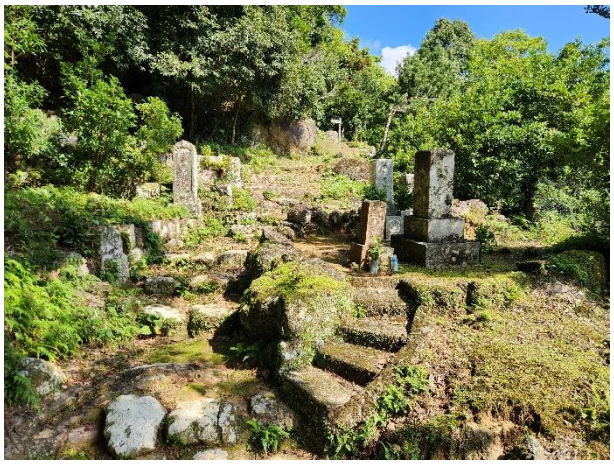


図 27　国道 311 号から二木島の集落間にある墓地

築造したことがわかる。この猪垣の付近には、３ｍ四方で深さ約３ｍの「猪落（ししお）とし」がある。『熊野日記』には、「坂の中に穴ふかくほりて、はしをかけたるところ有。このはしは、よるはとりはなつよし。猪の畑ものをくはざる為にせしにて、ししおどしというよし也」と記述がある。

降り口付近には、巡礼供養塔３があり、文政３（1820）年の大嶋浦の濱屋又治郎倅芳松という巡礼者のものである（図 26・30）。熊野道は、国道 311 号と交差し、これより二木島集落に至る区間は急傾斜地で、石段が設けられている。墓地や段々畑の中を通り抜ける道であり、石段の設置時期は定かではないが、熊野道を踏襲していると考えられる（図 27）。石段を下ると、熊野市二木島町の集落北側にあたる逢川（あいかわ）河口付近に到着する。

【楯ヶ崎】　三重県指定名勝及び天然記念物（図 22・23）。二木島湾の北側の岬。海上に突出した花崗斑岩の一大岩塊で柱状節理がみられる。高さ約 80ｍ、周囲約 550ｍに及ぶ [8]。

【猪垣造成記念碑】　熊野市指定有形民俗文化財（図 28）。切石に枠取りをし、内側に銘を入れる。石材は高さ 71 ㎝、幅 130 ㎝。枠部の高さ 47 ㎝、幅 69 ㎝。正面「寛保元歳/酉三月上旬ヨリ/戌二月迄築立/之也/垣頭取才領/松場清右衛門」。

【六字名号碑】　「猪垣造成記念碑」付近にある（図 29）。高さ 45 ㎝、幅 31 ㎝、奥行 11 ㎝。正面「南無阿弥陀佛」。

【巡礼供養塔３】　降り口付近にある巡礼供養塔で、文政３（1820）年銘のもの（図 30）。大嶋浦は、現在の和歌山県西牟婁郡串本町（にしむろぐんくしもとちょう）か。高さ 45 ㎝、幅 21 ㎝、奥行 19 ㎝。正面「弾山道的信士」、左面「文政三辰二月廿九日」「大嶋浦/濱屋又治郎倅芳松/行年十七歳」。

図 28　猪垣造成記念碑

図 29　六字名号碑

図 30　巡礼供養塔３

○ 二木島

二木島の道　熊野道は、熊野市二木島町に至ると逢川（あいかわ）左岸沿いを上流に向かい、二木島公民館前の橋で右岸へ渡る（図 31・32・34）。「紀伊国南牟婁郡二木島浦全図」からは、熊野道がこの橋付近で渡渉していることが読み取れる（図 31）。逢川に関する記述には、『熊野日記』に「二木嶋は家数三百五十軒余、中に川を隔つ、間川といふ、橋をわたす、此程（橋カ）むかしより中程にてつぐ、相傳此所伊勢・熊野の堺にて太神宮熊野へ請ふて給ふには、権現此所まて出迎給ふ、仍而逢川、次の坂を逢神坂といふ、両神逢給ふとの謂なり」とあって、逢川には橋があり、伊勢と熊野の境界と認識されていたようである。

逢川の橋を右岸へ渡った先には、コンクリート積の堂宇（どうう）があり、江戸時代の地蔵菩薩立像が安置されている（図 35）。二木島公民館前の路地を通り、住宅前の階段を上がった先に「鯨の供養塔」がある。さらに、熊野道は住宅前を抜けると段々畑に面した石段の道となり、国道 311 号との合流地点まで登り道が続いていく（図 36）。石段の道には、「二木島の一里塚」や「キリシタン灯籠」、庚申祠２基、巡礼供養塔などがある（図 37～41）。国道 311 号と合流した後、現道沿いに西へ約 200m進むと二木島峠道（ぎしまとうげみち）・逢神坂峠道（おうかみざかとうげみち）の国史跡指定（世界遺産登録）区間となる。

二木島町には、熊野道の他に甫母町に向かう陸路があり、この道は二木島湾の北側を通る（図 31）。その経路上には最明寺（さいみょうじ）があり、『西国三十三所名所図会』に寺院や本尊の由来に関する記述がみられる（図 42）。また、同絵図には「英虞子（あこし）明神社」が逢川の橋の東側にあり、「牟婁子（むろし）明神社」が橋の西側にあることが記されている。これは、二木島湾の入口にあたる東側の岬（英虞崎（あご））の「阿古師（あこし）神社」、西側の岬（牟婁崎（むろ））の「室古（むろこ）神社」を示すと考えられる（図 32）。

図 31　「紀伊国南牟婁郡二木島浦全図」部分

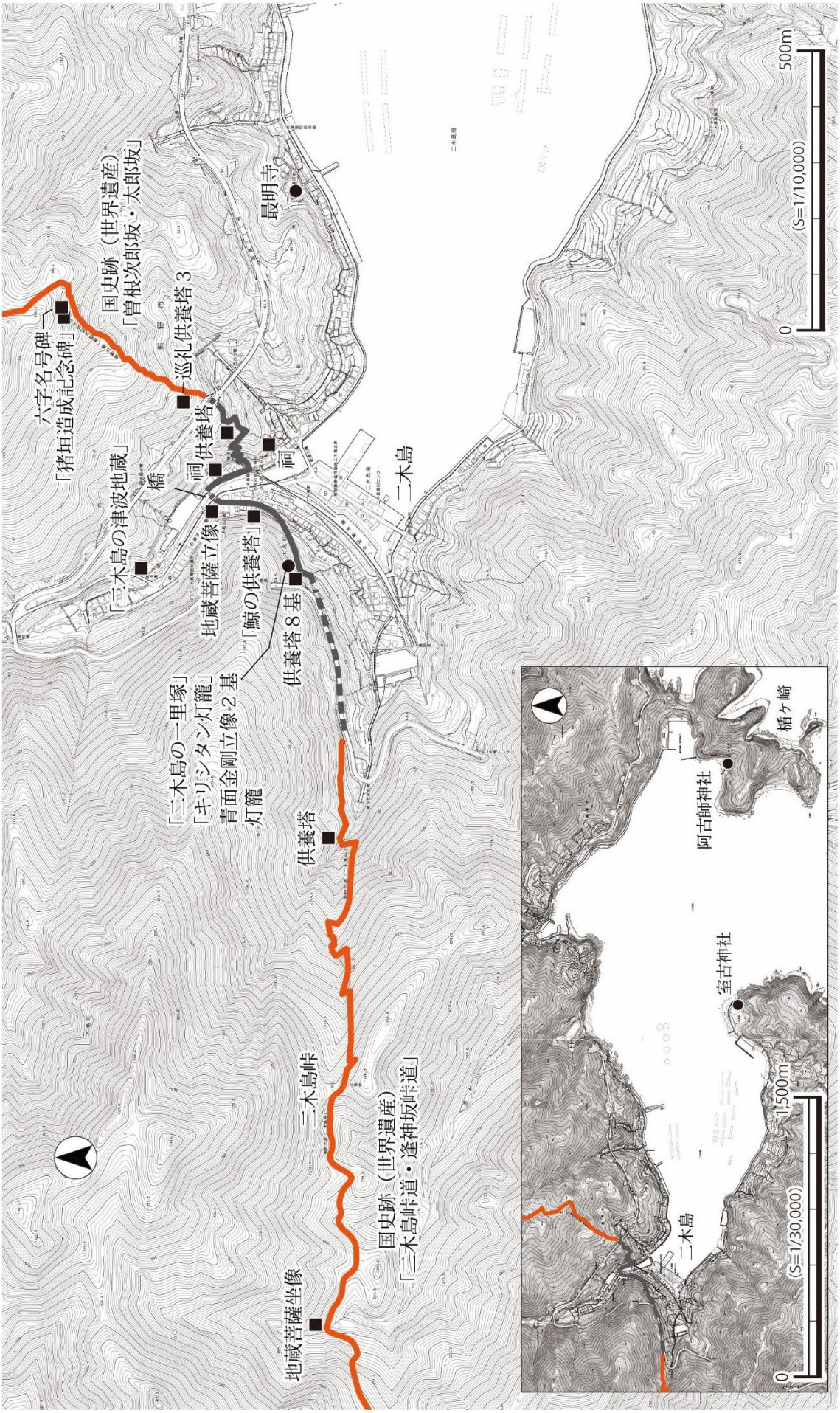


図 32　二木島峠道・逢神坂峠道①（1/10,000）

図 33　二木島峠道・逢神坂峠道②（1/10, 000）

二木島町の逢川上流側には、「二木島の津波地蔵」がある。嘉永７（1854）年 11 月４日の地震により 10mを超える津波が湾内に押しよせ、民家が高台の 28 軒のみを残して壊滅する被害が発生したと記録されており、この地蔵は津波が到達した地点に安置されている（図 43）。当時の造り酒屋「いずみ屋」の主人が亡くなった住民の供養のために、自然石を用いて建立した地蔵と伝わる[9]。

図 34　二木島集落の逢川渡渉地点

図 35　二木島公民館付近の地蔵菩薩立像

図 36　二木島集落から一里塚間の道

図 37　二木島の一里塚にある庚申祠２基

図 38　二木島の一里塚にある庚申祠内の石造物

図 39　供養塔１

【地蔵菩薩立像】　二木島公民館から逢川上流に向け約 20mの地点で、コンクリート積の堂宇内にある地蔵菩薩立像（図 35）。舟形光背の中央に像があり、蓮台には線刻の蓮華文がみられる。全高 51 cm、幅 35 cm、奥行 26 cm。堂宇には、現代の三界萬霊碑（さんかいばんれいひ）も安置されている。

【鯨の供養塔】　三重県指定有形民俗文化財。塔高 99 cm、幅 36 cm、奥行 17 cm。台高 15 cm、幅 45 cm、奥行 43 cm。正面「鯨三十三本供養塔」、右面「寛文十一龍集辛亥」、左面「三月吉日　木下彦兵衛建」。

【二木島の一里塚】　三重県指定史跡（図 37）。塚の形状は不明瞭であるが一里塚と伝わり、庚申祠が２基みられる。石積みの庚申祠には、青面金剛立像と熊野市指定有形民俗文化財の「キリシタン灯籠」が安置されている（図 38 左）。青面金剛立像は全高 63 cm、幅 30 cm、奥行不明。キリシタン灯籠は全高 95 cm、幅 27 cm、奥行不明。

　コンクリートブロック積の庚申祠にも、青面金剛立像が安置されている（図 38 右）。青面金剛立像は全高 65 cm、幅 27 cm、奥行 21 cm。

【供養塔１～８】　「二木島の一里塚」から約 20 m石段を登った地点にある供養塔８基（図 40･41）。供養塔１が、信州松本（現在の長野県松本市）からの巡礼者の供養塔とみられる（図 39）。これらの供養塔は、昭和 57（1982）年頃に地中に埋没していたものを掘り出して、現在地へ配置したものである[10]。

供養塔１　正面「復雲信士」、左面「信州松本在和田村善六エ門」、右面「文政六未四月四日」。塔高 46 cm、幅 20 cm、奥行 14 cm。

供養塔２　正面「亮者信士」、右面「享保十八年」左面「八月十五日」。塔高 57 cm、幅 25 cm、奥行 14 cm。

供養塔３　正面「茲養信女」、右面「天明二年」、左面「七月二十四日」。塔高 43 cm、幅 19 cm、奥行 14 cm。

供養塔４　正面「寂明禅定門」、右面「寛政八年」、左面「八月十一日」。塔高 44 cm、幅 21 cm、奥行 11 cm。

供養塔５　地蔵菩薩立像　正面「秋獄□□春光信

図 40　供養塔１～４

図 41　供養塔５～８

図 42　海福山最明寺

図 43　二木島の津波地蔵

女　幻覚信女」。塔高 38 ㎝、幅 22 ㎝、奥行 19 ㎝。
供養塔６　地蔵菩薩立像　銘文なし。塔高 37 ㎝、幅 21 ㎝、奥行 15 ㎝。
供養塔７　正面「雲岩和涼士」、右面「宝暦七年十月九日」。塔高 45 ㎝、幅 22 ㎝、奥行 21 ㎝。
供養塔８　正面「□翁常夢信士/秋称□葉信女」、右面「宝暦七年正月十三日」、左面「安永二年七月二日」。塔高 55 ㎝、幅 24 ㎝、奥行 14 ㎝。

【海福山最明寺】　二木島湾の北側に所在する（図 42）。明応年間（1492～1501 年）の開山と伝わり、本堂は三重県指定有形文化財（建造物）、本尊木造阿弥陀如来立像は三重県指定有形文化財（彫刻）である。

【二木島の津波地蔵】　熊野市指定有形民俗文化財（図 43）。津波地蔵は、津波の到達地点に祀られており、地蔵の頭部と胴部に見立てた自然石を重ねたものである。全高 83 ㎝、頭部幅 12 ㎝、頭部奥行 12 ㎝、胴部幅 34 ㎝、胴部奥行 25 ㎝。

図 44　二木島峠道の登り道

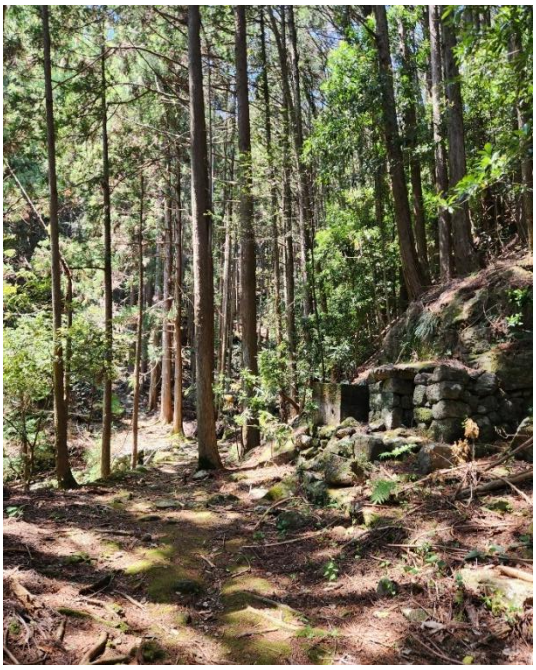


図 45　二木島峠道の沢付近

二木島峠道・逢神坂峠道　国道 311 号の擁壁に二木島峠道・逢神坂峠道への取り付きの階段があり、その先が国史跡（世界遺産登録）区間の登り口となる（図 32・44）。この区間は「二木島峠」と「逢神坂峠」の２カ所の峠があり、熊野市新鹿町へ至る道である。文献資料では、主に二木島から新鹿区間の峠道を「逢神坂（相神坂）」、「大亀（大かめ）坂」、「狼（大かみ）坂」と記している（表２）。また、『熊野日記』には、上記の「逢神坂」の由来とともに「俗に大かめ坂又狼坂ともいふ、此坂半より楯か崎よく見ゆる、西の方は遊鬼崎・新鹿・川口・鬼本浦までみゆる」とある。現在、この区間では植林によって沿岸部への眺望を得られないが、江戸時代には樹木で遮られることなく熊野灘を一望できたことがわかる。

登り口から二木島峠までは、谷沿いを登る山寄せの道で、石段や石畳が敷かれている。沢を越える地点に石積の橋が設置され、その手前には祠（石室）と供養塔がある（図 45・46）。ここから峠までの急峻な地点は、九十九折（つづらおれ）の道で高度を徐々に上げていく。二木島峠は、標高約 250ｍの地点にあり、斜面を一部開削（かいさく）して延長約 10ｍ・幅約５ｍの平場を設けている（図 47）。

図 46　沢手前の祠にある供養塔

二木島峠から逢神坂峠までの中間には沢があり、ここま

での区間では石段・石畳は断続的で、土道の山寄せ道が主体となり、１カ所で尾根を開削して道を通している。沢のある谷には、地形に沿って段々畑の石積みが並び、その脇を道が通っていく（図 48)。沢を越える地点には石積みの橋が設置され、その手前には石積祠（石室）と供養塔がある（図 49・50)。沢から逢神坂峠までの区間は谷沿いの山寄せ道で、石段・石積が敷かれた登り坂が続いていく。

逢神坂峠は、標高約 285ｍの地点にあり、延長約 20ｍ・幅約 10ｍの平場がある（図 51)。『西国道中記』（宝永３〔1706〕年）には、「二鬼嶋村よりあだしか江壱里（中略）此間峠ノ上ちゃ屋有、狼沢と云、然間狼峠と云」とあり、茶屋の存在がうかがえる。このほか、『西国順行要路談』（天明３〔1783〕年）で峠に茶屋があることが記述されている（表２)。

逢神坂峠から下り道約 500ｍの区間は、急峻な谷地形に沿った九十九折の石畳・石段の道が続き、大きく高度を下げていく（図 52)。その後は、道は等高線に沿って緩やかに高度を下げ、新鹿まで至る。この区間は石畳・石段が設けられているが、平坦地については土道が主体となる。一部には、尾根を開削して石段を設置した区間もある（図 53)。熊野市新鹿町に至ると、降り口の脇には庚申祠がある（図 54)。

【供養塔】　登り口から二木島峠まで区間にある石積祠内の供養塔（図 46)。正面には銘文があり、その下部には線刻の蓮華文がみられる。正面「木母子（中央上）/幻世何子（右下）/露光子（左下)」。塔高 50 ㎝、幅 19 ㎝、奥行 14 ㎝。

【供養塔（地蔵菩薩坐像）】　二木島峠から逢神坂峠まで区間にある石積祠内の供養塔（図 50)。施主の善吉は、二木島の庄屋と伝わる。舟形光背で中央に地蔵菩薩立像を描く。像下「庄五郎/施主/善吉」。高さ 39 ㎝、幅 20 ㎝、奥行不明。

【庚申祠】　二木島峠道・逢神坂峠道の降り口にある庚申祠（新鹿の庚申）で、青面金剛立像を祀る（図 54)。青面金剛立像は全高 42 ㎝、幅 26 ㎝、奥行不明。

図 47　二木島峠の平場

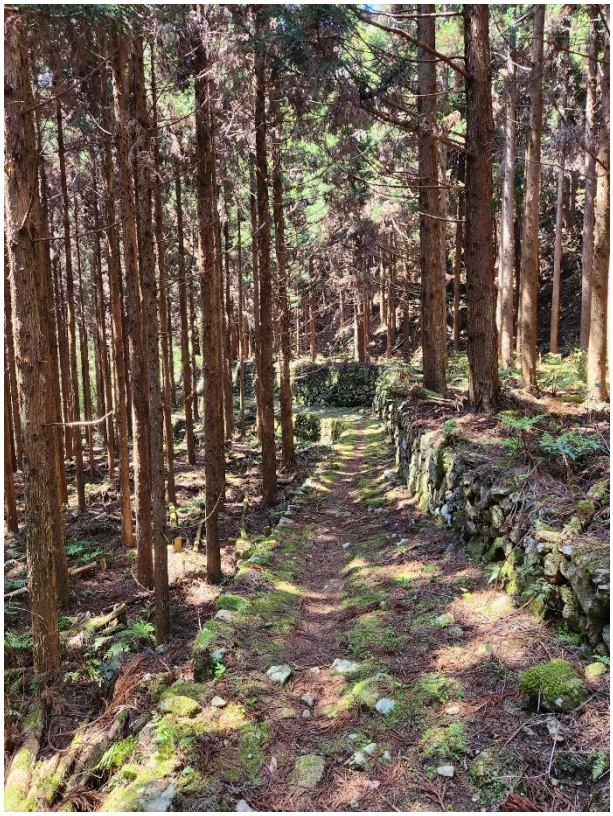


図 48　二木島峠から逢神坂峠間の下り道

図 49　二木島峠から逢神坂峠間の沢

図 50　沢手前にある祠と供養塔

図 51　逢神坂峠の平場

図 52　逢神坂峠道　九十九折の下り道

図 53　逢神坂峠道　開削の道と石段

図 54　逢神坂峠道　降り口の庚申祠

註

（1）三重県・三重県教育委員会『熊野古道と石段・石畳』2007 年。
（2）伊藤裕偉「尾鷲市曽根の石切場遺跡」『紀伊考古学研究』第 28 号、紀伊考古学研究会、2025 年。
（3）尾鷲市「尾鷲市の文化財」尾鷲市役所ホームページ（https://www.city.owase.lg.jp/）2026 年 3 月。
（4）前掲註（3）。
（5）三重県教育委員会『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州地域～』2009 年。
（6）三重県教育委員会『熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅰ（伊勢市～大紀町）』2024 年。
（7）三重大学人文学部 塚本明研究室『道中日記に描かれた三木里～曽根次郎坂太郎坂』2008 年。
（8）熊野市教育委員会『熊野市の文化財』2014 年。
（9）前掲註（8）。
（10）熊野市史編纂員会『熊野市史』下巻、1983 年。

２　新鹿（あたしか）から波田須（はだす）

○新鹿

新鹿の道　二木島峠道・逢神坂峠道の降り口から熊野市新鹿町の集落に向かうには、湊川と里川を渡る（図 55・56）。『熊野日記』（天保 10〔1839〕年）には「新鹿川水いずれば舟渡し、川口海にちかし」とある。現在の熊野道は、湊川橋を渡り、集落内の舗装路を抜けて里川に至る（図 57・58）。里川の渡渉地点は、「紀伊国南牟婁郡新鹿村全図」（明治 18〔1885〕年）と現況を比較すると、里川橋がある地点と推定される。里川橋の右岸側には、熊野道と伊勢道を示す天保２（1831）年の道標があり、銘の内容から熊野市飛鳥（あすか）町から八丁坂峠（はっちょうさか）を越える道と熊野道との丁字路に設置されていたと推定できる（図 59）。この道標は、元の位置から移動しているとみられ、かつて里川橋から約 50m上流にあったと説明されるが、具体的な場所は不明である[(1)]。「紀伊国南牟婁郡新鹿村全図」から道標の設置地点を推定すると、八丁坂峠からの道と熊野道が合流する丁字路は里川の両岸にあり、この２カ所が候補地となる（図 55・56）。

里川橋からは、国道 311 号の舗装路に沿って徳司神社（とくしじんじゃ）の方向へ進み、新鹿湾の南側から山道を抜けて熊野市波田須町へと向かう（図 61・62）。山裾から波田須町との境界にある庚申祠までの約 150mの登り道は、地形に沿った山寄せの道である（図 63）。この区間は、段々畑に面してコンクリート舗装の道が続いているが、舗装下や側面には自然石を積んだ石段が遺存しており、石段・石畳の道であったとわかる（図 64）。

図 55　「紀伊国南牟婁郡新鹿村全図」部分

図 56　新鹿の道（1/10,000）

【道標】　里川橋の右岸側に所在し、球状の台座に道標が設置される（図 59）。道標は塔高 61 ㎝、幅 25 ㎝、奥行 24 ㎝。台座は高さ 40 ㎝、径 68 ㎝。道標正面（西面）「右なち山／左いせ道」、道標左面（北面）「すぐ　なち山」、道標右面（南面）「いせ道」、道標背面（東面）「天保二辛卯年／世話人角屋長九郎／石工　大矢太蔵」。

【徳司神社】　『西国三十三所名所図絵』には、新鹿村を出た街道の右側にあることが記されている（図 60）。本社最古の棟札には、嘉永 7（1854）年 10 月銘と「徳司大明神」とある [(2)]。

【庚申祠】　新鹿と波田須の境界に位置し「甫本庚申（ほもとこうしん）」と呼ばれる（図 65）。ここには庚申祠があり、祠内には青面金剛立像がある。また、祠の脇には庚申碑があり、塔高 51 ㎝、幅 22 ㎝、奥行 24 ㎝。正面「庚申」。右面「文化八年」、左面「□十二□□」。

【竜門山大仙寺（だいせんじ）】　延宝４（1676）年に開山と伝わる（図 66）。当初の寺号は長福寺といったが、正徳元（1711）年に大仙寺に改号する。微高地上に立地するため、嘉永 7（1854）年の大地震の際には、津波の被害を免れたとされる [(3)]。

【新鹿の嘉永の「津波留（つなみどめ）」の碑】　熊野市指定有形民俗文化財（図 67）。新鹿集落の北側には、嘉永 7（1854）年 11 月４日の東海地震による津波到達地点の石垣に「津波留」の碑がある。津波は、里川を遡上して集落まで及んだため、家屋が流出し多くの死者が出ている [(4)]。全高 66 ㎝、幅 88 ㎝。正面「津浪留／嘉永七寅十一月／四日昼五ツ時／濱辺より凡三丈上ル／井本屋」。

註

（１）熊野市教育委員会・大谷大学民俗学研究会『紀伊熊野市の民俗』1981 年。
（２）前熊野市史編纂員会『熊野市史』下巻、1983 年。
（３）註（２）前掲。
（４）熊野市教育委員会『熊野市の文化財』2014 年。

図 57　湊川の渡渉地点

図 58　湊川と里川間の集落内道路

図 59　里川橋右岸の道標（左面、正面、右面、背面）

図 60　徳司神社

図 61　新鹿湾南側からの眺望

図 62　新鹿湾南側から波田須への道

図 63　山裾から庚申祠間の石段跡

図 64　山裾から庚申祠間の登り道

図 65　甫本庚申

図 66　竜門山大仙寺

図 67　新鹿の嘉永の「津波留」の碑

３　波田須（はだす）から磯崎（いそざき）（古泊浦（こどまりうら））を経て大泊（おおどまり）

○　波田須の道～東波田須～

波田須の地形と道の特徴　新鹿の南端、通称「甫本庚申」付近を境に熊野市波田須町へ入る。波田須は江戸時代には波田須村と呼ばれ、和歌山藩本藩領で木本（きのもと）組に含められていた。

東部が熊野灘に面したリアス海岸地帯の波田須は、東へと派生する幾筋もの尾根で形成されている。波田須北隣の新鹿や、同南隣の大泊には海岸平野が形成されているのとは対照的である。そのため波田須は、東波田須・矢賀・中波田須・西波田須の四地区に区分され、この通称は現在もなお地元で生きている。

波田須の熊野道は、波田須内の小地区呼称では東波田須・矢賀（北部）・中波田須・西波田須を通っていく。新鹿から甫本庚申に至って標高 80mほど上がった後、波田須地内を南西方向におよそ 2.5㎞進んで標高約 110mの大吹峠登り口へと至る。この間、波田須地内では細かな尾根と谷が次々と登場する。熊野道はこの尾根と谷に対し、アップダウンと迂回が最低限となるような線形となっている。『西国三十三所道しるへ』（史料１）で波田須を「山の腰なり」と表現しているのは言い得て妙である。なお、このような線形を描く道は、熊野道では熊野市紀和町小栗須から大河内にかけての道でもみられる。

東波田須の道　甫本庚申から南へと続く熊野道は、国道 311 号によって分断され、かつての熊野道は国道の東法面裾部にかろうじて残っている。最初に尾根を回り込む場所には石畳がよく残り、往時の面影をとどめている（図 68）。石畳の状況は、史跡指定（世界遺産登録）されている波田須の道に近似する。しばらく進むと、熊野道はまた国道 311 号に吸収される。

国道 311 号の波田須トンネル付近までの間は、道路や整地によって滅失箇所がある一方、道であるがゆえに線形が残る箇所もある（図 69）。波田須トンネルの手前には石畳がよく残っている地点がある（図 70）が、その先は波田須トンネルによって削られている。

つぎにたどれるのは、波田須トンネルの上である。現在はトンネルの東側から上がっていく。しばらくトンネルの整地土があるが、40mほどで往時の道となる。小さな峠越えの地点で、幅約３m、深さ約 2.5mの開削道となっており、石畳も残る。（図 71）。

図 68　波田須の道　東波田須北部(1)

図 69　波田須の道　東波田須北部(2)

図 70　波田須の道　東波田須北部(3)

図 71　波田須の道　東波田須北部(4)

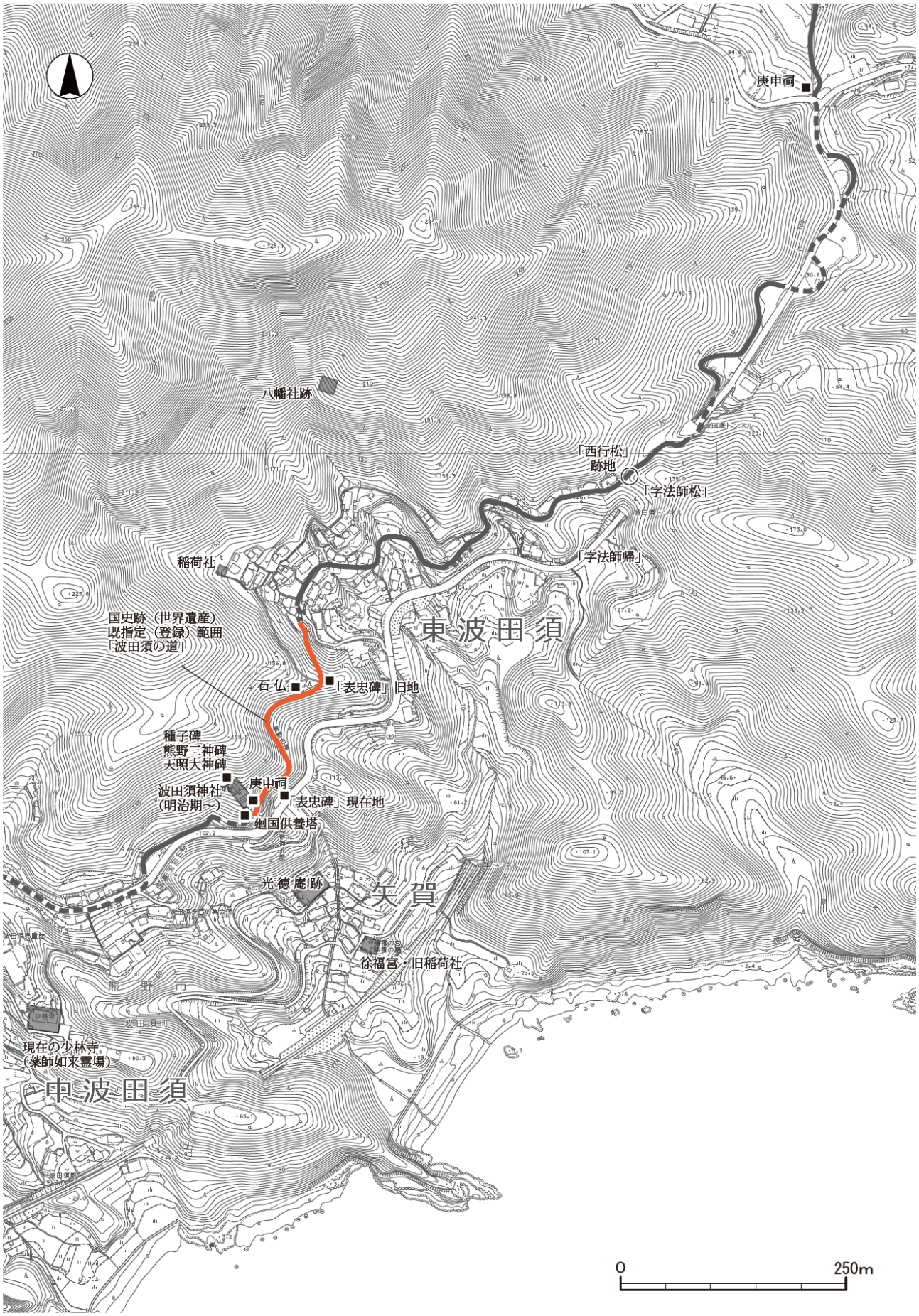


図 72　波田須の道　東波田須から中波田須（1/6,000）

この地点には、「西行松」と呼ばれる名木があったとされるが、現在はその痕跡すら見られない。ちなみに、『西国三十三所名所図会』では西行松は大吹峠の項に書かれている（図 73）が、当地の伝承ではこの位置である。地元伝承地点は小字を「法師松」・「法師帰」といい、西行松伝承との関係が窺える。現在、この地点には看板が立てられている。また、この付近に茶屋もあったという。

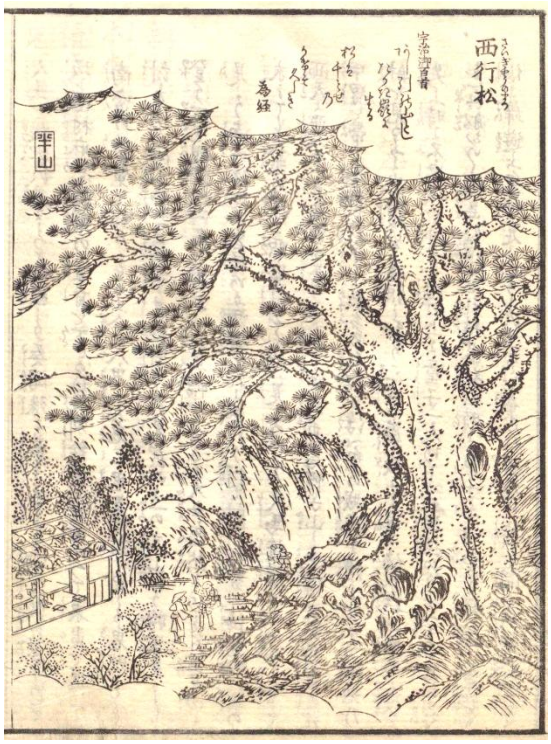


図 73　西行松の図（『西国三十三所名所図絵』）

【西行松伝承の変遷】　東波田須の熊野道沿いにあったこの松は、江戸時代の参詣記でも頻繁に登場し、名木として知られていた。現在では「西行松」の名で定着しているが、『西国三十三所道しるへ』（明和８〔1771〕年）では「さがりノ松」（史料１）、『西国順礼道中杖』（安永２〔1773〕年）や『西国順行要路談』（天明３〔1783〕年）では「ほうしのまつ」・「法師松」（史料２・３）と記され、『順礼道中記』（寛政３〔1791〕年）でようやく「西行ほうしの松」（史料４）という呼称が登場する。『西国順行要路談』では花山院が植えたという伝承が記され、西行は登場しない。このように、東波田須の「名木」は、様々な伝承を伴いながら、18 世紀末頃に「西行法師の松」という伝承に落ち着いたとみられる。

図 74　波田須の道　東波田須北部(5)

「西行松」があった場所は「法師松」・「法師帰」の小字で呼ばれている。地元研究者の平八州史（たいらやすし）氏は、昭和 36(1961)年７月 16 日に大泊在住の人から以下のような「法師帰り」伝承を聞き取りしている[1]。

「昔、諸国修行の西行法師が波田須の法師松の下で涼んでいると、十五六の子供がサスを肩げて通りかかった。法師は「坊や、この暑いのに、どこへ行くんなら」と尋ねた。少年は「夏枯れの冬青草を刈りにいくんじゃ」と答えた。それは麦のことじゃが、西行はその訳が判らないので、まだまだ修業は足らぬと思って、そこから引返して亦修業の旅をつづけた。法師松、法師帰りの地名はそうして生まれたんじゃ。」

図 75　波田須の道　世界遺産部分(1)

平氏が記したこれ以外にも、西行法師が自ら植えた松、という伝承もある[2]。

西行松の看板を過ぎると、東波田須の集落を通っていく。道の高低差は小さい。いくつかの地点では平成の時代に修復された石畳が見られるが、それ以前の石畳が残る地点も多い（図 74）。字東里廻りには稲荷社がある。徐福の宮（後述）の地にあった稲荷社との関係は不明。

世界遺産「波田須の道」　東波田須の集落を抜けると、世界遺産の構成資産となっている「波田須の道」に至る。路面幅は 180 ㎝ほどで、工法は山寄せである。路面には自然石を用いた石畳がある（図 75）。

解説板に「鎌倉時代の石畳」とあるが、年代の根拠はない。石畳は、縁石を敷設する箇所、縁石がなく同規模の石を並べた箇所などがある。普請者の違いか、あるいは時期差と考えられる。

図 76　波田須の道　世界遺産部分(2)　石切場跡

途中の屈曲点左手（東側）には方形に区画された祠跡がある。ここには波田須から出征した日露戦争戦没者の供養碑「表忠碑」（大正４〔1915〕年造立[3]）が立てられていたが、現在この碑は国道 311 号と波田須神社登り口に移設されている。それを過ぎると、山手側に石造地蔵菩薩立像を３体祀った祠がある。１体には「矢賀氏」、「地住先祖」の刻銘があり、江戸時代後期以降のものである。

さらに進むと、矢穴のある大石が山側にある（図 76）。確認できる矢穴から、18 世紀以降の石切場と考えられる[4]。石切場跡を過ぎ、右手に曲がると広場に至る。右手には波田須神社へと向かう参道が接続している。世界遺産の構成資産「波田須の道」は、この広場の手前（北側）までである。

○　波田須の道～矢賀と中波田須～

波田須神社　熊野道は波田須神社前の広場を通って西へと向かう。現在の波田須神社は、明治 40(1907)年に波田須地内の４社を合祀し、新たにこの位置に造立されたものである[5]。それ以前は、東波田須の字大谷に八幡社、西波田須の字宮ノ谷に波田須神社、矢賀の通称丸山（現在の徐福の宮付近）に徐福神社と稲荷社があった（図 72）。このうち、徐福神社は昭和 33(1958)年に旧地へ分祀しなおされた。

図 77　経塚標識塔（矢賀・波田須神社前）

熊野道から現在の波田須神社本殿へと向かう参道の脇には、文化９(1812)年に大乗妙典経の一字一石経を埋納した経塚標識塔が立つ。また、参道を少し上った右手には庚申祠がある。さらに、波田須神社本殿の裏には、自然の丸石に「熊野三神」、「天照大神」と刻んだ碑のほか、全高 139 ㎝の方形自然石に梵字（アーンクか）などを刻み、「寛永」の銘がある粗製角柱形塔婆がある[6]。

【波田須神社参道付近の石造物】　経塚標識塔：塔高 176 ㎝・幅 48 ㎝・厚さ 35 ㎝、台座高 30 ㎝・幅 77 ㎝・奥行 65 ㎝。銘は「(正面) 奉書写大乗妙典一部＜一字／一石＞供養」、「(裏面) 文化九壬丑年／霜月如意沫日　現光徳禅庵沙門大淡／謹拝書／施主常真」とある。側面に矢穴（くまいし４類[7]）が見られる。

庚申塔（祠内）：塔高 76 ㎝・幅 28 ㎝・厚さ 16 ㎝。銘は「(右面) 寛延三年」、「(左面) 五月吉日」とある。

庚申塔（祠外）：塔高 66 ㎝・幅 33 ㎝・厚さ 19 ㎝。銘は「(正面) ○庚申供養」、「(右面) 正徳二天」、「(左面) 壬辰十二月十一日」とある。燈籠：全高 74.5 ㎝・幅 31.5 ㎝。銘は「(正面) 享保十四己酉年／十月吉祥□」とある。

図 78　庚申祠（波田須神社前）

【波田須神社裏石塔群】　粗製角柱形塔婆：塔高 139 ㎝・前幅 52 ㎝・横幅 56 ㎝。正面：円相（直径 15 ㎝）内に「アーンク（退蔵界大日如来）」と考えられる梵字、その下に「上□」の銘。左面：円相（直径 14 ㎝）とその下に「本山／于時寛永＜己／巳＞□／□十五人／願□」の銘がある（図 79）。

自然の丸石に刻字した神号碑が２基。熊野三神碑：全高 66 ㎝・幅 39 ㎝・厚さ 17 ㎝。正面に「熊野三神」の刻字。天照大神碑：全高 60 ㎝・幅 23 ㎝・厚さ 21 ㎝。正面に「天照大神」の刻字。

波田須神社裏に集められた石塔群は、当地の神仏習合を考えるうえでも興味深い資料である。なお、この石塔群は『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州編～』（2009 年）には掲載されてない。

図 79　粗製角柱形塔婆と神号碑（波田須神社裏）

【光徳寺跡】　現在の波田須神社の南方、本殿から標高で約 60 m下がった位置にあった。現在は墓地のみ残る。宗派不明とされているが、少林寺末寺とされること、前述の経塚標識塔に「光徳禅庵」とあることなどから、臨済宗の寺院と考えられる。経塚標識塔や粗製角柱形塔婆の存在から、現波田須神社付近は光徳寺の宗教空間と考えられる。

【徐福神社】　徐福の宮とも。矢賀地区内の通称丸山（小字は門先）にある。天保 10（1839）年に完成した『紀伊続風土記』[8]にはこの社の記載はないが、天保３（1832）年に作成された「木本組全図」（熊野市歴史民俗資料館蔵、図 80）には「丸山古跡」とあり、江戸時代後期には何らかの「古跡」と認識されていたことがわかる。

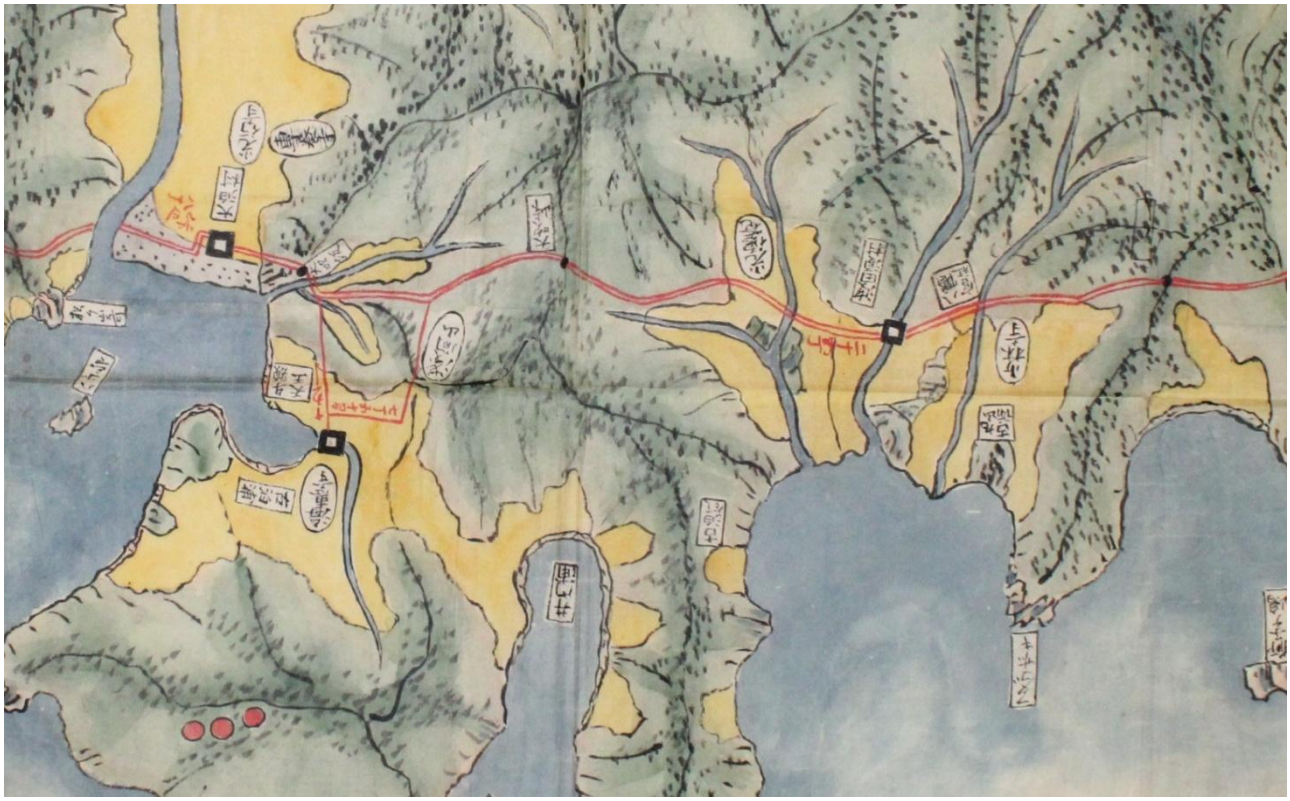


図 80　「木本組全図」のうち波田須・古泊浦・大泊部分（熊野市歴史民俗資料館蔵）

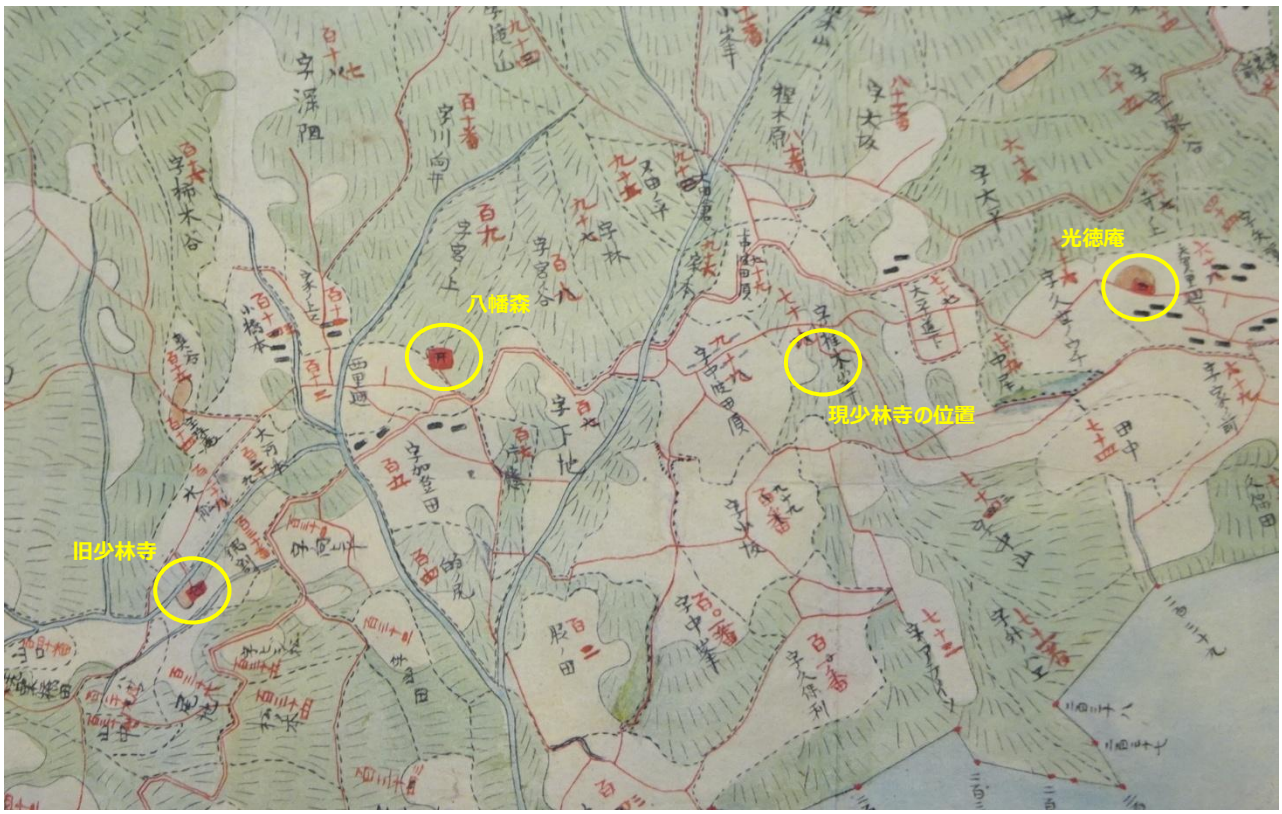


図 81　「紀伊国南牟婁郡波田須村全図」部分

○　波田須の道～中波田須～

中波田須道標　波田須神社前広場から先の熊野道は、直近の尾根先端部は国道 311 号の法面工事で滅失しているが、その先からはしばらくの間は山寄せ形の道が残っている。ただ、細かな尾根と谷が続く波田須では、熊野道は各所で分断されている。とくに中波田須の東部は、国道 311 号とほぼ同じ場所を通っているため、改変が大きい。

国道 311 号から波田須児童館に向かって南へ下る道が、アスファルト舗装されているとはいえ、かつての熊野道である。この道をそのまま進むと現在の少林寺に至るのだが、熊野道は途中で右へ鋭角に曲がり下っていく（図 82）。この交差点に道標がある。「中波田須道標」として熊野市指定有形民俗文化財となっている（図 83）。横断面が台形を呈する角柱で、碑面高 76.5 cm・最大幅 25 cmの熊野酸性岩製である。碑面にある「西　木の本道」、「東　新鹿道」が、熊野道の東西を示しており、もうひとつの面には「☛南一丁やくしにょらい霊場あり」と記されている。この道標が示す「薬師如来霊場」とは現在の少林寺のことで、この道標から現少林寺へと続く道は、明治 19(1886)年 12 月 12 日付けの「紀伊国南牟婁郡波田須村全図」(三重県蔵。以下「明治波田須村全図」と呼称。図 81) にも表示されていない。この道標は、少林寺本尊が薬師如来となった（後述）明治 16 年以降に立てられたものである。

【少林寺】　臨済宗妙心寺派の寺院。現在の少林寺

図 82　波田須の道　中波田須(1)　道標付近

図 83　中波田須道標

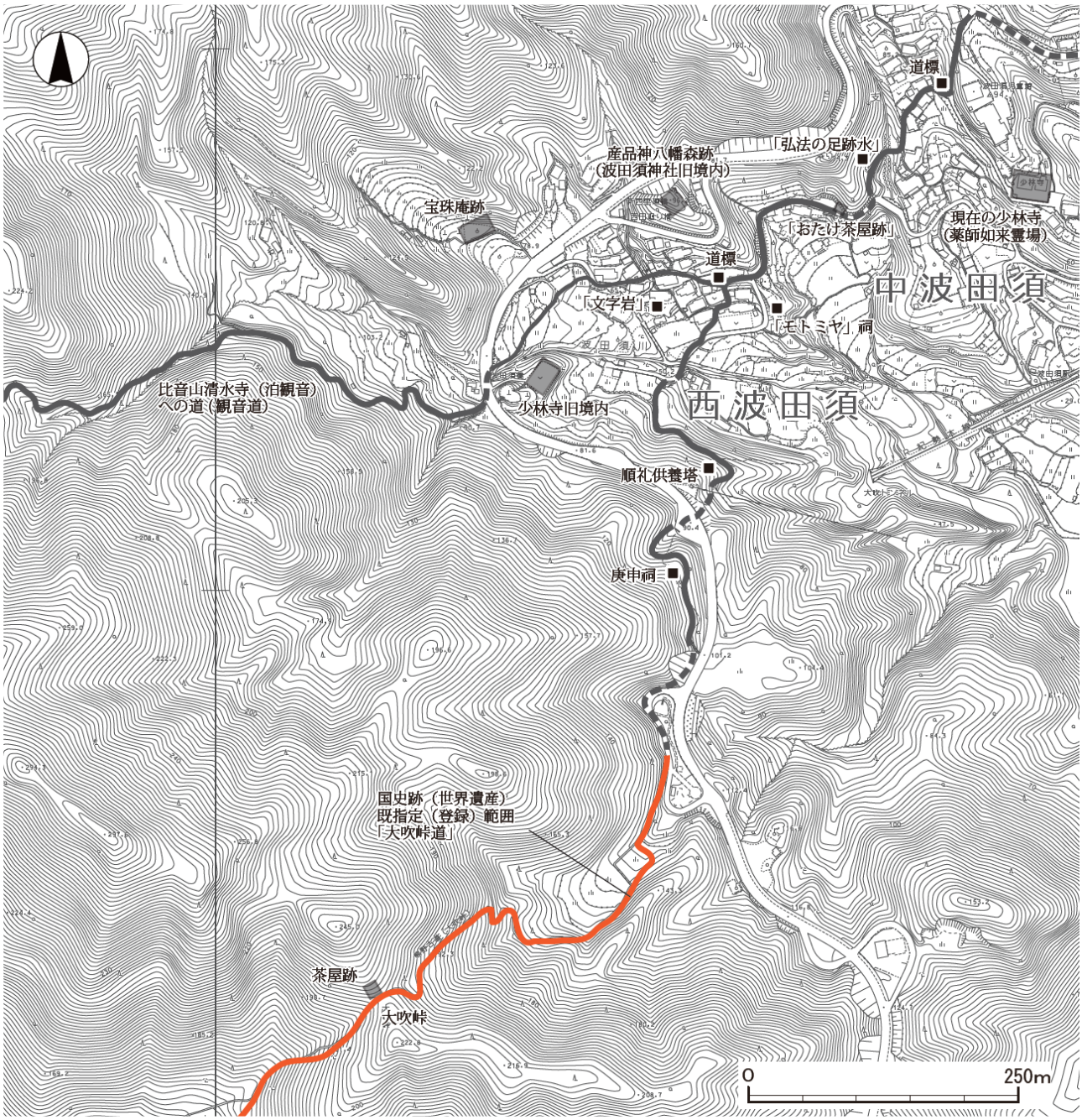


図 84　波田須の道　中波田須から西波田須・大吹峠道（1/6,000）

は、明治 16（1883）年に少林寺と矢賀の光徳庵とが合併した後のもので、それ以前の少林寺は西波田須地内にあった[9]。「明治波田須村全図」（図 81）では、現在の少林寺がある位置（字椎木峯）に寺院の表記がなく、西波田須の字鍋割に寺院・墓地の記載がある。このことから、明治 16 年以前の少林寺は西波田須の字鍋割（現在も墓地がある）の位置と考えられる。ただし、少林寺・光徳庵が明治 16 年に合併したならば、なぜ明治 19 年作成の「明治波田須村全図」がそうなっていないのか、疑問が残る。「明治波田須村全図」が明治 19 年以前の状況を記しているのか、あるいは、少林寺・光徳庵の合併年が誤伝されているのかは不明。現在の本尊は薬師如来だが、明治 16 年までの本尊は聖観音菩薩。これは光徳庵との合併にあたり、光徳庵本尊が合併後の本尊と決せられたためという[10]。天明 3（1782）年の『西国順行要路談』（史料 3）では、少林寺本尊は聖観音と記されている。なお、前出の天保 3 年「木本組全図」では、光徳庵の位置に「少林寺」、少林寺の位置に「光徳庵」と記されている（図 80）が、これは当時の明らかな誤植である。

中波田須道標から急な階段を下り、熊野道はしばらく集落内を通っていく。小河川をひとつ越えると、道は谷沿いに下る道と山側に上がる道とに分かれる。谷沿いの道は、この先の新しく造られた車道に接続させるための道で、山側に向かう道が熊野道と考えられる。この道は山寄せの道で、山側には熊野カルデラ由来の岩盤が露呈し、その前に石畳が残っている（図 85）。道沿いには「弘法足跡水」という祠があり、比較的新しい時期の弘法大師文字塔が祀られている。さらに進むと、車道造成で熊野道は切られている。尾根を回ったあたりで少し下り、「おたけ茶屋」と呼ばれる茶屋跡に至る。この茶屋は昭和初期頃まで存在していたという。その先は、しばらく拡幅されたアスファルト舗装道となる。

図 85　波田須の道　中波田須(2)　弘法足跡水付近

○　波田須の道～西波田須～

「モトミヤ」祠と産土社八幡森跡　「おたけ茶屋」から続く道を進むと、西波田須に至る。左手には大楠が見え、その脇に祠が祀られている。この付近は「モトミヤ」と呼ばれている。祠には、大石とその上に置かれた石製祠の屋根部がある（図 86）。石製祠屋根部分には菊花文が彫刻されている。「モトミヤ」の呼称から、尾根上にあった八幡森（旧波田須神社）との関係が考えられるものの、詳細は不明である。なお、「モトミヤ」について、平八州史氏は住吉社跡・八幡社跡の伝聞を記録している[11]。また、この地点は木地師が滞在した場所で、石製祠は木地師と関係しているとの伝聞もある[12]。

図 86　西波田須の「モトミヤ」祠

熊野道が回り込む尾根の上には、『紀伊続風土記』に「産土社八幡森」と記される、波田須神社旧境内がある。明治 40 年合祀（先述）までの鎮座地である。ここには、「モトミヤ」から尾根伝いに上がる参道があった。現在も平坦部が残るが、国道 311 号とその旧道に挟まれた三角形の土地となっている。なお、波田須神社旧境内から西に続く尾根上は、現在の国道 311 号が造成される前に「波田須城跡」として事前発掘調査が実施されている[13]。「堀切」が確認されているが、出土遺物がないこと、波田須神社旧境内に接することなどから、波田須神社旧境内に関係する遺構か、あるいは古道の跡である可能性がある。なお、「明治波田須村全図」にはここに道の表記がないので、古道とすればそれ以降に設置されたものとなる。

図 87　西波田須道標

西波田須道標　「モトミヤ」からしばらく進むと、西波田須道標（熊野市指定有形民俗文化財）がある（図 87）。砂

図 88　波田須の道　西波田須(1)　集落内

岩製の櫛形で全高 61 ㎝以上（下部は埋没）、「左なち山道」の刻字が現在は南面するが、本来は東面していたと考えられる。ここに道標を立てたのは、この道を直進すると宝珠庵跡墓地方面や観音道（後述）に進むので、それを避けるためと考えられる。

西波田須道標の脇には流紋岩製の角柱形（全高 61 ㎝以上）で、「右あたしか道／左きのもと道／明治三年□月／青年會」と記された、折れた道標がある（図 87）。西波田須道標の代わりに明治３(1870)年に立てられたが、破損したため、また江戸時代の道標が復活したのだろうか。

図 89　波田須の文字岩

西波田須道標からの熊野道は南へ折れる。集落内の幅 1.5m足らずの舗装道（図 88）を下り、波田須川を渡ってさらに南へと進んでいく。途中から右手に進んだ先には、「勤慎忍」と刻字した大岩があり、「波田須の文字岩」として熊野市有形民俗文化財に指定されている（図 89）。熊野道からは少し離れている。

【宝珠庵跡】　宝珠庵は、『紀伊続風土記』に「宝珠庵廃趾」とあり、江戸時代後期までに廃絶していたようである。「波田須村全図」にも墓地のみが記され、現在も西波田須の集落墓地となっている。ここには、室町時代後期（15 世紀後葉から 16 世紀代）の宝篋印塔が、残欠ながら４基確認でき、同時期の五輪塔も１基以上ある。また、寛延３(1750)年銘の庚申塔（青面金剛立像）もある（図 90）。波田須で室町時代以前の石造物が集中するのは宝珠庵跡に営まれたこの墓地のみである。これらのことから、宝珠庵とされる寺庵は波田須のなかでも中核的な寺院であった可能性が考えられる。なお、宝篋印塔・五輪塔・庚申塔は、『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州編～』(2009 年)には掲載されてない。

図 90　宝珠庵跡の石造物

波田須の巡礼供養塔　波田須川を渡り、熊野道は農道法面で少し分断される。熊野道は農道を横切って丘陵部に入る。この丘陵部を上る道は旧状をよくとどめ、石畳も残っている（図 91）。

図 91　波田須の道　西波田須(2)　巡礼供養塔付近

道脇に巡礼供養塔がある（図 92）。砂岩製の櫛形で塔高 45.5 ㎝、正面に「尾雲義張信士」、右面に「文化六巳五月七日」。左面に「尾州知多郡西端村／兵右エ門支」の刻字がある。西端（にしばた）村は現在の愛知県知多郡南知多町内海の小字となっている西端後（江戸時代には西端村）と考えられる。戒名は出身地「尾張」の文字を含めて作成されたのであろうか。

図 92　西波田須　巡礼供養塔

巡礼供養塔からしばらくは熊野道の旧状が保たれてい

るが、国道 311 号との交差点付近は改変されている。

西波田須庚申　国道 311 号を横切って丘陵部の裾に至る。ここから先の丘陵内には、苔むした石畳が良好に残っている（図 93）。熊野道は尾根を開削しつつ大きく右に曲がる。さらに進むと、右手に石段が見えてくる。西波田須庚申へと続く石段である。

西波田須庚申（図 94）は石室内に納められている。流紋岩製の櫛形で塔高 82 ㎝、正面に「庚申供養塔」、右面に「元禄十丁丑年」、左面に「十二月日」と刻字する。熊野市有形民俗文化財に指定されている。

熊野道は庚申からおよそ 100ｍの間は旧状をよくとどめるが、尾根先端部に近づくと国道 311 号の造成で切られ、先には進めなくなっている。

○　大吹峠道～波田須から磯崎（古泊浦）～

「小坂」とされた大吹峠道　西波田須庚申から約 100ｍ先で熊野道は削られているが、大吹（おおぶき）峠道の登り口付近と西波田須庚申との標高が近いため、この間の熊野道は、あまり高低差がなく続いていたと考えられる。

道中記では大吹峠道のことを「小坂（＝小さな坂）」と記し、難所と認識していない。実際、波田須側登り口から峠までの高低差は 100ｍほどなので、この程度の峠越えは熊野参詣道道としては「小坂」だったのだろう。

道中記の誤解と「フヂ戻し松」　大吹峠道は、「道中記」では新鹿と波田須の間にある峠道で、先述の「西行松」が大吹峠道にあるような記載（史料１・３～７）がよく登場するが、「大吹」の小字は現在いう大吹峠道の大泊（おおどまり）側（土地としては磯崎町〔旧古泊浦（こどまりうら）〕地内）なので、道中記の記載はどこかで誤解されたのものがそのまま引き続き記されていったと考えられる。

また、天明３(1783)年に記された『西国順行要路談』は、大吹峠道の道中に「フヂ戻シ」という大木の松があったと記す（史料３）。本史料は道中日記で、先述の「西行松」を記したうえで「フヂ戻シ松」が登場するため、この松は大吹峠道にあった大木とみてよい。なお、「フヂ戻し松」の記載はこれ以降見られないので、18 世紀末頃には枯死したのかもしれない。いずれにしても「西行松」や「フヂ戻シ松」など、波田須を通る熊野道沿いには、いくつかの名木があったことがわかる。

図 93　波田須の道　西波田須(3)　庚申祠手前

図 94　西波田須庚申祠

図 95　大吹峠道　波田須側(1)

図 96　大吹峠道　波田須側(2)　猪害の古道

図 97　大吹峠道　波田須側(3)　峠付近

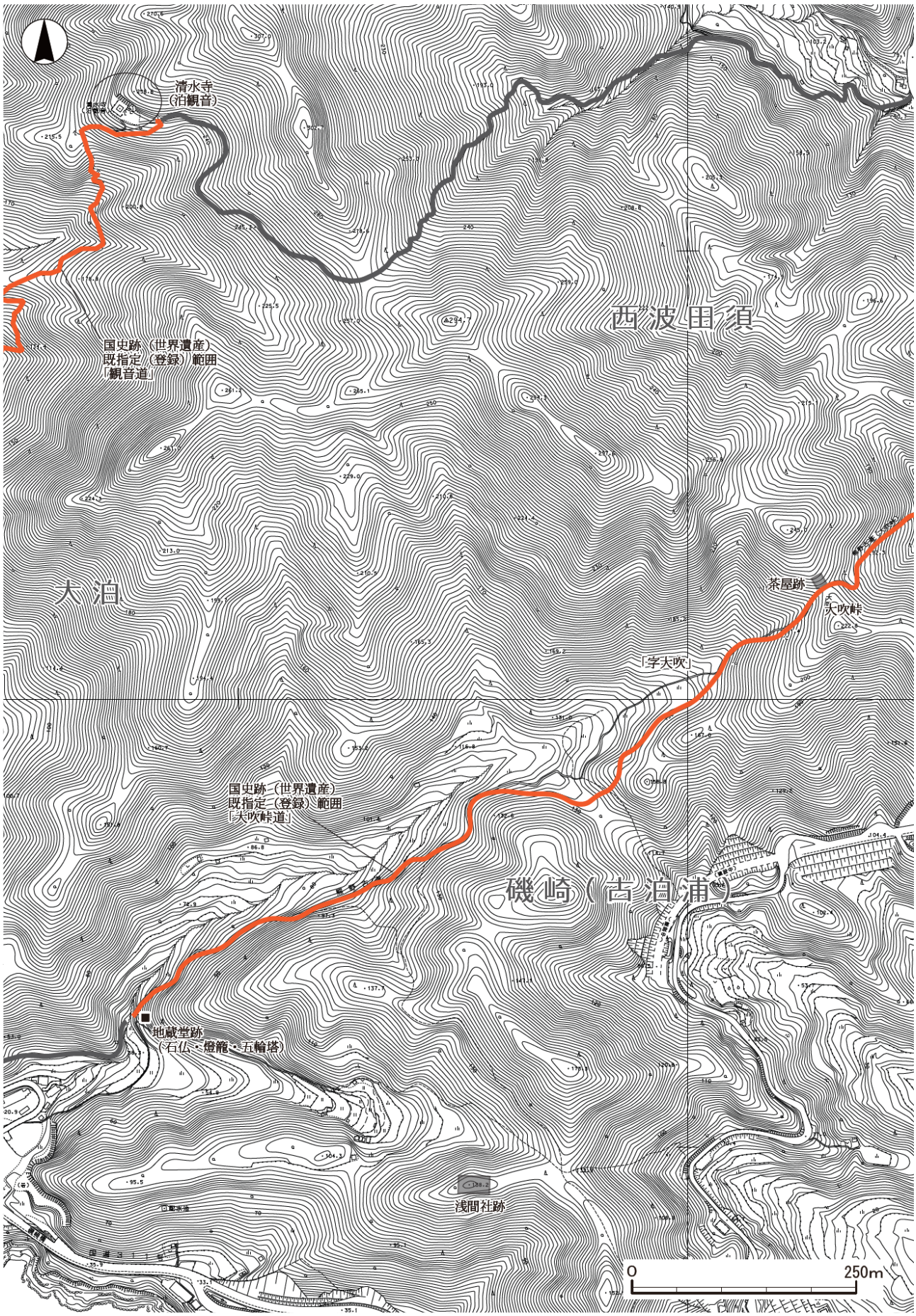


図 98　大吹峠道　峠から磯崎側の道（1/6,000）

大吹峠道（波田須側）の状況　大吹峠道の波田須側登り口からは国史跡（世界遺産構成資産）範囲となる。道は、右側山寄せ道から途中の棚田を経て左山寄せ道へと変わる（図 95）。途中、良好な石畳が残っていた区間は、近年、猪害で荒れた（図 96）。何らかの対策が必要だが、山林部を通る古道に対し、山に住む動物への対処となると、そう簡単に解決策が見つからない。

山寄せの道は屈折しながら峠へと向かう。峠では左右から猪垣が迫り、熊野道の部分がぽっかり開いた状況がみえる（図 97）。なお、この猪垣沿いに右手へと進む道が「大観猪垣道」と呼ばれる古道である（後述）。

古泊浦（磯崎）大吹　峠を越えると、波田須から古泊浦（熊野市磯崎町）に入る。現在の熊野市磯崎町は、江戸時代には古泊浦と呼ばれていた。古泊浦は和歌山藩本藩領、波田須村・大泊村と同様、木本組に含められていた。大吹峠から西に下っていく山道沿いが古泊浦字大吹で、この小字が大吹峠の名称となっている。

大吹峠道（磯崎側）の状況　峠の猪垣を越えた西には、昭和中頃まで営まれていた茶屋跡がある。礎石・縁石が残っている（図 99）。熊野道は、谷を右手に見ながら山裾を下っていく。熊野道の路面は、峠付近や登り口付近などの一部には石畳が見られるものの、斜面部は石段、平坦部は土道としているのが基本である（図 100・101）。

世界遺産構成資産部分が途切れる地点には、地蔵堂があった（図 102）。現在ここに堂宇はないが、石造物の刻銘からその存在が知られる。

図 99　大吹峠道　磯崎側(1)　茶屋跡

図 100　大吹峠道　磯崎側(2)　石段

図 101　大吹峠道　磯崎側(3)　石段

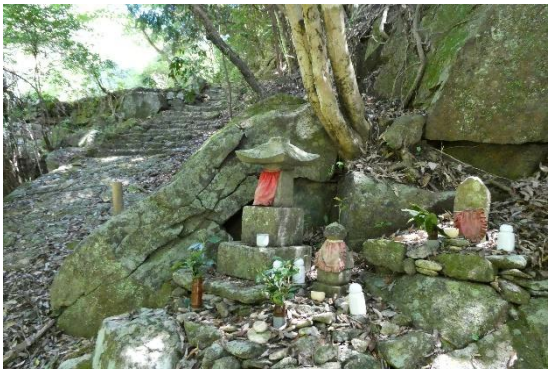


図 102　大吹峠道　磯崎側(4)　古泊浦地蔵堂跡

【古泊浦地蔵堂跡の石造物】　「大吹峠大泊側登り口」と通称される地点である。ここは磯崎町（旧古泊浦）地内なので、本報告では「古泊浦地蔵堂跡」とする。ここには以下のような石造物が見られる。

地蔵菩薩立像：砂岩製、舟形光背。現高 36.5 ㎝。江戸時代中期頃。

笠塔婆（燈籠）：砂岩製、４材構成。全高 85.5 ㎝。塔身部銘（正面）「地蔵菩薩／表信燈／堂前奉納」、（右面）「弘化四未年／六月吉日」、（左面）「當村世話人／山本兵蔵／同吉三／同豊松」。基礎銘（正面）「（不明）」、（右面）「弘化二年／十□月四日」。

一石五輪塔：砂岩製。全高 43.5 ㎝。銘（正面）「相前妙神位」、（右面）「明治二年」、（左面）「巳二月」、（裏面）「阿位神」。

笠塔婆（燈籠）に刻まれた「當村」は、大泊村のことではなく古泊浦のことである。なお、これらの石造物は『三重県石造物調査報告Ⅰ～東紀州編～』(2009 年)に掲載されてない。

地蔵堂跡から先は、現在は左手の山道を通っているが、熊野道は地蔵堂前の流路を越えて直進する。流路を跨ぐ地点には石橋があった痕跡が見られるが、現在は失われている。熊野道は、地蔵堂跡までの道とは異なり、山を右手に見ながら進んでいく。その先で近代の石切場に至り、道は途切れている。石切場の先から大泊地内に入る。

○ 大泊

大泊の熊野道　大吹峠から下る道を越え、熊野道は大泊町の海岸平野へと至る。熊野道が海岸平野を通るのは新鹿町以来で、その間約５㎞の山道を通ってきたことになる。現在の熊野市大泊町は、江戸時代には大泊村と呼ばれ、和歌山藩本藩領で木本組に含められていた。

大泊地内の熊野道は全てアスファルト舗装となっているが、集落の南部を西へと向かう道として今も使われている（図 103）。集落内を西へ進むと、いちど右へ折れ、すぐ左に折れる。そのまま進むと、集落の西端で熊野宮川にあたる。

図 103　大泊地内の熊野道

大泊の道標　途中、大正４(1915)年に立てられた道標（熊野市指定有形民俗文化財）がある（図 104）。この道標は、木ノ本方面（西）から東へ向かう通行人のために立てられており、新鹿方面（熊野道）と、古泊（磯崎町）へと至る道の分岐にあたる。調整がほとんどない自然石で、流紋岩製。現高 86 ㎝、幅 61 ㎝。刻銘は、(正面)「右ハこどまり／左ハあた志か／道」、(左面)「大正四年三月建立」とある。現在、道標が示す方向に古泊（磯崎町）へと至る道はないが、かつては現在の堤防下に道があったという[14]。道標が設置されてから 17 年後の昭和７(1932)年の地図（図 106）を見ると、大泊から海岸沿いに古泊浦（磯崎町）へと向かう当時の道は、先述の古泊浦地蔵堂付近まで大きく迂回する道がある。この道が完成したことで、大泊の道標は役目を終えたと考えられる。

図 104　大泊の道標

大泊には、清水寺（泊観音）・清泰寺（後述）以外にも、専泰寺・光行寺の２寺院があった。明治 18(1885)年 10 月５日付けの「紀伊国南牟婁郡大泊村全図」（三重県蔵、以下「明治大泊全図」）では、大泊集落内には、寺院を示す赤色の記載が１カ所、墓地を示す茶色の記載が２カ所見られる（図 107）。字笠島にある赤色の記載は現在の大泊集会所の付近で、ここが専泰寺の位置と考えられる[15]。光行寺の位置は明確でないが、熊野道に近い墓地跡付近に井戸跡があり、この井戸付近ではないかと推察する[16]。

【専泰寺・光行寺】　『紀伊続風土記』写本[17]によると、専泰寺は浄土宗鎮西派で、瑞泉寺（和歌山県新宮市）の末寺であった。光行寺は浄土真宗本願寺派で、性應寺（和歌山市）の末寺であった。光行寺は、天保３(1832)年に作成された「木本組全図」（熊野市歴史民俗資料館蔵、図 80）には登場するが、「明治大泊全図」では表記されていないため、この間に廃寺になったと考えら

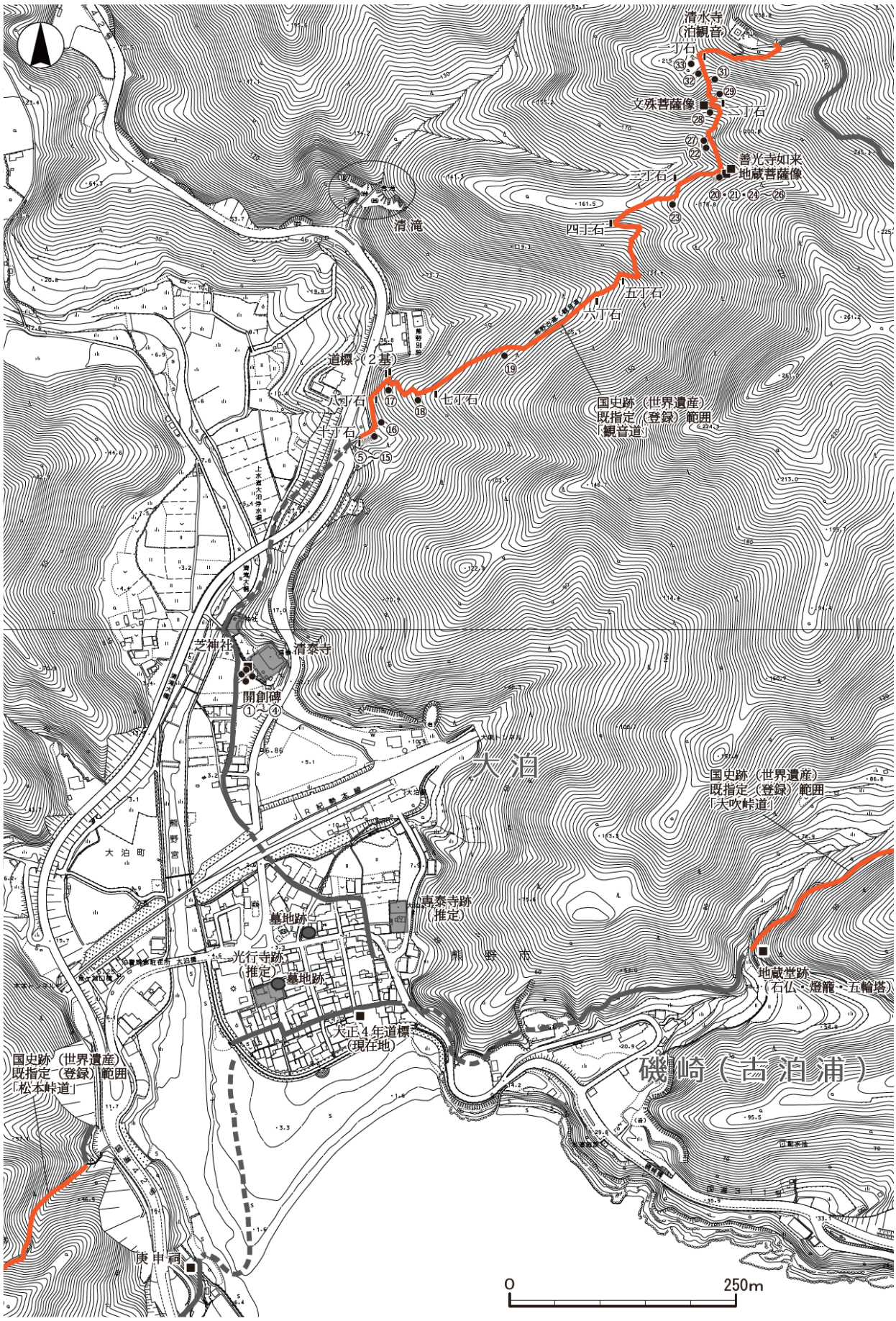


図 105　大泊の熊野道　＊①～㉝は三十三所観音石仏の位置（1/6,000）

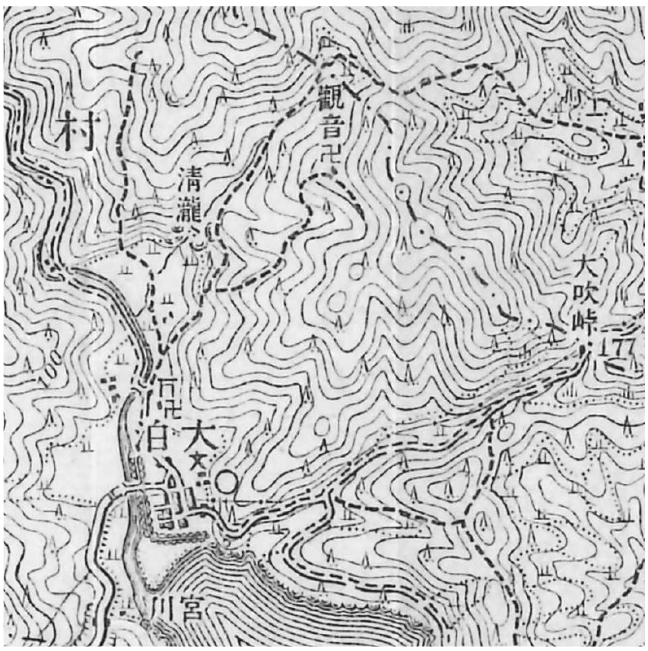


図 106　昭和７年段階の大泊・古泊（現磯崎町）の道（帝国陸軍陸地測量部 1:50,000『木本』昭和７年９月を引用）

図 107　「紀伊国南牟婁郡大泊村全図」部分

れる。なお、専泰寺跡と考えられる大泊集会所の付近には、17 世紀後葉以前と考えられる小型の石造地蔵菩薩立像が祀られている。

川の徒渡りと庚申祠　集落を過ぎると熊野宮川につきあたる。旅人はこの川を徒歩で対岸へと渡っていた。道中記では、ここは海から波が寄せる場所で「難所」と記され、波の引くタイミングを見計らって急いで渡ったという（史料１・４）。人が川を徒渡（かちわた）りできるのは、最も浅くなる波打ち際に限定されるので、旅人は図 108 の地点を渡ったと考えられる。

熊野宮川を渡河した正面に、大泊の庚申祠がある（図 109）。天和３(1683)年銘で、熊野市内では最も古い庚申塔である。これまでは文字庚申塔と考えられていたが、今回の調査で、図像庚申塔であることが判明した。熊野道はこの庚申祠の脇を通り、国道 42 号で途切れ、再度丘陵を上って松本峠へと至る。

【大泊の庚申】　石製祠に入り、燈籠１基を伴う。庚申塔は駒形で花崗岩製、現高 74 ㎝。中央に青面金剛立像と考えられる像を線刻する。刻銘は、(正面上段)「天和三亥年／十二月日」、(正面下段)「六郎右衛門／九郎兵衛／忠二郎／吉之丞／十左衛門／新蔵／む□」、石製祠は明治 17(1884)年銘、燈籠は天明６(1786)年銘で、竿部のみが残っている。庚申塔に使われている花崗岩は当地で産出しない石材なので、この石塔は他所で作られ、当地に運ばれたと考えられる。

図 108　大泊の渡河地点（右奥の鞍部が大吹峠）

図 109　大泊の庚申祠

○ 観音道（波田須側）

純粋な「参詣道」　比音山清水寺（通称：泊観音、第４節参照）は、後述のように千手観音菩薩の霊場で、そこに至る道は「観音道」と呼ばれている。観音道は、現在、大泊からの道のみが世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産だが、波田須からも泊観音へと通じる道がある。『西国三十三所道しるへ』（史料１）や、『西国順行要路談』（史料３）といった道中記では、波田須側からの道が記載されており、いったん大泊に至ってから泊観音を訪れるよりも、波田須から直接泊観音へと向かう道が推奨されている。「明治波田須村全図」でも、少林寺旧境内の近くから泊観音へと通じる道が記される。ちなみに、波田須から泊観音を参拝した旅人は、大吹峠を越えることなく大泊へと向かうこととなる。

さて、本書で扱っている熊野道のほとんどは、熊野参詣道（巡礼路）であるとともに生活道路でもある[18]。本章でいえば、集落地としての波田須と大泊を結ぶ最短路が大吹峠道＝熊野道である。これに対し、観音道は生活道路とは異なり、清水寺へと向かうためだけの道である。この点から、大泊側のみならず、波田須側からの観音道も純粋な巡礼道と評価できる。この道の波田須側出発点が少林寺旧境内付近であることも興味深い。明治 16(1883)年以前の少林寺（旧境内時点）は、聖観音菩薩を本尊とする寺院であった。波田須側から上り、泊観音を目指す観音道は、登り口もまた観音霊場である、という見方もできる。

波田須側観音道の現況　現在、この道は少林寺旧境内から国道 311 号を横切った山側に登り口がある。道は棚田を見下ろす山裾をしばらく通り、斜面部には石畳が敷設されている（図 110）。途中、江戸時代後期の小規模な石切場跡の横を通る。

左手に山裾をたどり、谷部に至る。谷部には猪垣が横断している。道は猪垣をまたいで谷の反対側へ通じ（図 111）、その後しばらくは谷沿いを上っていく道となっている。谷は次第に狭まり、河床には岩盤が露呈している。その河床を渡る地点には、岩盤を削って足場（段）を作成した箇所もある（図 112）。

図 110　観音道　波田須側(1)

図 111　観音道　波田須側(2)　猪垣を渡る

図 112　観音道　波田須側(3)　岩盤上のステップ

図 113　観音道　波田須側(4)　土橋

さらに進むと、この谷を跨ぎ、対岸へ向かう。この地点は石積みの橋と考えられるが、現在は完全に埋没して土橋状になっている（図 113）。土橋を渡ると、道筋は尾根を上っていく。道幅１ｍ足らずで、

斜面部には石段・石畳が適宜敷設されている。道筋は泊観音の背部から続く尾根頂部に至り、ここを越える際に小さな峠越えとなる。なお、峠から左の尾根沿いを進む道は「大観猪垣道」と通称される道である。

図 114　観音道　波田須側(5)

波田須の登り口からこの峠まで、道は山の北斜面を通っていたが、峠から泊観音までの間は、山の南斜面を通る道となる。峠越え後はそれほど急な降下はなく、基本的に緩やかな下り坂で泊観音に至る。その間に尾根と谷を何度か越えていく。この付近の道は、傾斜のある部分では石畳が敷かれている（図 114）が、基本的には土道である。

波田須側の観音道沿いには、石造物が全く見られない。大泊側とは全く異なっている。

註

（1）『平八州史ノート・波田須資料（二）』（熊野市歴史民俗資料館蔵）37 頁。
（2）波田須尋常小学校『郷土教育資料』（三重県立図書館架蔵）。本資料には作成年月日が記載されていないが、「提出者　訓導兼校長中西恒一」とある。中西恒一が同校の校長だったのは昭和３(1928)年３月から同５年３月までの間なので、本資料はこの時期に作成されたと考えられる。
（3）前掲註（2）。
（4）伊藤裕偉「尾鷲市曽根の石切場遺跡」（『紀伊考古学研究』28、2025 年）。
（5）熊野市編『熊野市史』下巻（1983 年）。
（6）「粗製」の用語については、伊藤裕偉「中世末期南伊勢の板碑」（『ふびと』65、三重大学歴史研究会、2014 年）を参照。
（7）前掲註（4）。
（8）国立公文書館デジタルコレクション『紀伊続風土記』。
（9）前掲註（2）・（5）文献および、大谷大学民俗研究会編『紀伊熊野の民俗　旧泊村、新鹿村、荒坂村編』（熊野市教育委員会、1980 年）、平八州史『新くまの風土記』（熊野市教育委員会、1982 年）。
(10) 熊野市編『熊野市史』下巻（1983 年）、26 頁。
(11)『平八州史ノート・波田須資料（三）』（昭和 42 年 12 月３日記、熊野市歴史民俗資料館蔵）21 ページ。
(12) 熊野市編『熊野市史』下巻(1983 年)、187 頁。
(13) 三重県埋蔵文化財センター『波田須城跡発掘調査報告』(1993 年)。
(14) 向井弘晏氏のご教示による。
(15) 向井弘晏氏のご教示による。
(16) 向井弘晏氏のご教示をもとに、筆者（伊藤）が推測。
(17) 前掲註（4）。
(18) 塚本明『江戸時代の熊野街道と旅人たち』（塙選書、2022 年）。

〈史料〉　＊「／」は改行位置

1『西国三十三所道しるへ』
（国会図書館デジタルアーカイブ）
（明和八〔一七七一〕年　菊屋喜兵衛〔京都〕刊）

○あたしか江　一里
此所海ばた、在町三四丁／あり、泊りよし、村入口と／中とに川有、右の方に／正崇寺といふ禅寺有、／　村出口に宮あり、此間／大ふき坂とて小坂あり、此／　坂に、さがりノ松とて一本／一所にはへ、多枝のさかり／たる松あり

○はた次江　一里
此所、在町一二丁有、山の腰／なり、泊りあり、是より大／泊り村の観音へ道あり

○大泊江　一里
此所、海辺にて町四五丁／あり、泊りよし、此所に田／村丸の建立し給ひし観／音堂あり、長一寸八分、こ／か祢の千手観音也、海底／より揚給ふ佛とかや、此／町より右の山のうへなり、／町より道のり十三丁程／あり、此町出口に川あり、／渡り所ハ海の磯也、渡りて／直に木の本坂へ上る所／なり、此川難所なり、海／より大浪打あけ、其浪／乃引たる時走渡りに／　越る也、海碧しつかなる／時は渡り安きと、所の／人かたる、此間、木の本坂／の峠に茶屋ありなり、つぎ小川あり、さかあり

2『西国順礼道中杖』（三重県立熊野古道センター蔵）
（安永二〔一七七三〕年　正本屋吉兵衛〔京都〕刊）

あたしかゟ　はたすへ一り
　さかあり、とうげにほうしのまつ、めいほく也
はたすゟ　大とまりへ一り
　此あいだにさかあり
大とまりゟ　きのもとへ半り
　此ところにたむらまるこんりうの
　くわんおんどうあり、ゑいたいひぶつ

3『西国順行要路談』（三重県立熊野古道センター蔵）
（天明三〔一七八三〕年　江陵沙門魚名）

一、新鹿（アダシカ）　二鬼嶋ヨリ一里
此所宿屋アリ、在町少シアリ、此間ニ小坂アリ、峠ニ法師松ト云アリ、花山院御植ナサレ候由、右松ハ枯テ二代目ナリ、此所ニ家一軒アリ、此先ニ大ブキ坂ト云小坂アリ、フヂ戻シト云大木ノ松アリ、
一、波田須（ハダス）　新鹿ヨリ一里
此所宿屋アリ、少町ナリ、少林寺ト云有、本尊聖観世音、是ヨリ大泊リ村観音エノ道アリ
一、大泊リ村　波田須ヨリ一里
此処宿屋アリ、海辺ニ而町少シアリ、此所右ノ山手エ十二、三町程行

4『順礼道中記』（三重県立熊野古道センター蔵）
（寛政三〔一七九一〕年大坂屋長三郎〔紀伊粉川〕刊）

▲あたしか
大ぶき坂とうげニ
西行ほうしの松有
▲はだす
坂なし
▲大どまり
川有、海へちかし
なミあらき時ハ
なミの引し間に
はしりわたる
一、あたしかへ　壱里
次ニ河あり、大ふき坂、西行法師の松
一、はだすへ　壱里
一、大泊りへ　壱里
右の方ニ、田村丸こんりうのくわんおん堂、比音山清水寺と云、秘佛也、出口川有、海へちかし、次に坂有

5『道中記』（三重県立熊野古道センター蔵）
（慶応三〔一八六七〕年作者不詳）

6『西国三十三所名所図会』
（国会図書館デジタルアーカイブ）
（嘉永元〔一八四八〕年　暁鐘成〔大坂〕）

大吹峠　大引峠とも、波田須村にあり、峠に茶屋一軒あり、傍に西行の松といへる廣太の老木あり、是より大泊村ニいたる、はたすより大泊まで凡一里、此間道よし

7『西国順礼道中記』（三重県立熊野古道センター蔵）
（年代不明〔江戸後期か〕刊）

あた志かゟ　一り近〃　小さか有
はた次ゟ　一り　宿休／道よろし
　大引峠、西行の松、茶や有
大とまりゟ　半り　宿休
　出口ニ川あり、坂の下り口ゟ木本町・新宮の岬まて松はやし
　見之わたる、七里見はまといふ

４　比音山清水寺と観音道（大泊側）

○　観音道（大泊側）

大泊から清水寺への道　熊野市大泊町に位置する金滝山清泰寺（以下「清泰寺」）や芝神社付近から山上の比音山清水寺（泊観音とも呼ばれる。以下、清水寺）に至る道を観音道という（図 105）。清水寺は、千手観音菩薩の霊場であり、伊勢方面から熊野や西国三十三所巡礼に向かう旅人が道中の目的地の一つとしていたことが、道中日記などから読み取れる（表３）。第３節でみた波田須側の観音道とともに、大泊側の観音道も巡礼の道として位置づけることができ、熊野道と清水寺の結び付きも重要なものと評価できる。

清水寺は、応永年間（1394～1428 年）に火災のため建物が消失し、本尊も被害を受けたと伝わる。戦国時代には堀内氏善が寺領 25 石を寄進し、一族の九鬼五平衛を別当に置き、その後は九鬼氏が代々別当を務め、慶安年間（1648～1652）には建物が再興されたと伝わる[(1)]。昭和 39（1964）年に無住となり、これ以降に建物の老朽化が進んだため、平成 26（2014）年に本堂が解体された。現在は本尊を祀っていた岩窟が残る（図 119・120）[(2)]。

清水寺本尊であった木造千手観音立像の前立像は、清泰寺で安置されている。前立像は、京都の音羽山清水寺の本尊をもととする、清水寺式千手観音と呼ばれる姿をしており、像内部には応永年間の再興像とみられる菩薩像が納められている[(3)]。また、前立像の台座底面の墨書からは、文政 13（1830）年４月に京都の仏師である山口荘兵衛尉善長が彫刻したものとわかる。

大泊側からの観音道は、芝神社北側から地形に沿った登り道とみられるが、国道 42 号のあたりで地形が改変され、不明確となっている。現在、観音道の登り口は国道に面しており、ここから山上までの区間が国史跡（世界遺産）となり、西国三十三所霊場にまつわる石造物や道標などが設置されている（図 115）。登り口からは、猪垣に沿った石段の道が約 50m続き、江戸時代と大正時代の道標がある地点で観音道と山道が分岐する（図 116）。分岐点からは比較的緩やかな登り道で、石段・石畳を敷いた山寄せの道が続いてゆく。この他にも開削の道や岩盤を削平して路盤とする地点も確認できる（図 117）[(4)]。「観音様へ二丁」の道標

図 115　観音道　登り口と石造物

図 116　観音道　猪垣沿いの道と分岐点

図 117　観音道　岩盤を削平した路面と石畳

図 118　観音道　九十九折の石段

がある地点から「三十三番/谷汲山/華厳寺」銘の観音立像までの急峻な登り道には、九十九折の石段が設置されている（図 105・118)。「観音様不動明王一丁」の道標から清水寺入口までの登り道は、直線的な石段となる。

清水寺は、標高約 240mの尾根端部に位置し、延長約 40m、幅約 10mの平場には岩窟や石造物などが残っている(図 119)。境内跡には、大きく３段に築造された平場があり、上段が岩窟、中段が本堂、下段が参道となり、各段の間は石垣により区画されている。上段は、岩窟の前面に石垣で造成を行っており、建物の礎石が残置されている（図 120)。本堂にあたる中段は、周囲に石垣が巡り、南東側に向けて石段が取り付く（図 121)。下段の参道には、石段を挟んで北側に石垣造成にかかる記念碑と２体の地蔵菩薩坐像があり、石段の南側には石槽がある（図 121～124)。石段を下りた先には、江戸時代の石灯籠や近現代の記念碑が設置されている（図 144)。

【金滝山清秦寺】 熊野市大泊町に所在し、観音道の出発点に位置する(図 125)。永禄 12(1569)年の開山と伝わる。江戸時代には津波により被害を受けたとされる[5]。

【石垣造成記念碑】 比音山清水寺境内跡の石垣造成にかかる記念碑（図 123、表５)。「奉寄進當石垣／并堦矼築之／願主木本浦／享保十二丁未八月」

【地蔵菩薩坐像】 比音山清水寺境内跡にある地蔵菩薩坐像２体（図 122、表５)。

地蔵菩薩坐像（正面に向かい右）背面「慶安三年／松田武太夫／刁二月［埋没］」。

地蔵菩薩坐像（正面に向かい左）背面「慶安三年／武太夫女房／刁二月［埋没］」。

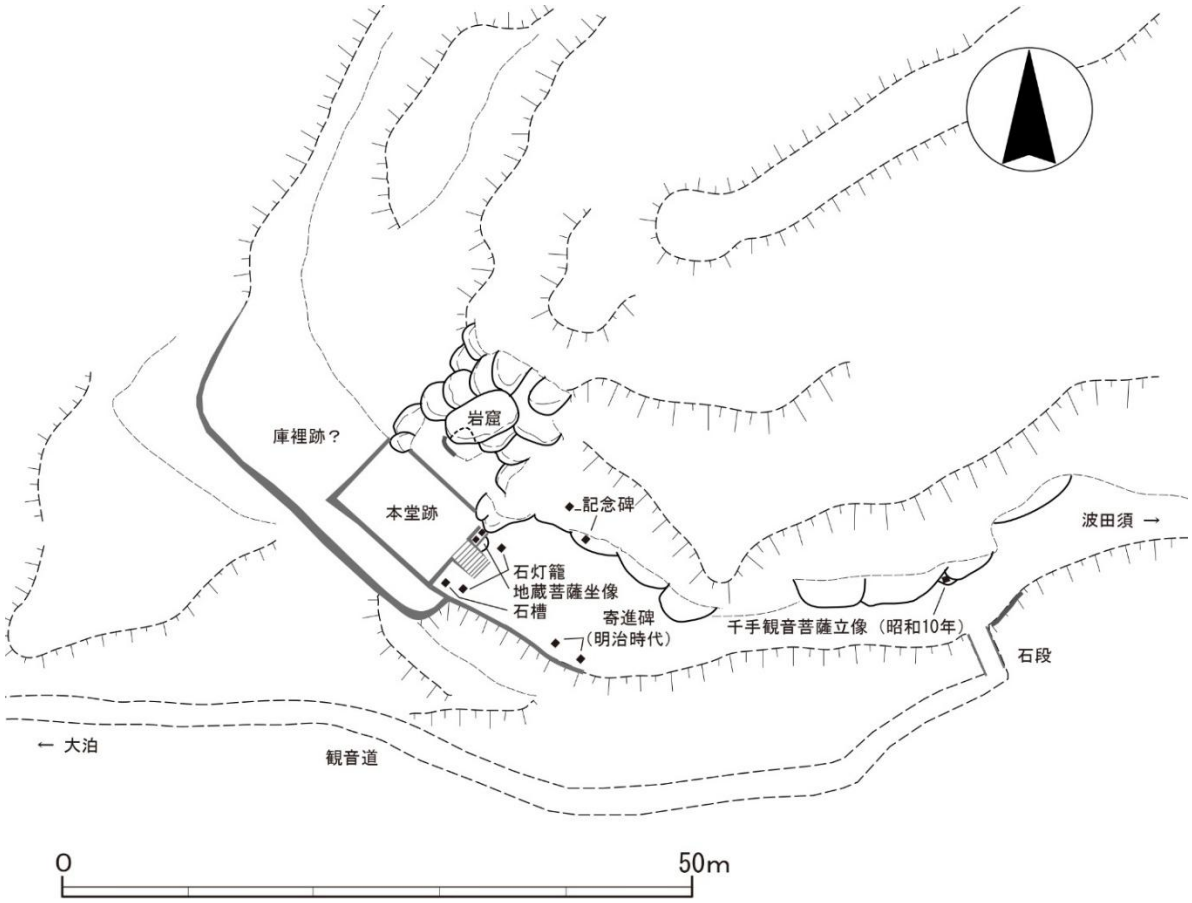


図 119　清水寺境内跡平面図（1/600）

【石槽】　比音山清水寺境内跡にある石槽（図 124、表５）。正面「木之本浦[埋没]／奉寄□／濱地善十□／由□」、右面「享保四己亥[埋没]、左面「五月十日」。

図 120　清水寺境内跡 岩窟

図 121　清水寺境内跡（南東から）

図 122　地蔵菩薩坐像

図 123　石垣造成記念碑

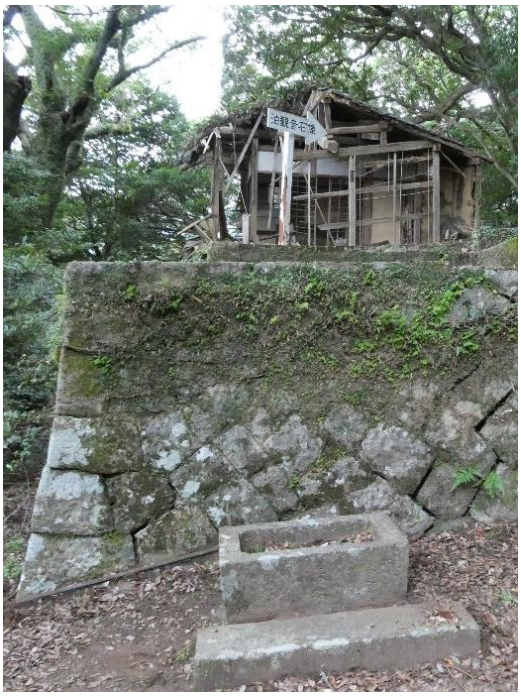


図 124　石槽

清水寺に関する文献　清水寺に関する記述について『巡礼通考』（延宝８〔1680〕年）には、「比音山清水寺（略）大同三年田村将軍草創ノ地ナリト云」、『西国三十三所道しるへ』（元禄３〔1690〕年）に「田村丸の建立し給ひし観音堂」とあり、この他にも坂上田村麻呂との関係性を強調する文献が多くを占める（表３）。『西国順行要路談』（天明３〔1783〕年）では、「比音山清水寺ト号、清滝ト云、右麓ニ観音、観音ノ別當金龍山清誅寺ト云禅宗アリ」とあり、清水寺から南西の山腹にある清滝（図 126）や麓にある別当の清泰寺（図 125）との関係性を記載するものもみられる。清水寺本尊は高さ一寸八分の千手観音菩薩で、本堂の岩窟に納めていたと記され、海中より現れたと伝わる秘仏であったことがわかる。

『西国三十三所名所図絵』（嘉永６〔1853〕年）所収の「清水寺縁起」では、比音山清水寺と京都府京都市東山区所在の音羽山清水寺との強い類似性を記している。音羽山清水寺は坂上田村麻呂を本願とし、本尊は千手観音、西国三十三所第十六番札所であり、坂上田村麻呂の伝説を媒介として、巡礼者に西国巡

図 125　清泰寺

図 126　清滝（大泊町芝神社北側から）

表３　比音山清水寺、松本峠に関する記述

No.	資料名	刊行年	清水寺	松本峠
1	巡礼通考　一名　西国名所記	延宝８(1680)	○比音山清水寺　三尺四面南何カケ作り 本堂千手観音　開帳百文 ○真佛ハ一寸八分（而レ）之ヨシ後ノ岩洞ニ納ムト云 ○大同三年田村将軍草創ノ地ナリト云 大泊ノ右ノ峠道ヨリ廿四五丁登リテ一村茂リタル中ニヲク深ク作リナシタル堂ナリ ○滝アリ高サ廿四五尺アリ、コノ堂ヨリ見レハ海中ニ鬼ノ岩屋あり、魔ミルカト云岩アリ、田村将軍コノ（○）テ鬼神退治セラレ則鬼ノ頭ヲコノ堂ノ下ニ埋ムヨシ、堂守リ語ル	大泊ヨリ廿余丁皆坂ナリ
2	西国三十三所道しるへ	元禄３(1690)	此所に田村丸の建立し給ひし観音堂あり、長一寸八分こかねの千手観音也、海底より揚給ふ仏とかや、此町より右の山のうへなり町より道のり十三丁程あり	木之本坂の峠に茶屋あり
3	伊勢西国道中日記	享保元(1716)	峠に田村丸こんりうのくわんおん有、はたすか村より右へ観音道あり、大とまりへいきぬけ也、ひおう山清水寺、清滝といふ滝有、高サ四十間	
4	巡礼案内記	享保13(1728)	此所ニ田村丸こんりうのくハんおんどう有、ひ仏也	大とまりより木の本へ （中略）次ニ川有坂
5	西国巡礼細見記	安永５(1776)	右の方十二丁程山に田村丸建立の観音堂有、御長一寸八分の千手観音、海中より出現、永代秘仏なり	木のもの坂あり
6	順礼道中指南車	天明2(1782)	右の方十二三丁山上ニ田村丸こんりうのくわんおん堂あり	木の本坂あり、上り坂中に茶屋あり
7	西国順行要路談	天明3(1783)	比音山清水寺ト号、清滝ト云、右麓ニ観音、観音ノ別當金龍山清誅寺ト云禅宗アリ	木之本坂あり、峠に茶屋あり
8	巡礼しなん車	寛政11(1799)	右の方十二三丁山上ニ田村丸こんりゅう乃くわんおん堂あり	木之本坂あり、上り坂中に茶屋あり
9	西国巡礼道中細見増補指南車	文化３(1806)	右の方十一三丁山上ニくわんおん堂田村丸こんりう、海より出現也	―
10	新増補細見指南車	文政12(1829)	右の方十二丁山上に田村麻呂建立の観音堂あり、長一寸八分海中より出現秘仏なり	木本峠に遥拝所あり
11	熊野日記	天保10(1839)	ほどなく大泊村にくだる。波田須より半道也。この里は茶を製すとみえて、日にほせるにほひこゝろよく鼻をうがてり。これらも時候はやし。この村をすぎ、川をわたり、坂にかゝる。この坂は観音坂といひて、しばしのぼれば名もしるく観音堂ありて、ひるね観音といふ。この観音堂の右のかたの石がきのうへにのぼりて、むかひをのぞめば、この観音堂の奥院なるに、木ぶかく、たかき山あり。その下にいと大きなる清滝といふ滝みえて、けしきよし。	観音坂といひ
12	天保新増　西国順礼道中細見大全	天保11(1840)	右の方十二丁山上に田村丸建立の観音堂有、長壱寸八分海中より出現の秘仏也	木本峠ニ遥拝所あり
13	西国三十三所道名所図絵	嘉永６(1853)	比音山清水寺　大泊村の北十丁ばかり山上にあり、寺の南三丁ばかり山の半腹に瀧あり、高さ三十間ばかりあり、高さ三十間ばかりあり 本尊千手観世音菩薩　岩窟観音、本堂の後にあり、岩窟の中に間浮檀金の観音を蔵む卜伝	木本峠　清水寺観世音遥拝所　木の本峠の半腹にあり、前に茶屋あり
14	熊中奇観	江戸時代後期	又坂路峠に観音堂、比音山清水寺といふ、俗に泊の観音と云、相傳大同年中坂上田村麻呂、京都清水寺の観世音を爰に移し建立し給ふ伽藍の跡なりと、又堂の後に岩窟あり、中に金銅の観音像を蔵と云、又三町計山の奥に瀑布あり、高卅間ばかり有となり	―

出典：伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究 :熊野参詣道伊勢路を事例に」2018年。左記にない文献は原典より記載。

礼と比音山清水寺の関連を想起させていたとの指摘もある[(6)]。

観音道の石造物　観音道の途中にある山道との分岐点には、江戸時代後期の道標と大正６（1917）年の道標がある（表４）。江戸時代の道標には「□□□□／右ハ／かんをんみち／左ハやまみち」とある（図 127・128）。大正６年の道標は柱状で、正面に「奉納右は観音道」とある（図 129）。

この他の道標には、大正 11～12（1922～1923）年銘の柱状の丁石があり、観音道大泊側に十丁、清水寺側に一丁が残る（図 130）。これらは、大泊から清水寺に向かう参拝者のために設置されたものと理解できる。丁石の銘は、一丁のみ「観音様　不動明王一丁」、二丁から十丁のものは正面「観音様へ○丁」、寄進者名や所在地などが記されている（表４）。現況では、五丁石と六丁石の設置距離が極端に短いことや九丁石が確認できないなど当初の位置から動いていると考えられるものがある。

図 127　観音道　江戸時代と大正時代の道標

図 128　江戸時代の道標

図 129　大正時代の道標

図 130　観音道　大正時代の道標　左から一丁石、二丁石、六丁石、七丁石、八丁石

図 131　開創碑

図 132　観音道　登り口の石造物

図 133　観音道　沢付近の石造物

熊野市大泊町の清泰寺境内には、「開創碑/熊野新四国/西国霊場」銘の造立碑と西国三十三所霊場第一から四番の石造物がある（図 131・134）。観音道には、登り口に第五から十五番霊場があり、ここから清水寺側に向けて第十六から二十九、三十一から三十三番霊場の石造物が各所に設置されている（図 132・133・135～142）。なお、第三十番霊場の石造物は、現地で確認できなかった。観音道は、この西国三十三所霊場にまつわる観音像が旅人を迎えてくれることで著名であるが、開創碑の背面の銘と第一番霊場如意輪観音坐像の台座銘「皇室安泰／御大典記念／国土舞平」から、昭和３（1928）年に昭和天皇の御大典を記念して、西国霊場にまつわる石造物が設置されたとわかる（表４）。

西国三十三所霊場の石造物は、舟形光背に図像と霊場（番数と寺院名）が彫られ、台座には寄進者名や所在地などがみられる。石造物の設置の順番は、清泰寺から清水寺に向けて番号順に設置されたと推定されるが、第五から十五番霊場のものは現道の設置などに伴いまとめられたとみられ、第二十から二十二番霊場の石造物は順番通りにはなっておらず、当初の位置から動いていると考えられる。また、観音道の沢の手前にある巨石下には第二十、二十一、二十四から二十六番霊場、「善光寺（ぜんこうじ）」銘がある阿弥陀三尊立像や江戸時代後期とみられる地蔵菩薩立像がまとまっている（図 133）。

この他、第二十八番霊場の石造物の近くには、文殊菩薩立像が単体で設置されている（図 142）。第三十三番霊場の観音立像は、清水寺境内跡から約 100m手前の平場にあり、この他の霊場の石造物と比べて最も大きく作成されている。この脇には、平成 22（2010）年に再建された祠があり、中には自然石を馬頭観音に見立てて安置している（図 143）。清水寺の入口には昭和 10（1935）年３月銘の千手観音菩薩立像（図 142）があり、本堂跡の岩窟には平成 26（2014）年に千手菩薩立像が奉納されている。境内跡には、近代の記念碑（図 144）や昭和 12（1937）年造の石灯籠（図 121）などがある。

図 134　観音道の石造物　左から西国三十三所第一番、第二番、第三番、第四番霊場

図 135　観音道の石造物　左から西国三十三所第五番、第六番、第七番、第八番霊場

図 136　観音道の石造物　左から西国三十三所第九番、第十番、第十一番、第十二番霊場

図 137　観音道の石造物　左から西国三十三所第十三番、第十四番、第十五番、第十六番霊場

図 138　観音道の石造物　左から西国三十三所第十七番、第十八番、第十九番、第二十番霊場

図 139　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十一番、第二十二番、第二十三番、第二十四番霊場

図 140　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十五番、第二十六番、第二十七番、第二十八番霊場

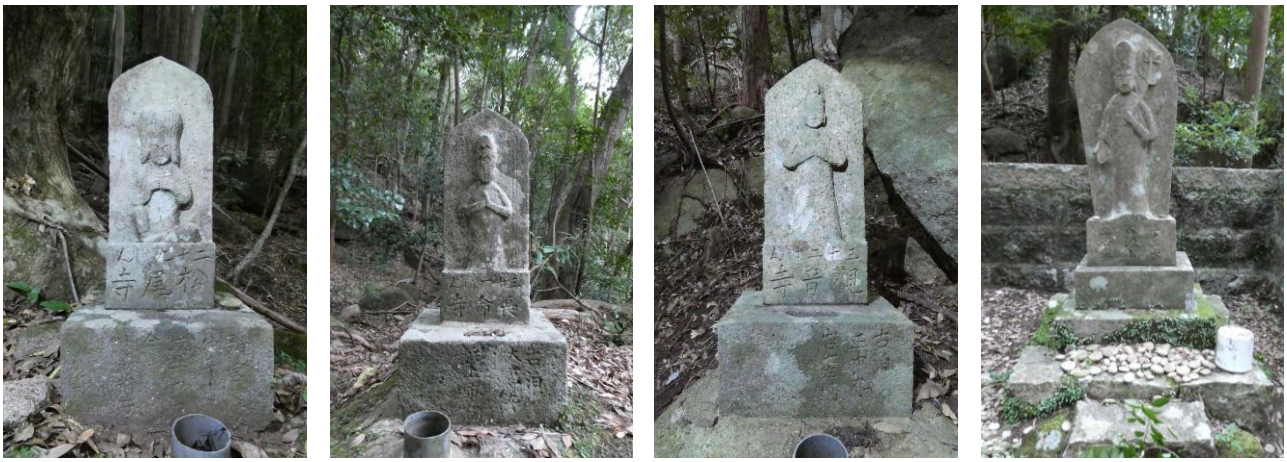


図 141　観音道の石造物　左から西国三十三所第二十九番、第三十一番、第三十二番霊場、第三十三番霊場

図 142　観音道の石造物　左から地蔵菩薩立像、阿弥陀三尊立像、文殊菩薩立像、千手観音立像

図 143　観音道の祠と馬頭観音

図 144　清水寺境内跡の歌碑、記念碑

表４　観音道の石造物一覧①

No.	地点/図番号	種別	時代	銘文、備考	大きさ（cm）	石材
1	観音道/図128	道標	江戸時代後期	正面「□□□□／右ハ／かんをんみち／左ハやまみち」	全高38,幅24,奥行9.5	砂岩
2	観音道/図129	道標	大正６年 （1917）	正面「奉納　右は観音道」※漢字には、ひらがなでルビを振る 右面「大正六年三月十七日」　左面「新宮中熊野地木村□をゑ／三十歳」	全高90以上,碑面高75.5, 幅19.5,奥行13.5	流紋岩
3	観音道/図130	道標　一丁石	大正時代	正面「観音様不動明王一丁」　左面「新宮熊ノ地岩宮喜代一」	全高60以上,幅13.5,奥行12	流紋岩
4	観音道/図130	道標　二丁石	大正11年 （1922）	正面「観音様へ二丁　柚木うめ」 左面「イサト村ワダ」　右面「大正十一年一月」	全高70.5以上,幅13.5,奥行13	流紋岩
5	観音道	道標　三丁石	大正時代	正面「観音様へ三丁」　左面「太地村　岸秀吉」	全高47.5,幅13.5,奥行11.5	流紋岩
6	観音道	道標　四丁石	大正時代	正面「観音様へ四丁」　左面「太地村　岸秀吉」	全高42.5,幅14,奥行11.5	流紋岩
7	観音道	道標　五丁石	大正時代	正面「観音様へ五丁」　左面「太地村　岸秀吉」	全高47以上,碑面高42,幅14,奥行11.5	流紋岩
8	観音道/図130	道標　六丁石	大正時代	正面「観音様へ六丁」　左面「太地村　岸秀吉」	全高60以上,碑面高42,幅13.5,奥行12	流紋岩
9	観音道/図130	道標　七丁石	大正時代	正面「観音様へ七丁」　左面「栗原幹郎」	高全69.5,碑面高36.5,幅13.5,奥行12	流紋岩
10	観音道/図130	道標　八丁石	大正12年 （1923）	正面「観音様へ八丁」 右面「大正十二年四月建」　左面「五郷村寺谷大崎寿一」	全高58以上,碑面高46,幅14,奥行11.5	流紋岩
11	観音道	道標　九丁石	－	※現地で所在確認できず	－	－
12	観音道	道標　十丁石	大正時代	正面「観音様へ十丁」　右面「太地村　岸秀吉」	全高46.5以上,幅14,奥行11.5	流紋岩
13	清泰寺境内 /図131	造立碑	昭和３年 （1928）	正面上「開創碑」、正面中央「熊野新四国／西国霊場」 背面　「一維時／昭和三年／十月十五日／発願主三木滋三／助願者仝政堅／碑□寄附竹村吉彦／石工和田春一」	全高222,幅104.5,奥行31	流紋岩
14	清泰寺境内 /図134	如意輪観音坐像 西国三十三所霊場第一番	昭和３年 （1928）	正面像下「第一番那智山」 台座上段正面「如意輪観世音」 台座下段正面「皇室安泰／御大典記念／国土舁平」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高77,幅42,奥行25 台座上　高49,幅35,奥行49 台座下　高57,幅37,奥行28	流紋岩
15	清泰寺境内 /図134	観音立像 西国三十三所霊場第二番	昭和３年 （1928）	正面像下「二番紀三井寺」 台座正面「勝田□□／三木滋三／三木滋□／三木□□」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高45,幅22,奥行13 台座　高34.5,幅32.5,奥行18	流紋岩
16	清泰寺境内 /図134	観音立像 西国三十三所霊場第三番	昭和３年 （1928）	正面像下「三番／粉川寺」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高51,幅21.5,奥行14	流紋岩
17	清泰寺境内 /図134	観音立像 西国三十三所霊場第四番	昭和３年 （1928）	正面像下「四ばん／槙尾山」、台座銘文不明 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高53,幅20.5,奥行15	流紋岩
18	観音道 /図135	十一面観音坐像 西国三十三所霊場第五番	昭和３年 （1928）	正面像下「五ばん/藤井寺」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高52.5,幅25,奥行17 台座　幅37,高・奥行不明	流紋岩
19	観音道 /図135	観音坐像 西国三十三所霊場第六番	昭和３年 （1928）	正面像下「六ばん/壺坂寺」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高52.5,幅25.5,奥行17.5 台座　高31,幅28.5,高10以上	流紋岩
20	観音道 /図135	如意輪観音坐像 西国三十三所霊場第七番	昭和３年 （1928）	正面像下「七ばん/岡寺」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高50.5,幅22,奥行16.5 台座　高31.5,幅30,奥行11.5以上	流紋岩
21	観音道 /図135	十一面観音立像 西国三十三所霊場第八番	昭和３年 （1928）	正面像下「八ばん/長谷寺」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面観音	像高51.5,幅20.5,奥行16 台座　高35.5,幅28,奥行5.5以上	流紋岩
22	観音道 /図136	観音坐像 西国三十三所霊場第九番	昭和３年 （1928）	正面像下「九ばん/南圓堂」 台座正面「木ノ本□/西村□□」 ※西国三十三所の本来の像は、不空羂索観音	像高50,幅22,奥行18 台座　高37.5,幅30.5,奥行8.5以上	流紋岩
23	観音道 /図136	観音立像 西国三十三所霊場第十番	昭和３年 （1928）	正面像下「十ばん/三室戸寺」 台座正面「木本町/泉や」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高46,幅23,奥行17 台座　高33.5,幅29.5,奥行11.5以上	流紋岩
24	観音道 /図136	観音坐像 西国三十三所霊場第十一番	昭和３年 （1928）	正面像下「十一ばん/上醍醐寺」 台座正面「木ノ本町／川口□□／粉川□／宮月□」 ※西国三十三所の本来の像は、准胝観音	像高55,幅23,奥行17.5 台座　高34,幅28,奥行14.5以上	流紋岩
25	観音道 /図136	観音立像 西国三十三所霊場第十二番	昭和３年 （1928）	正面像下「十二ばん/岩間寺」 台座正面「木ノ本町／大畑きん／森田ち□／岡本二□／森田か□」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高51.5,幅23,奥行17 台座　高33,幅29,奥行12以上	流紋岩
26	観音道 /図137	観音坐像 西国三十三所霊場第十三番	昭和３年 （1928）	正面像下「十三ばん/石山寺」 台座正面「木ノ本／嶌源之□／二木嶌／竹内伊□」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高56.5,幅26.5,奥行16.5 台座　高34,幅27,奥行14以上	流紋岩
27	観音道 /図137	如意輪観音坐像 西国三十三所霊場第十四番	昭和３年 （1928）	正面像下「十四ばん/三井寺」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高52.5,幅23.5,奥行18.5 台座なし	流紋岩
28	観音道 /図137	観音立像 西国三十三所霊場第十五番	昭和３年 （1928）	正面像下「十五番/今熊野」 ※※西国三十三所の本来の像は、十一面観音	像高48以上,幅17.5,奥行17 台座なし	流紋岩
29	観音道 /図137	観音立像 西国三十三所霊場第十六番	昭和３年 （1928）	正面像下「十六ばん/清水寺」 台座正面「大泊/向井暢太郎/向井虎雄」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高49.5,幅18.5,奥行13.5 台座　高35,幅29,奥行15.5	流紋岩
30	観音道 /図138	十一面観音立像 西国三十三所霊場第十七番	昭和３年 （1928）	正面像下「十七ばん/六波羅密寺」 台座正面「新宮／湯浅健児／仝／大江ふで」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面観音	像高53.5,幅22,奥行12 台座　高35.5,幅30,奥行18	流紋岩
31	観音道 /図138	如意輪観音坐像 西国三十三所霊場第十八番	昭和３年 （1928）	正面像下「十八ばん/六角堂/頂法寺」 台座正面「木ノ本／上田熊之助／仝のぶ」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高48,幅22.5,奥行15.5 台座　高32,幅28,奥行18.5	流紋岩
32	観音道 /図138	観音立像 西国三十三所霊場第十九番	昭和３年 （1928）	正面像下「十九ばん／革堂／行願寺」 台座正面「アタシカ／竹内清蔵／仝義男／仝行雄」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高53,幅24.5,奥行15.5 台座　高34,幅28,奥行19.5	流紋岩
33	観音道 /図138	観音立像 西国三十三所霊場第二十番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十ばん/善峯寺」 台座正面「はたす/森下作次郎」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高49.5,幅20,奥行14 台座　高34,幅27.5,奥行15	流紋岩
34	観音道 /図139	観音立像 西国三十三所霊場第二十一番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十一ばん/穴穂寺」 台座正面「木ノ本／前川菊一／仝たかゑ／仝かつゑ」 ※西国三十三所の本来の像は、聖観音	像高53,幅22.5,奥行14 台座　高32.5,幅28,奥行16.5	流紋岩

表５　観音道の石造物一覧②

No.	地点/図番号	種別	時代	銘文、備考	大きさ（cm）	石材
35	観音道 /図139	十一面観音立像 西国三十三所霊場第二十二番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十二ばん/総持寺」 台座正面「木ノ本町／前川蔵太郎／仝サイ」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高52,幅20.5,奥行11.5 台座　高34,幅27.5,奥行18	流紋岩
36	観音道 /図139	観音立像 西国三十三所霊場第二十三番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十三ばん/勝尾寺」 台座正面「新宮／熊能地／速水古夫」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高52,幅21.5,奥行16 台座　高35.5,幅29,奥行17	流紋岩
37	観音道 /図139	観音立像 西国三十三所霊場第二十四番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十四ばん/中山寺」 台座正面「シング熊地／山口八代彦／仝う□」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面観音	像高52.5,幅22.5,奥行15 台座　高38,幅31.5,奥行19以上	流紋岩
38	観音道 /図140	十一面観音坐像 西国三十三所霊場第二十五番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十五ばん/新清水寺」 台座正面「新宮／仲ノ丁／湯浅玉彦／仝ふく」 ※西国三十三所の本来の像は、十一面千手観音	像高52,幅22,奥行15 台座　高35,幅29,奥行18以上	流紋岩
39	観音道 /図140	観音立像 西国三十三所霊場第二十六番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十六ばん/法華寺」 ※台座埋没し銘文不明　※西国三十三所の本来の像は、聖観音	像高52,幅21,奥行13 台座　高33.5,幅29.5,奥行3以上	流紋岩
40	観音道 /図140	如意輪観音坐像 西国三十三所霊場第二十七番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十七ばん/書写山/圓教寺」 台座正面「新宮／熊能地／戎寅彦／仝ノブ」 ※西国三十三所の本来の像は、如意輪観音	像高53.5,幅22,奥行15 台座　高34.5,幅30,奥行18	砂岩
41	観音道 /図140	観音立像 西国三十三所霊場第二十八番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十八ばん/世野山/成相寺」 台座正面「新宮／神木元□郎／仝むめを」 ※西国三十三所の本来の像は、聖観音	像高62,幅25.5,奥行17 台座　高36.5,幅29.5,奥行19	流紋岩 台座は砂岩
42	観音道 /図141	馬頭観音坐像 西国三十三所霊場第二十九番	昭和３年 （1928）	正面像下「二十九ばん/松尾寺」 台座正面「新宮／仲ノ丁／坂井つね／仝／小森静子」 ※西国三十三所の本来の像は、馬頭観音	像高50,幅21,奥行15 台座　高34.5,幅29.5,奥行18	流紋岩 台座は砂岩
43	観音道	西国三十三所霊場第三十番	－	※現地で所在確認できず	－	－
44	観音道 /図141	観音立像 西国三十三所霊場第三十一番	昭和３年 （1928）	正面像下「三十一ばん/長命寺」 台座正面「古泊／大耆丸／浜上市松」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音・十一面観音・聖観音	像高52,幅20.5,奥行14.5 台座　高34.5,幅29.5,奥行16.5以上	流紋岩
45	観音道 /図141	観音立像 西国三十三所霊場第三十二番	昭和３年 （1928）	正面像下「三十二ばん/観音寺」 台座正面「古泊/正中丸/山口七左門」 ※西国三十三所の本来の像は、千手観音	像高53.5,幅22,奥行13.5 台座　高35.5,幅28,奥行17.5以上	砂岩
46	観音道 /図141	観音立像 西国三十三所霊場第三十三番	昭和３年 （1928）	正面像下「三十三番/谷汲山/華厳寺」 台座正面「寶祚長久/玉体康□」 台座右面「昭和三年九月」　※西国三十三所の本来の像は、十一面観音	像高124.5,幅52,奥行27.5 台座上　高59.5,幅43,奥行20 台座中　高77,幅57.5,奥行15.5 台座下　高110.5,幅111,奥行19.5	流紋岩
47	観音道 /図142	地蔵菩薩立像	江戸後期	台座正面「□□」	像高52,幅22,奥行13 台座　高26,幅24,奥行11以上	流紋岩
48	観音道 /図142	阿弥陀三尊立像	昭和３年 （1928）	正面像下「善光寺」 台座正面「泊観音講中」 台座右面「昭和三年九月」　※善光寺如来か但し、脇侍二尊は地蔵菩薩	像高81,幅32,奥行21 台座上　高44.5,幅34.5,奥行16 台座下　高59.5,幅55,奥行15	流紋岩
49	観音道 /図142	文殊菩薩立像	昭和	正面像下「文殊菩薩」 台座正面「三輪嵜町/木下幹彦/養子」	像高53.5,幅24.5,奥行17 台座　高34.5,幅30.5,奥行18	流紋岩
50	観音道　祠 /図143	馬頭観音	－	自然石 ※祠は、平成22年に再建したもの	－	－
51	清水寺境内　入口 /図142	千手観音立像	昭和10年 （1935）	右面「昭和十年三月」 左面「中西つね／顕政」	像高50.5,幅25,奥行15.5 台座上　高32,幅30.5,奥行15 台座下　高43.5,幅40.5,奥行19.5	流紋岩
52	清水寺境内 石段右/図123	石垣造成記念碑	享保12年 （1727）	正面「奉寄進當石垣／并堦矼築之／願主木本浦／享保十二丁未八月」	全高54,幅65.5,奥行23	流紋岩
53	清水寺境内 石段右/図122	地蔵菩薩坐像(正面に向かい左側)	慶安３年 （1650）	背面「慶安三年／武太夫女房／刁二月[埋没]」	像高69,幅65,奥行20	砂岩
54	清水寺境内 石段右/図122	地蔵菩薩坐像(正面に向かい右側)	慶安３年 （1650）	背面「慶安三年／松田武太夫／刁二月[埋没]」	像高67.5,幅68*奥行22	砂岩
55	清水寺境内 石段左/図124	石槽	享保４年 （1719）	正面「木之本浦[埋没]／奉寄□／濱地善十□／由□」 右面「享保四己亥[埋没]、左面「五月十日」	全高37以上,幅93,奥行55 内面　高17以上,幅72.5,奥行36	流紋岩
56	清水寺境内 岩窟/図120	千手観音立像	平成26年 （2014）	－	－	－
57	清水寺境内 参道/図144	記念碑	明治34年 （1901）	正面「中興開山　玉芝貫明宗師」 背面「明治卅四年四月廿七日」	－	－
58	清水寺境内 参道/図144	記念碑	昭和	正面「鈴原古登興女史碑」	－	－

大観猪垣道（だいかんししがきみち）　大吹峠（おおぶき）と観音道の間には、尾根沿いの猪垣に沿った道がある。この道はそれぞれの峠道の名前を取って「大観猪垣道」と現在は呼ばれており、江戸時代の巡礼日記などでの明確な記載は確認できていない[7]。『西国三十三所名所図会』に描かれた「木本峠（松本峠）」や「鬼ヶ城」越しの七里御浜は、大観猪垣道周辺からの眺望という指摘もある（図 197）[8]。大観猪垣道は、大吹峠（標高約 210m）から北西に向けて進み、地形に沿った山寄せの土道を約 200m行くと、尾根頂部（標高約 290m）に向けて急傾斜の石段や土道を登っていく（図 145～148）。尾根頂部付近には祠に山の神が祀られており、ここからは尾根上の石垣（猪垣）に沿った土道を約 400m進んでいく（図 149～150）。尾根頂部から約 100m進んだ地点（標高約 280m）では、南西側に眺望があり、松本峠越しに七里御浜を臨むことができる（図 198）。観音道までの残り約 100mは、石垣とは別の方向に向かう山寄せの土道が観音道との合流地点（標高約 260m）まで続く（図 151・152）。この区間には石造物は確認できない。

註

（1）熊野市史編纂委員会『熊野市史』下巻、1983 年。
（2）清水寺境内跡に設置された説明板より経緯をまとめた。
（3）和歌山県立博物館『特別展　聖地巡礼－熊野と高野－　第Ⅲ期人・道・祈り－紀伊路・伊勢路・大辺路をゆく－』2024 年。
（4）三重県・三重県教育委員会『熊野古道と石段・石畳』2007 年。
（5）註（1）前掲。
（6）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究 ：熊野参詣道伊勢路を事例に」2018 年。
（7）「大観猪垣道」の名称の由来については、三石学氏からご教授を得た。
（8）註（6）前掲。

図 145　大泊側から大観猪垣道への登り道

図 146　大観猪垣道　登り道の土道

図 147　大観猪垣道　登り道の石段

図 148　大観猪垣道　祠手前の登り道

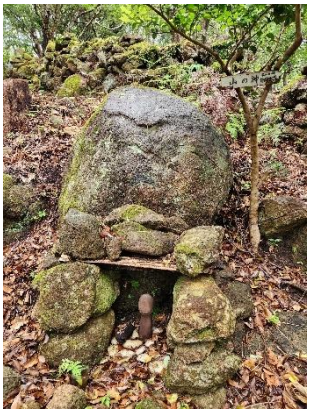


図 149　大観猪垣道　祠と山の神

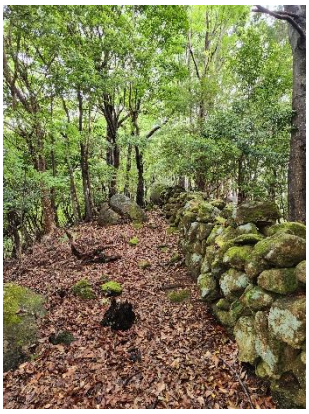


図 150　尾根上の猪垣に沿った道

図 151　観音道までの下り道

図 152　大観猪垣道　下り道の石段

５　大泊（おおどまり）から木之本（きのもと）を経て有馬（ありま）

○ 木之本

松本峠道　熊野道は、熊野宮川の河口にある熊野市大泊町の庚申祠から松本（まつもと）峠を越える江戸道と、熊野宮川の河口から上流に約 200mの地点で渡河し、松本峠を越える明治道がある（図 157）。明治道の造成は、木本浦と古泊の住民が泊湾での漁獲を巡って争い、敗訴した木之本の住人が代官所を襲撃した事件（「木本漁民乱入事件」、「代官所こぼち事件」、「鮪網騒動」などと呼ばれる）が関係すると指摘されている[(1)]。襲撃事件を起こした住民への徒刑として、松本峠の大泊側に新道の造成を行っており、明治３（1870）年に完成させた。

江戸道は、庚申祠前を通って国道 42 号と交差する地点までは舗装路となり、峠への登り口は地形の改変により不明確であるが、斜面地の途中から道の痕跡を確認できる（図 153）。この斜面地には段々畑があり、熊野道は畑の南縁にある土道とみられる（図 154）。斜面を登ると延長約 30m、幅約 10mの平場があり、石垣や巡礼供養塔、地蔵菩薩立像がある（図 155・156・158）。『熊野日記』では、この場所に「ひるね観音」と呼ばれる「観音堂」があり、大泊の清水寺（せいすいじ）や清滝（きよたき）を望むことができると記されている（表３）。

この平場から明治道との合流地点までは、尾根伝いの道で自然石を用いた石段・石畳が確認できる。道幅は約 1.5mとなり、平場から約 50～100m登った地点は尾根を開削した道となる（図 159・160）。江戸道は、標高 110m地点で明治道と合流する（図 161）。この地点から熊野市木之本町までの明治道は、江戸道の線形を踏襲していると考えられる。

明治道の登り口は、地形の改変により不明確であるが、国史跡指定（世界遺産登録）区間の登り口付近から地形に沿った土道があり、この区間は明治道を踏襲していると考えられる（図 157）。峠までの登り区間は、谷伝いの急峻な道を約 250m登り、尾根に出た後は等高線に沿った緩やかな登り道が峠まで続いていく。谷沿いの道は、斜面の片側を約１～２ｍの石積みで嵩上げし、路面には石段を設けている（図 162）。また、沢を渡渉する地点には延長 2.5m、幅 1.6mの一枚岩で橋を

図 153　松本峠江戸道　登り道

図 154　松本峠江戸道　石垣下の登り道

図 155　松本峠江戸道　石垣周辺の平場

図 156　石垣周辺から大泊への眺望

図 157　松本峠道(1/6,000)

架けている（図 163）。尾根から峠にかけては山寄せの道で、石段・石畳がみられる[(2)]。

峠には道を挟んで南側に延長約 15m、幅約 10mの平場があり、北側には尾根を階段状に削平した２段の平場がある（図 164）。北側の平場１段目には地蔵菩薩立像や無縫塔（むほうとう）など４基、２段目には供養塔３基と近現代の墓地がある（図 170～178）。峠には、江戸時代に瑞老山という庵寺が寺子屋として開かれ、師匠である鈴木穂積（安永４〔1775〕年没）の顕彰碑が建つ（図 175～177）。また、茶屋の住人と伝わる新屋家の墓地がある[(3)]。

峠から降り口までは地形に沿って緩やかに下る山寄せの道で、石畳がみられる（図 165）。石畳は、自然石を主体に用いた区間と、割石を主体とした区間がある（図 166～168）。前者は谷の段々畑に面する区間、後者は道標「松本峠 05/07」付近や「松本峠 06/07」から国史跡指定（世界遺産登録）区間の降り口にかけてみられ、明治時代以降の石畳の修繕によるものと推定される[(4)]。熊野道は、松本峠道の降り口から約 30mは割石を用いた石畳、その後約 100mは舗装路であり、再び割石を用いた石畳の道が正法寺前まで続き、正法寺から庚申祠までは舗装路となる（図 169）。

伝「観音堂」の石造物（松本峠江戸道の石垣付近）

【地蔵菩薩立像】　全高 52 ㎝、幅 19 ㎝、奥行 10 ㎝。像の左右に銘文あるが判読できず、像右７文字・像左８文字か。蓮台正面に線刻による蓮華文あり（図 158）。

【巡礼供養塔】　丹波国福知山（たんばのくにふくちやま）（現在の京都府福知山市）からの巡礼者のもの（図 158）。塔高 65 ㎝、幅 27 ㎝、奥行 27 ㎝。台座高 14 ㎝、幅 41 ㎝、奥行 39 ㎝。正面「為法性妙規信女菩薩/南無阿彌陀佛/安永二癸巳歳三月廿七日」、右面「丹波国福知山新町/紅粉屋太郎兵衛母」。

図 158　松本峠江戸道　石垣周辺の石造物（地蔵菩薩立像、供養塔正面・右面）

図 159　松本峠江戸道　石段

図 160　松本峠江戸道　開削の道

図 161　松本峠江戸道と明治道の合流地点

図 162　松本峠明治道　石段

図 163　松本峠明治道　石橋と石段

図 164　松本峠の平場

図 165　松本峠からの下り道

図 166　松本峠道　割石の石段

図 167　松本峠道　自然石の石段

図 168　松本峠道　降り口

図 169　松本峠道降り口から木之本間の石段

松本峠の石造物

【地蔵菩薩立像】　江戸時代中期のもの（図 170）。像高 171 cm、像幅 45 cm、奥行 26 cm、台座高 22 cm、台座幅 53 cm。蓮華座の花弁に銘文あり「残/無/建/立/之」。砂岩製。無縫塔供養者と一連のもの。

【経塚標識塔】　江戸時代のもの（図 171）。正面「大乗妙典普門品書寶塔」、背面「□門幽山僧」。砂岩製。

【無縫塔】　江戸時代中期のもの（図 172）。全高 135 cm、塔高 116 cm、幅 43 cm、奥行 43 cm。正面「一翁残無道心」。砂岩製。

【地蔵菩薩立像】　江戸時代のもの（図 173）。現高 36 cm、幅 24 cm、奥行 13 cm。砂岩製。

【供養塔】　正徳２（1712）年のもの（図 174）。塔高 123 cm、塔幅 27 cm、台座高 22 cm、台座幅 51 cm。正面「南無阿弥陀仏」下部に薬研彫の蓮華文、右面「正徳二壬庚天」、左面「正月十八日」、背面「播州加古郡高砂浦」、台座正面「施主／自遊道□」。砂岩製。いわゆる「祐天碑」。

【供養塔】　安永４（1775）年以降、寺子屋の師匠である鈴木穂積の供養塔（図 175～177）。正面「的翁幻瑞居子」、左面「安永乙未正月十八日先生卒年五十七先生新／宮人也姓穂積諱基救鈴木其氏也少時受書及／算術於湾井氏弱冠遊于東都於某矦甚見知／遇矦薨而去寶暦己卯帰隠於木本郷以教児／葷為業焉先生於業也精錬其教人也厳密循ニ／不倦至其終猶始餕也門人子弟連蝉為群集敬／日基先生歎日文夫當雄飛千仞何必雌伏尋常／之間吾則窮而已毛頴陳玄豈大丈夫之業哉為」、背面「人雄壮而有識度志存義烈言必忠信動見辭色／先生無子取門人西田氏以為螟子継業焉性嗜／酒不汲戚於貧富日與舊識子弟満白痛飲而酒／適門人諸所贈饋唯足供食餘盡敬於隣里没之／日室而縣磬矣越月日門人等卜地於瑞光山後／葬焉郷黨老少皆蒲伏而走喪焉自寶暦己卯至／安永乙未凡十七年門人総計五百三十有餘人／於是乎建碑於其側謹記日月係以銘日」、右面上段「魂兮何之／草業靡ニ／佳城欝兮／令徳維新／嗚呼夫子／儀或夫子／於萬斯年」、右面中段「魄兮何帰／茲柞茲芟／松栢丸ニ／開蒙発惑／死而不死／瑞光之丘／繁盛永享」、右面下段「荒ニ九原／維神所依／嗚呼夫子／化施衆人／無子有子／山高水長」。砂岩製。

【供養塔】　江戸時代中期のもの（図 178）。塔高 72 cm、塔幅 27 cm。正面「去士愛愍／為披先精霊如満等／至聖悲救」、左面「施主／孝人」。砂岩製。

図 170　松本峠　地蔵菩薩立像と蓮台下部の銘文

図 171　大乗妙典普門品書寶塔

図 172　松本峠　無縫塔

図 173　松本峠　地蔵菩薩立像

図 174　松本峠　供養塔

図 175　松本峠　供養塔　正面

図 176　松本峠　供養塔　左面

図 177　松本峠　供養塔　背面

図 178　松本峠　供養塔

図 179　三界萬霊塔

図 180　庚申祠

松本峠道木之本側の石造物

【三界萬霊塔・廻国供養塔】　松本峠降り口にある地蔵菩薩椅像で、台座に銘文あり（図 179）。宝暦３（1753）年。像高 77 ㎝、像幅 37 ㎝、奥行 28 ㎝。台座正面「有縁/三界萬霊/十方至聖/無縁」、台座右面「六十六部/信/雪庭得髄/供養塔/士」、台座左面「俗名/新□屋/□平次/當所」、台座裏面「寶暦/癸酉/正月/廿日」。

【庚申祠】　松本峠降り口にある庚申祠と石造物４基（図 180）。庚申祠はコンクリート製で、中に青面金剛立像１体あり。像高 107 ㎝、像幅 38 ㎝。台座高 23 ㎝、台座幅 48 ㎝。銘文は不鮮明。祠の外に青面金剛立像１体（昭和 53〔1978〕年銘）、地蔵菩薩立像２体（ともに上部が欠損）あり。

松本峠江戸道に関する文献資料　松本峠道の名称については、「紀伊国南牟婁郡大泊全図」（明治 18〔1885〕年）で峠の地番に「字　松本峠」とあり、字名が由来となっている。江戸時代の文献資料では、大泊から木之本にかけての説明で「木之本坂あり」、「木之本坂の峠」、「木本峠（木の本峠）」といった表記がみられる（表３）。松本峠の茶屋については、「峠に茶屋あり」とする文献と、「上り坂中に茶屋あり」とする文献がある（表３）。前者は『西国三十三所道しるへ』（元禄３〔1690〕年）、『西国順行要路談』（天明３〔1783〕年）、後者には『順礼道中指南車』（天明２〔1782〕年）、『巡礼しなん車』（寛政 11〔1799〕年）、『西国三十三所名図会』（嘉永６〔1853〕年）がある。

「木之本の坂」には、大泊の比音山清水寺の遥拝所（ようはいじょ）があるという記述がみられる（表３）。『新増補細見指南車』（文政 12〔1829〕年）や『天保新増西国順礼道中細見大全』（天保 11〔1840〕年）には、「木本峠に遥拝所あり」という説明がある。『西国三十三所道名所図絵』（嘉永６〔1853〕年）には「清水寺観世音遥拝所　木の本峠の半腹にあり」と記載されており、所在地の説明が分かれる。

『熊野日記』（天保 10〔1839〕年）には、「ほどなく大泊村にくだる。波田須より半道也。この里は茶を製すとみえて、日にほせるにほひこゝろよく鼻をうがてり。これらも時候はやし。この村をすぎ、川をわたり、坂にかゝる。この坂は観音坂といひて、しばしのぼれば名もしるく観音堂ありて、ひるね観音といふ。この観音堂の右のかたの石がきのうへにのぼりて、むかひをのぞめば、この観音堂の奥院なるに、木ぶかく、たかき山あり。その下にいと大きなる清滝といふ滝みえて、けしきよし」とある。大泊で川を渡り「観音坂」をしばらく登ると、「観音堂」があり、観音堂右側の石垣に登って向かいを望むと「観音堂の奥の院」があり、その下に清滝がみえる、といった具体的な位置関係が示されている。

『熊野日記』には、「観音堂の奥の院」の下に「清滝」があると説明されており、位置関係から「観音堂の奥の院」は比音山清水寺を示しているとわかる。比音山清水寺の向かい側に位置する「観音坂」は、他の江戸時代の文献資料にみられる「木之本坂」（松本峠江戸道）を指すと考えられる。江戸時代には、木之本坂や木之本峠は、比音山清水寺や清滝への視点場（遥拝所）と認識され、当時の名所であったと評価できる。

松本峠江戸道は、登り坂途中の平場には石垣や順礼供養塔と地蔵菩薩立像があって大泊側を望むことができ、樹木による遮蔽がなければ、比音山清水寺や清滝を望める場所である（図 156）。この場所が「観音堂」や「ひるね観音」と呼ばれていたと推定できる[5]。

鬼ヶ城　木之本の岬の突端には、国指定天然記念物及び名勝「熊野の鬼ヶ城附獅子巌」である鬼ヶ城がある（図 181・182）。鬼ヶ城は、東西約 1.2 ㎞にわたる凝灰岩による岩壁で、海食や風食を受け大小の洞窟が形成された景勝地である。大泊の比音山清水寺の「清水寺縁起」では、坂上田村麻呂の鬼退治伝説を烏帽子山、鬼ヶ城、魔見が島、大馬権現といった地形環境や宗教施設との関係性を背景として描いたと指摘されている[6]。

図 181　鬼ヶ城から大泊への眺望

図 182　鬼ヶ城　千畳敷

【烏帽子山】　熊野市大泊町の北側に所在し、現在「烏帽子岩」とも呼ばれている大岩。

【魔見が島】　鬼が城の沖合、約 1.5 ㎞離れた地点にある島。

【大馬権現】　熊野市井戸町の北側の山間部に所在し、現在の大馬神社を指している。「清水寺縁起」では、「大魔権現」と記され、坂上田村麻呂の祈願所と伝わる。

木之本の道　熊野市木之本町から井戸町に向かう道は、全て舗装路となっている（図 183）。熊野道は松本峠道を降りた先にある庚申祠や三界萬霊塔の前を通り、笛吹橋を渡って町中の通りに入っていく（図 185）。笛吹橋を渡った後は、通りを直進していくと、木本神社北側の通りで西へ方向を変える（図 186）。町中の通りを西へ直進し、要害山の手前で道が南へ折れ、再び西に進んで稲倉稲荷神社前を通過する（図 187・188）。「木本組全図」（天保３〔1832〕年）では稲倉稲荷神社の前に馬留があり、ここが和歌山藩本藩領と新宮領の境界であることが記されている（第 184 図）。また、絵図に記された江戸時代の街道や町中の通りの状況が、現在の街並みに踏襲されていることが読み取れる。『西国三十三所名所図会』（嘉永６〔1853〕年）の「木本湊」挿絵では、町の賑わう様子が描かれている（本書表紙）。説明には、「峠を下りて此地にいたる。東南をうけたる便宜の舟着きなるがゆえに、職家、商家、旅篭屋、漁師など打ちまじりて人家しばしば建ちつらなり。よろずに足りて豊饒なり」とあり、多くの人や物資が集まる町であったことがわかる。

【要害山】　『西国順行要路談』（天明３〔1783〕年）では「町ノ出口西ノ方に高二十間程アル要界石ト云大岩アリ」と記載がある（図 187）。

【奥熊野代官所跡】　熊野市指定史跡で、木之本町の北西に所在した和歌山藩本藩領の代官所跡地（図 183・184）。元和５（1619）年に徳川頼宣が紀州藩の藩主となった際に設置された。紀伊国は７郡にそれぞれ代官所を置いており、牟婁郡（現在の三重県北牟婁郡紀北町から和歌山県西牟婁郡まで）は広域のため、口熊野と奥熊野に分けて代官所が設置された。また、新宮とその周辺は家老水野氏の領地であったため、木之本町の西側にあたる井土村馬留（現在の熊野市井戸町）を境に、和歌山藩本藩領と新宮領に分かれていた[7]。

図 183　木之本の道（1/10, 000）

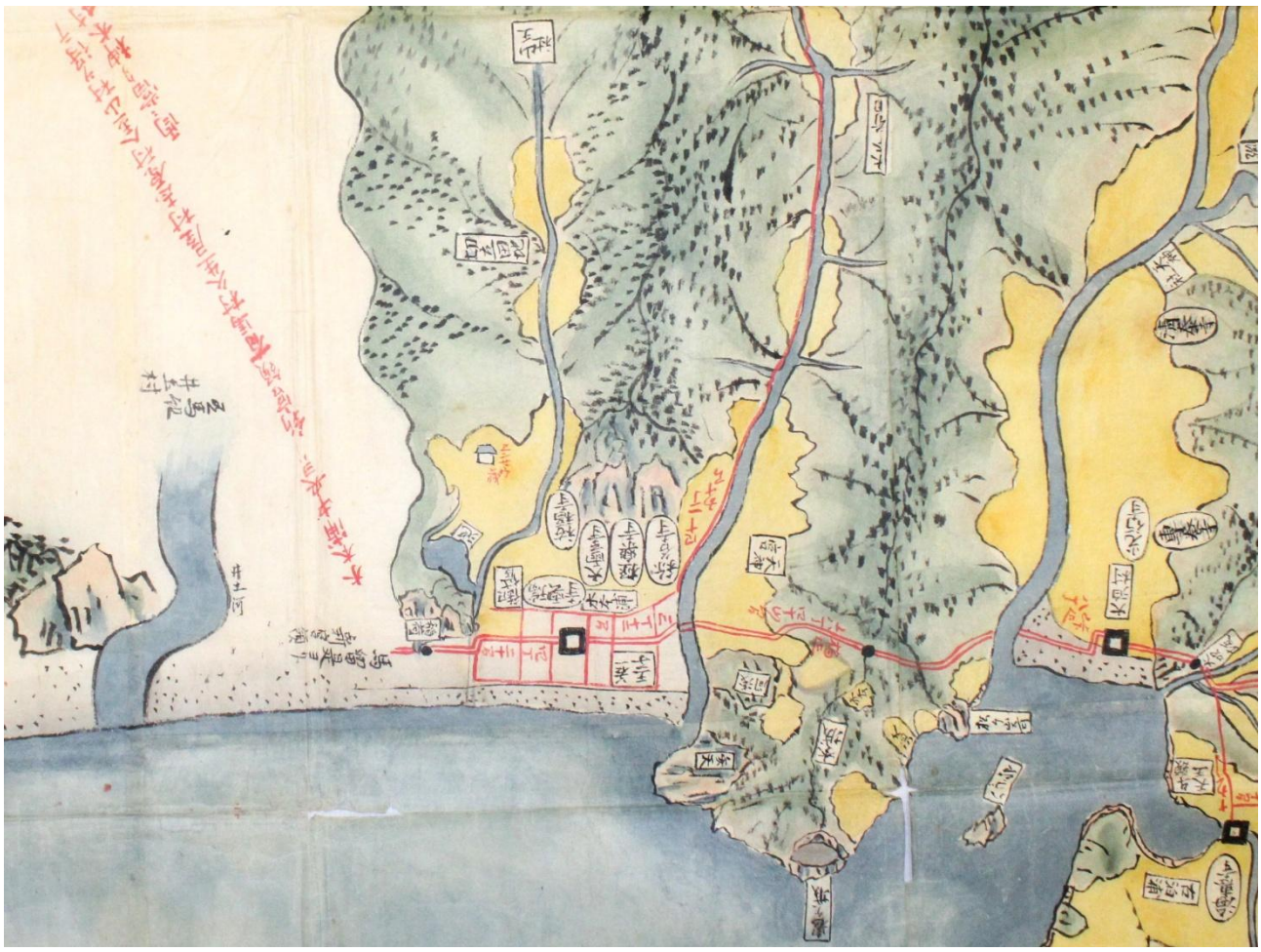


図 184　「木本組全図」部分（熊野市歴史民俗資料館蔵）

図 185　笛吹橋

図 186　木本神社

図 187　要害山

【稲倉稲荷神社】　井戸町馬留に所在する（図 188）。木之本新出町の奥川家が寛文年間に京都の伏見から勧請したことが由来という。神社南側の地蔵堂には「手無地蔵（てなしじぞう）」と呼ばれる地蔵菩薩立像が安置されている（図 189）[8]。地蔵菩薩立像は像高 145 ㎝、台座高 65 ㎝、台座正面「享保五年五月二十四日」。

【木本組全図】　熊野市指定有形民俗文化財（図 184）。天保３（1832）年に公儀の命により紀ノ文三が描いた絵図で、現在の尾鷲市から熊野市の沿岸部を管轄した紀州藩木本組の範囲を描いている。絵図には、山林や河川といった自然環境、地名や街道、社寺などが記されている。木之本では、「若一王子」（木本神社、図 186）、「天神宮」（松葉山天満宮（まつばやまてんまんぐう））、「稲荷」（稲倉稲荷神社、図 188）といった神社、「称名寺（しょうみょうじ）」（図 190）、「極楽寺（ごくらくじ）」（図 191）、「大雲寺（だいうんじ）」、「祐福寺（ゆうふくじ）」（図 192）、「瑞雲寺（ずいうんじ）」（図 193）といった寺院、「御代官」（奥熊野代官所）がみられる。

図 188　稲倉稲荷神社

図 189　地蔵堂の「手無地蔵」

図 190　称名寺

図 191　極楽寺

図 192　祐福寺

図 193　瑞雲寺

○井土から有馬

井土から有馬の道　熊野市井戸町の沿岸部は、江戸時代には井土村と呼ばれ、『西国三十三所名所図会』（嘉永 6〔1853〕年）にも村名が確認できる。明治時代には山間部の瀬戸村と合わせて井戸村となり、明治 20（1887）年には「紀伊国南牟婁郡井戸村全図」が描かれている。「紀伊国南牟婁郡井戸村全図」では河口部で砂堆に沿って西南に蛇行した後に海に流れ込んでおり、河口は獅子巌の付近となるが、現在では井戸川河口部は海岸まで直線的に流れ込んでいる（図 183・196）。熊野道は、稲倉稲荷神社前の馬留から海岸を通る直線の道で描かれており、この区間は「七里御浜」を歩いて熊野市有馬町へと向かう。

『西国三十三所名所図会』の挿絵「七里の濱」では、「木ノ本」から「二王石（獅子巌）」の間に浜を歩く旅人が描かれている。また、「井土川」（現在の井戸川）については、海際の川で波が高い時には危険なため、引潮を見計らい渡るとある。井土川の水量が多い時には、井戸町馬留にある「手無地蔵」（図 189）の辺りで川の道に下りて、舟に乗り獅子巌の麓まで至ったという[9]。

獅子巌付近の丘陵の海岸へ突出する地点が、江戸時代の井土村と有馬村の境界となる（図 183）。ここより熊野道は七里御浜から有馬町羽市木の集落内の舗装路を通り「花の窟」まで至る。

図 194　獅子巌

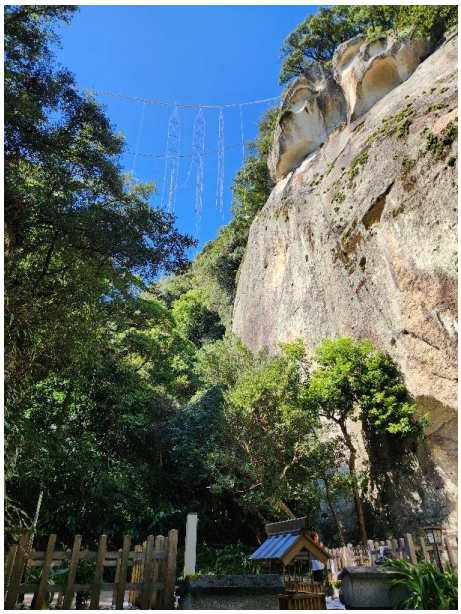


図 195　花の窟

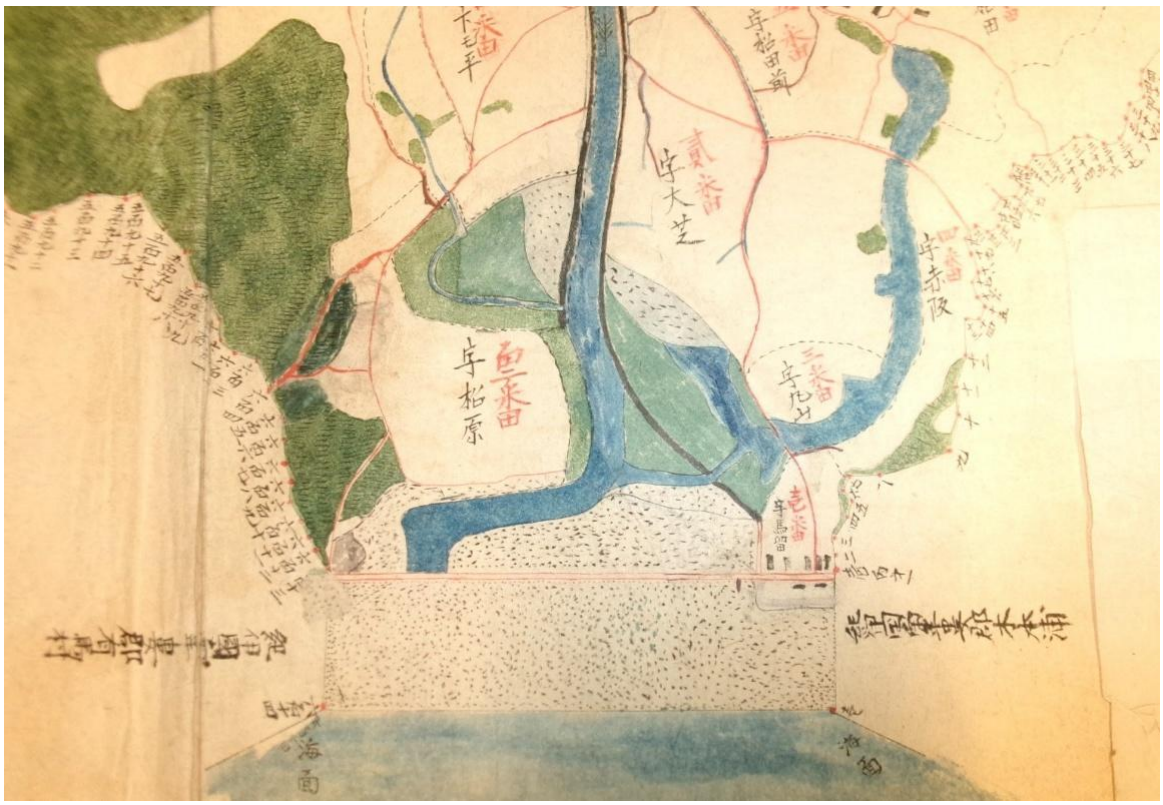


図 196　「紀伊国南牟婁郡井戸村全図」部分

【獅子巌】　国指定天然記念物及び名勝「熊野の鬼ヶ城附獅子巌」（図 194）。『西国三十三所道しるへ』（元禄３〔1690〕年）では、「是より西いつち村と云所にあふま権現の社あり、此権現の二王石といふなり、此岩のかしら一つは口をひらき一つは口をとぢて居る形に見ゆる」とある。他の江戸時代の道中案内記についても、「あふま権現の二王石」という記述があり、井戸町北側の山間部に所在する神社「大馬権現」に関連する見所として巡礼者に紹介されている[10]。

【花の窟】　国指定史跡（図 195）。日本の神話に登場する国産みの祖先神・伊弉冉尊（いざなみのみこと）の葬地という伝承を持つ神社。11 世紀頃の紀行文には、熊野詣の帰りに花の窟に詣でたという記載がある。道中案内記では、非常に高い「岩壁」「岩山」を「大般若山」といい、その上方にある穴を「花の岩や」と呼んでいる[11]。三重県指定無形民俗文化財「花（はな）の窟（いわや）のお綱（つな）かけ神事（しんじ）」は、高さ約 50mの山上から扇や梅、椿、菊といった季節の花などを綱に括り付けた長さ約 170mの綱を張る神事である。毎年２月２日、10 月 10 日に行われている。

註

（1）①三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ　熊野街道』1981 年。
②熊野市教育委員会『熊野市の文化財』2014 年。
③向井弘晏「“代官所こぼち事件”と熊野古道松本峠の新道」『ヨシクマ新聞』吉野熊野新聞社、2023 年 11 月５日。
（2）三重県・三重県教育委員会『熊野古道と石段・石畳』2007 年。
（3）註（1）①前掲。
（4）註（2）前掲。
（5）註（1）③前掲。
（6）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究 ：熊野参詣道伊勢路を事例に」2018 年。
（7）註（1）②前掲。
（8）熊野市史編纂員会『熊野市史』下巻、1983 年。
（9）註（1）①前掲。
(10) 註（6）前掲。
(11) 註（6）前掲。

６　有馬から下市木

○　有馬から志原

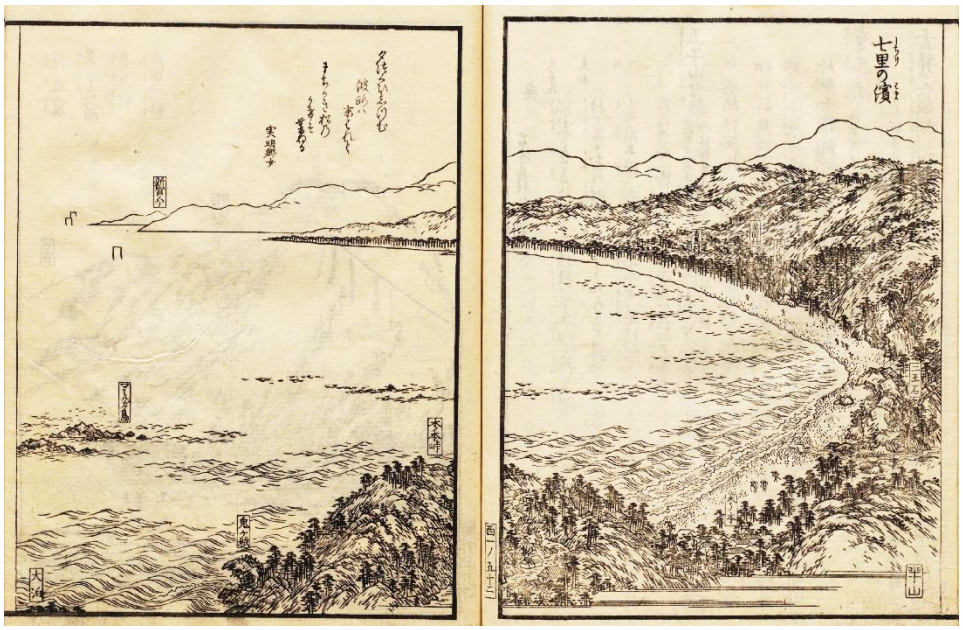


図 197　七里の濱（『西国三十三所名所図会』）

浜街道　熊野道は、花の窟を過ぎると有馬の街中へと西進した後、進路を南へと変える。巡礼者は、熊野灘を望みながら七里御浜（図 197・198）の浜辺を歩くことを選択することもできたが、熊野灘からの高波は危険とされてきた。とくに、複数の道中案内記にも記されたように[1]、井戸川や志原川、市木川など河口部の浅瀬を渡る際には、高波の合間を走り渡る必要があることから、親子であっても振り向く余裕がない「親しらず子しらず」と呼ばれる難所が存在する。沿岸部の各所には、高波を鎮めるための竜宮塔（図 199）などが江戸時代以降に建立された。また、花の窟神社の鳥居前にある口有馬の道標（図 200）には、巡礼者を浜辺から山道へと誘導する記載があり、山沿いの産田神社方向へと続く本宮道への分岐点であった。

図 198　大観猪垣道からみた七里御浜

【七里御浜】　熊野市から御浜町・紀宝町にかけて続く約 22 kmにわたる砂礫浜で、浜と並行して最大幅約 120 mの松林と暖地性照葉樹林を主とする防風林が断続的に続く。このうち、約 17 kmの範囲が国史跡に指定され、世界遺産に登録されている。七里御浜の範囲の解釈には変遷があり[2]、近世前期～中期の資料では木本から宇久井までの約 30km を指す。一方で、近世末期の『西国三十三所名所図会』には「木本の町はずれより百数十丁（約十数km）の間をいう」「この浜は木本の湊より新宮にいたる街道にして」と記されており、浜街道として実際に歩かれた、木本から井田の約 17km の区間が示されている。また「風景言語に絶す実に旅中第一の景地」と評されており、こうした南海の絶景を望むことができる浜街道を選んで歩く旅人も多かったと考えられる。

図 199　口有馬竜宮塔

【口有馬竜宮塔】　道の駅花の窟の裏にある松林内に位置し、井戸町にある安政７（1860）年銘をもつ松原の龍宮燈や後述する志原尻龍神燈、市木川水神塔などと同様のものと考えられる。『熊野年代記』の安政６（1859）年の記事には「八月井土村田地へ塩入、凡百人計の人数にて湊口を切る、にわかに流れ出で九人流死」などとあり[3]、熊野灘の水難や高波を鎮めるため、沿岸部の

各所に設置されたと考えられる。

【ロ有馬道標】　花の窟神社鳥居前の道の対面に位置する道標で、「右／くまのさん／志〝ゆんれい／道」と記されている。本来道標は左～、右～と記され、道の分岐点に設置されるが、ここでは巡礼者が熊野灘の高波で流されないことを配慮してか、山側の道を歩くように誘導している。紀年銘はみられないが、江戸時代後期と推測される『熊中奇観』(4) には、後述する立石の道標とともに、この道標と思われる石碑が花の窟神社鳥居前に描かれており（図 201）、江戸時代後期にはすでに設置されていたと推測できる。熊野市指定有形民俗文化財。

図 200　ロ有馬道標

有馬の街中を約 800m南進すると、右手に南有馬庚申塔（図 202）と元禄８（1695）年銘の石燈籠があり、さらに約 200m南進すると、道は二又に分かれた三差路となる。この分岐には、「（正面）右ほんくう近道／志ゅんれい道（裏面）文政三（1820）／辰七月十一日」と記された有馬立石の巡礼道標（熊野市指定有形民俗文化財）が設置されている（図 203）。江戸時代の道中記には「右は本宮、左は新宮の分かれ道あり」(5)、道中案内記には「右は本宮、左は新宮　たて石有」などの記載がみられ (6)、旅人にとっては重要な分岐点であった。本宮道へは、分岐する道を右に進み、さらにその先で右に曲がるため、市街地化した現在ではわかりにくいが、明治 19（1886）年の「紀伊国南牟婁郡有馬村全図」(7) では、道標から先の一帯は建物等の記載はなく、草木を示す緑色で表現されている。道標を左に進む浜街道も、現在のような市街地ではなく、当時は松林の中を進む道であったと考えられる。分岐から約２㎞南進すると、左手に一里塚（図 205）が残存する。

図 201　有馬の道標「熊中奇観」（和歌山県立博物館蔵）

図 202　南有馬文字庚申塔

【有馬丁塚一里塚跡】　浜街道を挟んで両側の南北に１基ずつ塚があったと伝えられる。現存する塚は、道の南東側にあったとされるもので、国道拡幅時に一部が削られている。一方で、道を挟んだ北西側にも塚があり、昭和 37（1962）年の国道改修時に消滅したとされる (8)。これらを踏まえると、現在の国道 42 号と重複する範囲に、浜街道があったと考えられる。熊野市指定史跡。

図 203　有馬立石の巡礼道標（正面・裏面）

有馬の浜街道は、熊野灘沿岸の浜辺に発達した海抜５～15ｍの海岸砂州上を通る。この発達した砂州により、産田川と志原川の河口部が閉塞されることで、有馬池や大前池、志原池な

図 204　有馬の道（1/10,000）

どの後背湿地あるいは潟湖が砂州と並行して帯状に形成されている（図 206）。

有馬の一里塚から約 1.5 ㎞南進すると、志原川の河口部に至る（図 207）。ここは、先述した「親しらず子しらず」と呼ばれる難所の一つで、多くの道中案内記にも記載されている。浜街道左手の松林内には、志原尻の龍神燈（熊野市指定有形民俗文化財）が波鎮めのためか建立されている（図 208）。一方で、河口部が大水や高波などにより渡河できない場合は、18 世紀後半以降の道中案内記や道中日記に多くみられるように、街道から右に進めば舟渡しがあった[9]。「紀伊国南牟婁郡有馬村全図」[10] には、志原川の手前で浜街道から右に分岐する道も複数記されている（図 209）。この辺りに渡し場があったと考えられ、江戸時代に渡し場を開いた人物として湊安右衛門や赤松左伝次が伝えられている[11]。渡し場へと至る道沿いの森の中には水門・秋葉神社があり（図 210）、鳥居の右手には明治 13（1880）年銘の文字庚申塔が位置する。当時は、この神社の道先に志原川の渡し場への下り口の一つがあったと想定できるが、現在はＪＲ紀勢本線の線路の盛り土によって、川への下り道は寸断されている。その後、明治年間には志原川に木橋が架けられるが、頻繁に流されたため、昭和９（1934）年に潮止めの水門と一体の旧志原橋（現在は通行不可）（図 212）、昭和 47（1972）年には新志原橋（国道 42 号）が整備された。志原川を渡り約 200m南進すると、神志山（こうしやま）交差点の左手に巡礼供養塔及び墓碑が計３基みられるが（図 213）、いずれも後世に移設されたものである。

図 205　有馬丁塚一里塚跡

図 206　大前池と海岸砂州

図 207　志原川河口部

図 208　志原尻の龍神燈

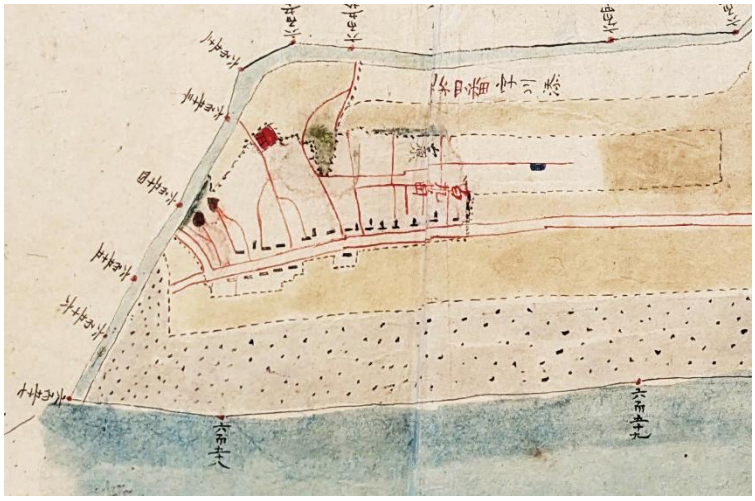


図 209　志原川渡し場（「紀伊国南牟婁郡有馬村全図」部分）

図 210　水門・秋葉神社

図 211　有馬から志原の道（1/10,000）

【水門・秋葉神社】　志原川河口にある小規模な神社で、大波に起因する海水の流入による塩害から稲を守るため祀られている。祠の右隣には、地中にロの字形の石囲いがあり、周囲にはやや大振りの玉石が円形に敷かれる。産田神社にみられる神籬（ひもろぎ）に類似する。境内には、慶応４（1868）年銘の石燈籠が建立されている。

【志原の供養塔及び墓碑】　国道 42 号から防風林内の歩道入口に３基の石造物が並ぶ。左から「（正面）還邦信士（右面）文化九申（１８１２）三月四日（左面）丹州船井郡質志村／北村八郎エ門」銘の供養塔、「延宝二年（１６７４）三月二九日／奉納西国三十三番巡礼水雲寛法／紀州日高志賀村仲吉郎」銘の墓碑、「空月源智／天和三亥（１６８３）六月二五」銘の墓碑が並ぶ。いずれも当初は国道の反対側にあり、供養塔は道路の改修時、墓碑２基はスーパーマーケットの建設時に移設されたとされる[12]。延宝２（1674）年銘の墓碑は、西国三十三所巡礼を明記した東紀州地域最古の石造物である。御浜町指定有形文化財（建造物）。

図 212　旧志原橋

図 213　志原の供養塔及び墓碑

○　下市木

巡礼供養塔および墓碑を過ぎると、熊野道は志原から下市木に入る。すぐ右手にＪＲ紀勢本線の神志山駅があり、駅前ロータリーには、周辺が市街地化する以前の松林が一部残されている。道が通る砂州西側の低地は、有馬と同様に後背湿地となり、壺の池（図 214）や蓑の池が形成されている。壺の池を過ぎ、字三軒屋から右手に本宮道へと繋がる分岐があり、付近の三軒屋・浜・萩内では、昭和初期頃まで餅や田舎寿司を売る茶屋があったとされる[13]。実際に、文化３（1806）年の『西国順礼道中細見増補指南車』には「市木村茶屋有」との記載がみられ、明治 19（1886）年の「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」[14]をみると、壺の池南側一帯の小字名は「茶屋」である（図 215）。さらに、壺の池前に祀られている池大明神の境内の石燈籠には「（正面）奉寄進（裏面）天明四辰（１７８４）十二月／茶屋松兵衛」と記され（図 217）、地名や人名にも茶屋の記載が多くみられ、近世から昭和にかけて、複数の茶屋が存在したと考えられる。

図 214　壺の池

蓑の池を過ぎ、市街化した道を約 1.5 km 南進すると、市木川の河口部に至る。左手の砂礫浜には、三重石塔の市木川水神塔のほか、大正２（1913）年銘の石碑など、３

図 215　下市木の茶屋（「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」部分）

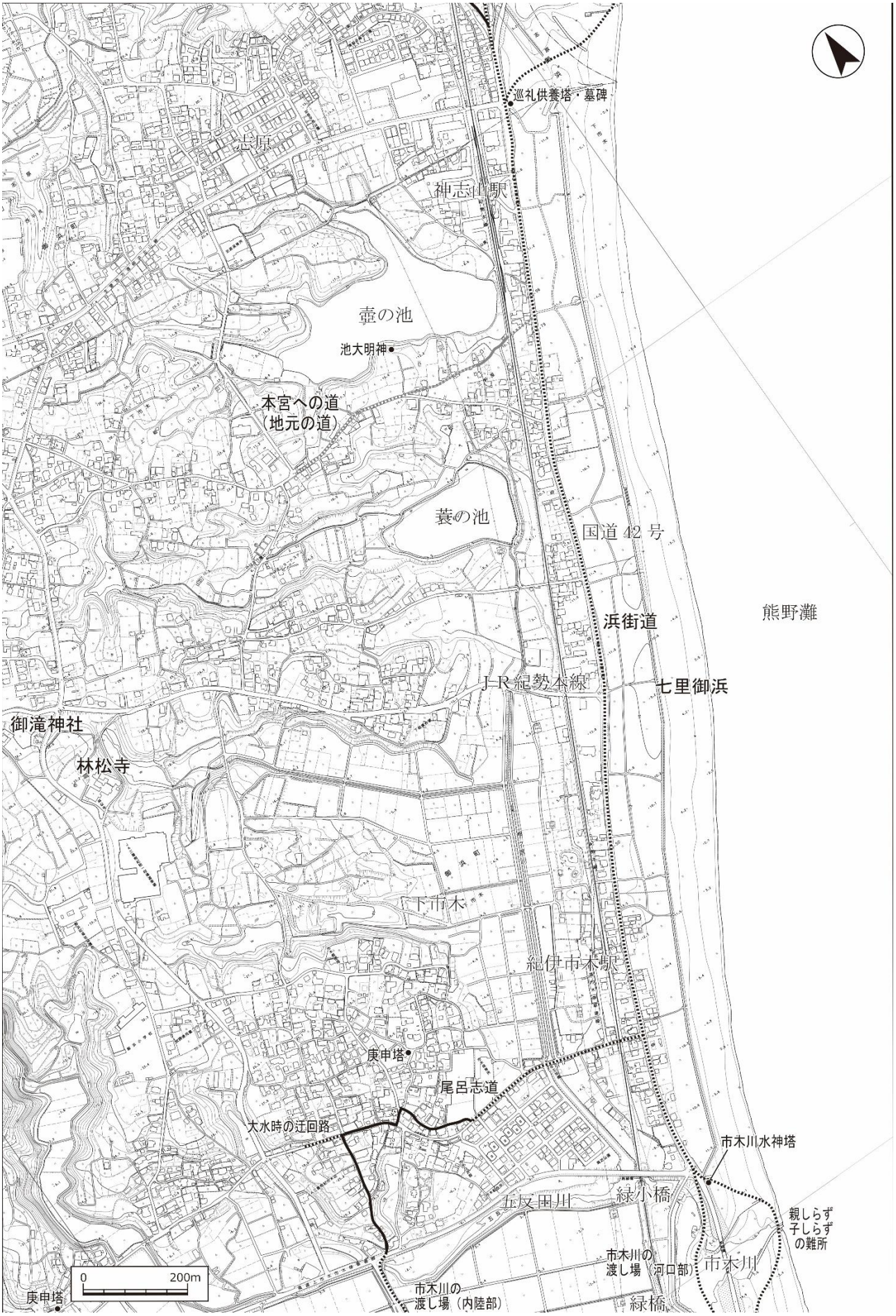


図 216　志原から下市木の道（1/10,000）

基の水神碑が建ち並ぶ（図 218）。市木川も志原川と同様に、高潮や台風などの大水により、周辺地域の水田や交通に大きな被害をもたらしていた。特に河口部（図 219）では、北から五反田川が合流することもあり、大水時には内陸部の稲荷神社や八幡神社の周囲まで水に浸かり、さながら湖水のようであったとされる[15]。

図 217　池大明神石燈籠（正面・裏面）

道中案内記では、志原川が「親知らず」に対し、市木川が「子知らず」とする記載とともに、高潮時は右の方に渡しありとの記述がみられる[16]。「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」[17] に記載された道から、海岸や河川の状況に応じて、渡し場の位置が河口部や内陸部に変動したと考えられる（図 220）。河口部の渡し場は、現在の国道 42 号よりやや西側と推測でき、渡河後約 100m南進した地点で徒歩により渡河した道と合流する。この合流点付近には、市木一里塚（図 222）が位置している。現在、市木川の河口部には、歩行者が通る緑橋（図 223）の旧道と、自動車が通る国道 42 号の新道が架橋されている。

図 218　市木川水神塔及び石碑

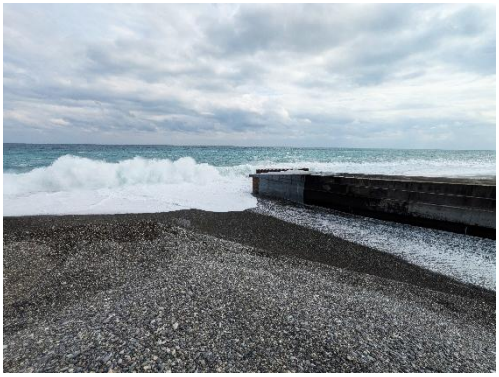


図 219　市木川河口部

一方で、内陸部の渡し場へは、河口部よりも約 500m手前の現在の下市木交差点を右に曲がる。この交差点は、御浜町上野（うわの）で本宮道に合流する尾呂志（おろし）道の起点で、さらに約 700m西進して十字路を左に曲がった先、現在の稲荷橋の付近に渡し場があったと考えられる。舟付という字名が隣接して残っている点もそれを裏付ける[18]。

市木川を渡ると、地元では古道阿田和（あたわ）道と呼ばれる尾呂志に通じる道と阿田和を結ぶ道に接続する。阿田和に南進する萩内の道中には、庚申祠の他、大日如来碑、稲荷碑、牛頭観世音菩薩碑などが祀られた碑群祠がある（図 224）。

図 220　市木川周辺の道（「紀伊国南牟婁郡下市木村全図」部分）

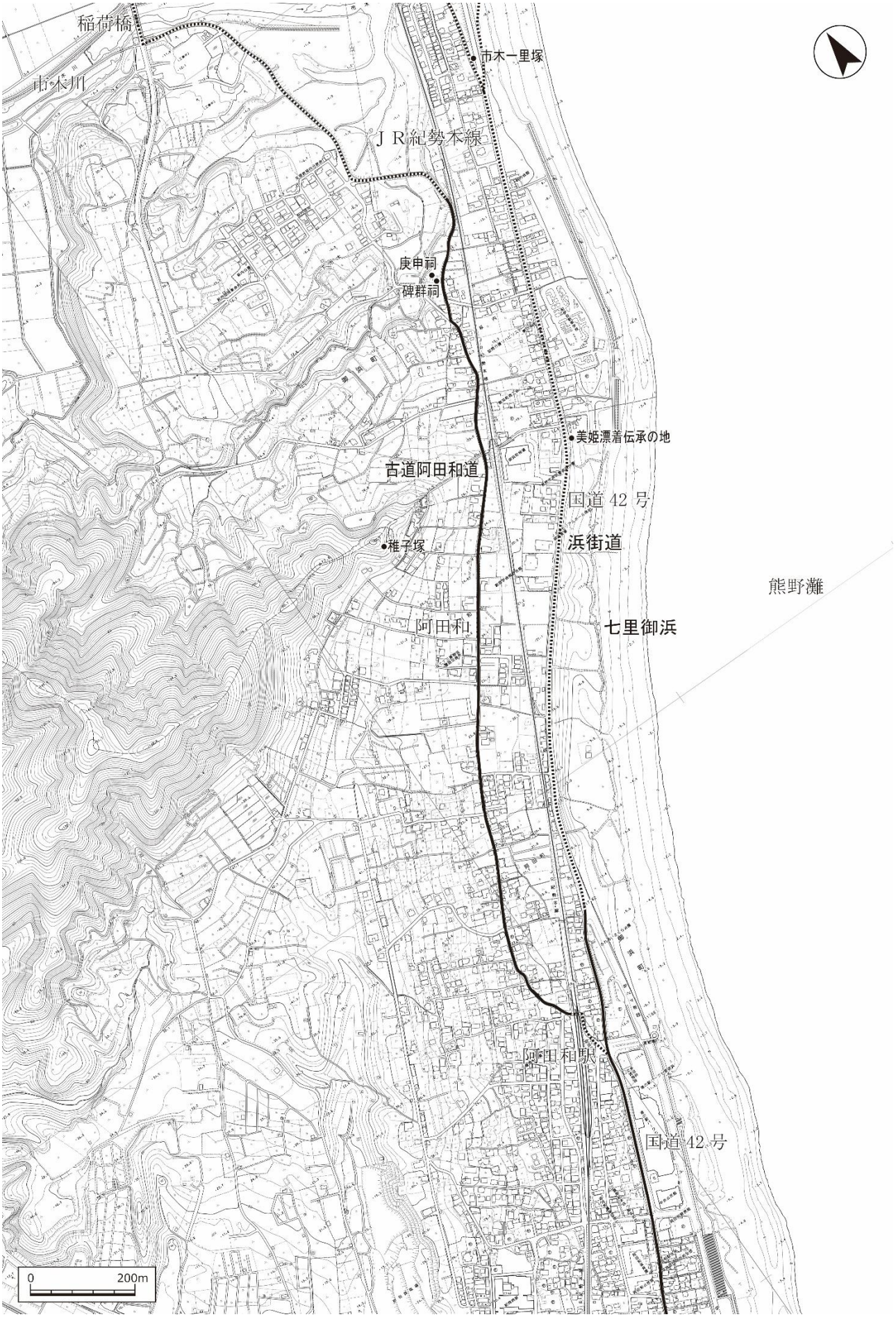


図 221　下市木から阿田和の道（1/10,000）

【市木一里塚】　当初は有馬一里塚と同様に、道を挟んで両側に塚が築かれていた。しかし、国道の改修時に破壊され、現在は緑橋から続く旧道と国道 42 号の間に、新しく造成された低い盛土と標石がある[19]。御浜町有形文化財（建造物）。

【緑橋】　市木川河口部には、渡し舟による交通の不便を解消するため、明治 30 年代前半に木橋が架けられた。しかし、高潮などによりたびたび流出したため、高潮対策と交通利便性の向上の観点から、大正 7（1918）年に市木川に五連の防潮水門をもつ緑橋、五反田川に一つの水門をもつ緑小橋がそれぞれ整備された[20]。御浜町有形文化財（建造物）。

図 222　市木一里塚

図 223　緑橋

図 224　萩内の庚申祠・碑群祠

註

（1）伊藤文彦「文化遺産としての「巡礼路」の保存と継承の研究～熊野参詣道伊勢路を事例に～」、2018 年（『文化遺産としての巡礼路―熊野参詣道伊勢路の価値と活用』に再掲、2025 年）。
（2）大西為義「七里御浜の範囲と名称」『熊野歴史研究』第 17 号、熊野歴史研究会、2010 年。
（3）三重県南牟婁教育会「熊野年代記」『南牟婁郡誌』上巻、1971 年。
（4）『熊中奇観』（江戸時代後期、和歌山県立博物館蔵）。
（5）「享保初（1716）年伊勢西国道中日記（抄）（安井文書）」『史料と伝承』第 5 号、史料と伝承の会、1982 年。
（6）『西国順礼道中細見増補指南車』1806 年。
（7）「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（8）熊野市文化財専門委員会・熊野市教育委員会『熊野市の文化財』熊野市教育委員会、2014 年。
（9）天明 6（1786）年の『伊勢参宮道中記』には、「志者ら川二つ河賃三文宛也左に親不知子不知といふ所阿り」と記されている。大馬金蔵『伊勢参宮道中記』いわき地域学会図書 15、1993 年。
（10）前掲註（7）。
（11）三重県教育委員会『歴史の道調査報告書 I ―熊野街道―』、1981 年。
（12）前掲註（11）。
（13）御浜町の石造物編集委員会『御浜町の石造物』御浜町教育委員会、1998 年。
（14）前掲註（7）。
（15）御浜町誌編集委員会『御浜町誌』1982 年。
（16）『新増補細見指南車』1829年、『天保新増西国順礼道中細見大全』1840年など。
（17）前掲註（7）。
（18）前掲註（7）。市木川の渡し場推定地には、さらに内陸部の上市木の阿弥陀寺周辺まで迂回したとする伝承がある。昭和頃まで川に飛び石があり、そこから阿田和に向けて稚子塚の付近を通る道もあったとされる。しかし、河口部からはあまりにも大回りとなるため、市木川が大水になった時の例外的な道と考えられる。
（19）前掲註（15）。
（20）前掲註（15）。

7　阿田和（あたわ）から井田（いだ）

○　阿田和から井田

図 225　稚子塚乙姫神社

図 226　子安地蔵

市木一里塚から約 700m 南進すると阿田和へと入る。この区間には、国道よりやや海側の松林の中を通る道があったとされるが、現在は自動車学校などによって道は失われている[1]。国道の反対側には、正徳年間（1711～1716）の頃に美姫が漂着したとの伝承地があり、美姫の死後、飛波山の頂上に稚子塚乙姫神社として祀られている（図 225）。今の御浜町役場が国道山手側に位置するが、その裏手には市木川の内陸部を渡った古道阿田和道が約 200m 内陸を並行する。

庚申祠・碑群祠から稚子塚を右手に約 1.5 ㎞南進すると、阿田和駅の前で海側の道と合流する。古道阿田和道と合流する約 300m 手前で、熊野道は国道から山側の旧道に分岐している。合流した熊野道は、阿田和の市街地の中を進む。約 700m 南進すると、右手の民家の脇に寛政 11（1799）年銘の子安地蔵が位置し（図 226）、さらに約 350m 南進すると十津川道との分岐点に至る。すぐ南には県道御浜紀和線が通るものの、この道は明治 23（1890）年に新道として敷設されたもので、道脇には開道碑が建立されている[2]。旧来の十津川道は、現県道の手前で右に曲がり、約 200m 西進するとＪＲ紀勢本線の線路で寸断されているが、もとは「紀伊国南牟婁郡下阿田和村全図」[3]にあるように、庚申祠や光明寺、阿田和神社へと続く（図 227）。さらにこの道を尾呂志川沿いに北上すると風伝峠道（本宮道）に至ることができる。

十津川道との分岐からすぐ道は二又に分かれ、現在の街道は右側を進み、旧阿田和橋で尾呂志川を渡るが、もとは左

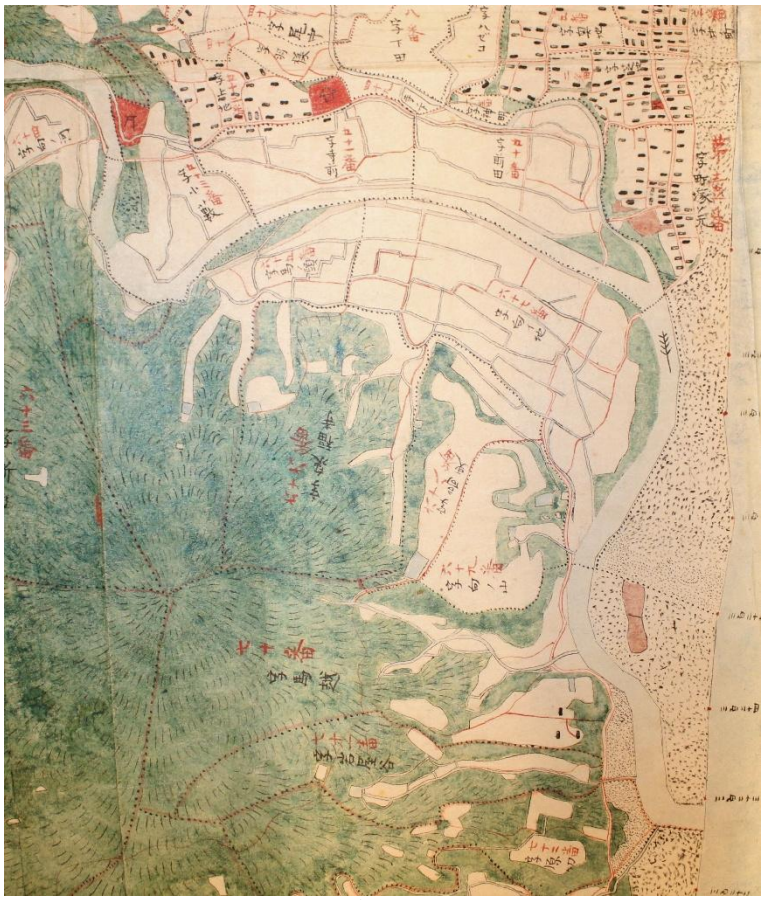


図 227　尾呂志川の道（「紀伊国南牟婁郡阿田和村全図」部分）

図 228　新道・旧道の分岐点

図 229　阿田和の道（1/10,000）

側の道で（図 228）、約 250m南進すると尾呂志川の河口部へと進む。現在は、国道 42 号により河口部や七里御浜と寸断されているが、「紀伊国南牟婁郡下阿田和村全図」をみると、道なりに進んで、七里御浜から渡し場、渡河地点へと至る。各道中案内記では、尾呂志川（阿田和川）も先の「親知らず子知らず」と同様に、熊野灘の渚をぬって渡河することと、大水には舟渡しを使うことが記載されている[4]。

図 230　尾呂志川渡し場推定地１

図 231　尾呂志川渡し場推定地２

図 232　尾呂志川渡河地点と夷島

尾呂志川の渡し場は、土手を越えた先にあったようで、明治初頭頃まで実際に営まれていたという。土手上には明治３（1870）年銘の恵比寿像が祀られていたが、現在は約 400m北の国道沿いに移設されている[5]。尾呂志川河口部には、渡し場推定地が他にもあり、市木川と同様に河口部の状況に応じて選択されたと考えられる（図 230）。２つ目の渡し場は、１つ目の渡し場の手前にある墓地の北側を右に曲がり、旧阿田和橋の西側へと下りた地点と推測される（図 227・231）。また、渡河地点は、大きく南に向けて湾曲した尾呂志川の流路に沿って七里御浜の砂礫浜を約１㎞歩いた、夷島（おしま）と呼ばれる岩礁付近と考えられる（図 232）。

図 233　地蔵祠（明治 41 年）

尾呂志川を舟で渡った先の道は、約 300m南進すると合流する。合流地点付近には、昭和 50（1975）年銘の地蔵祠と明治 41（1908）年銘の地蔵祠（図 233）が、それぞれ道の右脇に位置する。合流地点から約 600m南進すると、宇這上りの地名がある。尾呂志川を渡河後、浜から高低差のある道へと上った合流地点がこの付近にあったと考えられ、周辺には茶屋もあったとされる[6]。

さらに約 550m南進すると、松林の中に、六部の墓と呼ばれる巡礼者供養塔がある（図 234）。

【六部の墓】　国道 42 号の山地交差点付近の松林の中に、新旧２基の供養塔が併設されている。伝承では、奥州から娘を連れた巡礼者がこの地で行き倒れ、住民が手厚く埋葬し、娘は故人の遺

図 234　慶応３（1867）年銘の六部の墓（正面・左面・右面）

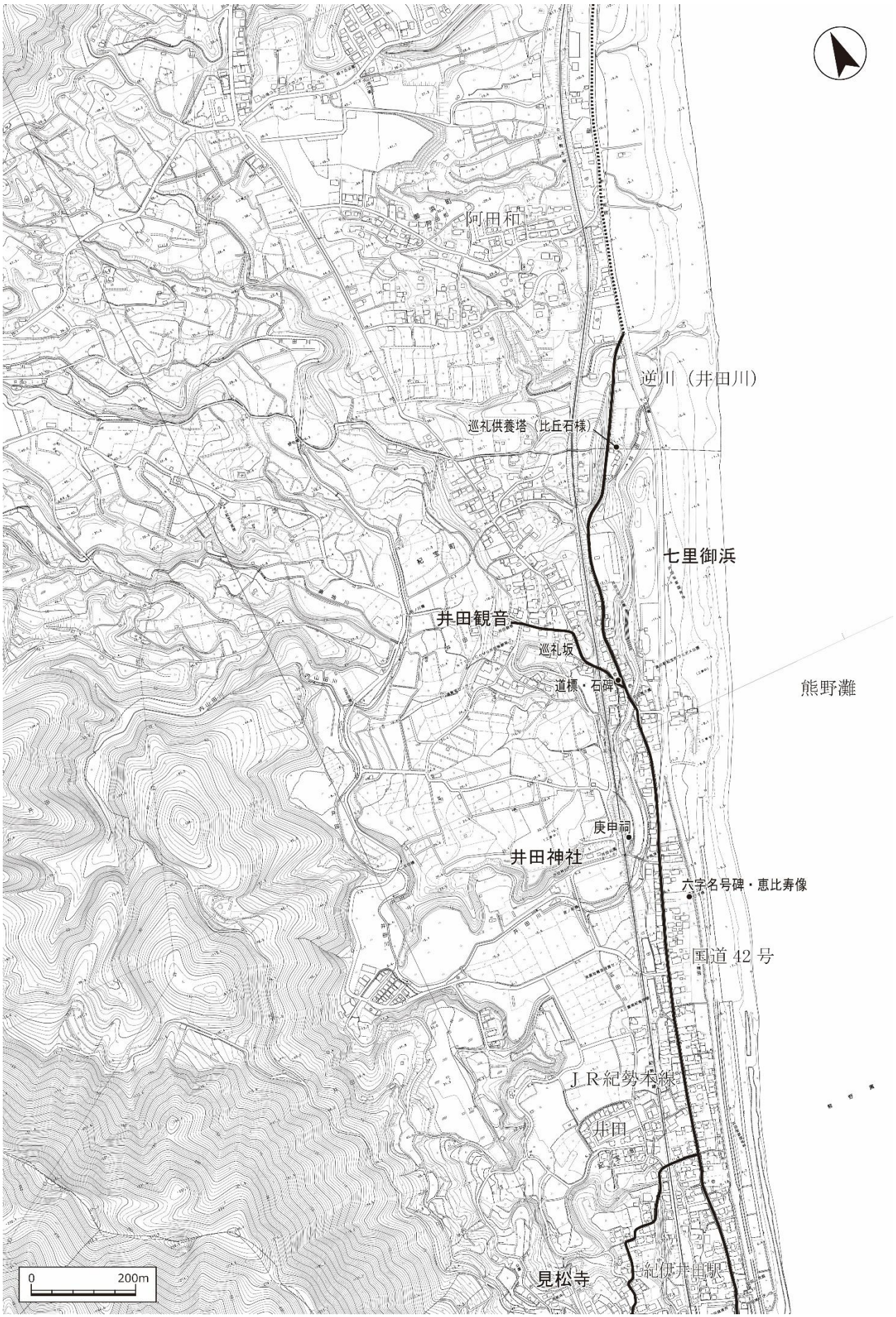


図 235　阿田和から井田への道（1/10,000）

言に従い和歌山県田辺の寺に預けられた。娘は、その後尼僧となり、その弟子の僧が墓参りに訪れた際に、新たに墓を建立したとされる[7]。旧供養塔は「(正面) 格翁大超信男 (左面) 当国日高郡／願主清兵衛／功力於熊 (右面) 慶応三(1867)□歳奥州／気仙郡／正月廿四日□崎村／治三良□」の銘文がある。新供養塔は、昭和16 (1941) 年に建立された。旧供養塔とほぼ同じ銘文で構成された。「気仙郡寿崎村」とあるが、気仙郡に寿崎村は見当たらない。明治初年時点で存在した気仙郡で「崎」の付く村は、赤崎村、末崎村がある。御浜町指定有形文化財 (建造物)。

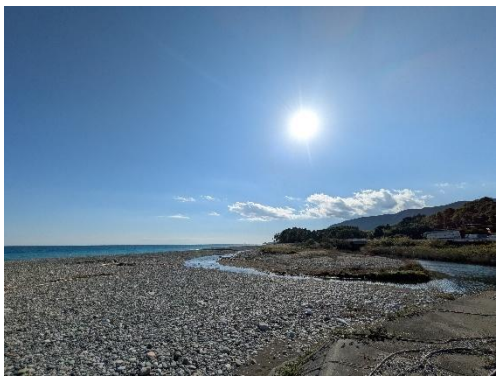


図 236　井田川河口部

図 237　井田川河口の分岐点

図 238　比丘石様

図 239　井田観音標石・道標と巡礼坂

六部の墓から約 700m南進すると、井田川 (逆川) の河口付近に至るが (図 236)、ここでは渡河せずに道は山側に分岐する (図 237)。分岐点から約 200m、緩やかな上り坂を進むと、左手には行き倒れた女性巡礼者を祀った比丘石(びきし)様のお堂があり (図 238)、さらに約 450m南進すると、右手に井田観音へと続く巡礼坂の上り口がある (図 239・240)。巡礼坂の三差路には、高さ約３ｍに及ぶ大型の「井田聖観世音」の標石とともに、「(正面) (左指差し) 井田観世音□ (右面) 明治四十(1907)年二月□」の道標 (図 241) と「(正面) 尾ろ志□ (左面) 大正九(1920)年十月□ (右面) 井田青年第四□」の道標がある (図 242)。井田観音へは、ＪＲ紀勢本線の高架下をくぐり、約 300m巡礼坂を上る。

図 240　井田観音

【井田観音】　本尊は、正嘉２ (1258) 年に海岸

図 241　井田観音道標 (明治)

図 242　井田道標 (大正)

に打ち上げられた伝承をもつ木造聖観音立像（紀宝町指定有形文化財（美術工芸品））であるが、江戸時代の作と考えられる[8]。当初の堂宇は、本尊を持ち帰った一族の子孫により、正徳年間（1711～1716）に建立され、現在の堂宇は、安政３（1856）年の再建とされるが、明治 20（1887）年の「紀伊国南牟婁郡井田村全図」[9]では井田観音の記載はない。境内には正徳 13（1713）年銘をもつ３体の石造地蔵菩薩立像（図 243）の他、寛延３（1750）年銘の手水鉢、文久２（1862）年銘の弘法大師坐像などが安置されている。太平洋戦争前の昭和 15（1940）年頃までは、３月の初午祭に巡礼が坂道に居並んだため、巡礼坂と呼ばれた[10]。

図 243　石造地蔵菩薩立像（井田観音）

図 244　井田庚申祠と燈籠

図 245　井田神社

巡礼坂との分岐点からすぐ先で、熊野道は井田川（逆川）を渡る。約 300m南進すると、右手の井田川対岸には、線路に隣接して文政 10（1827）年銘の燈籠と井田庚申祠があり（図 244）、さらに山側には井田神社（図 245）が所在する。一方、熊野道の左手の国道側には、文政 10（1827）年銘の徳本上人名号碑（図 246）や文政（1818～1831）年間の石燈籠などが安置されている。さらに約 550m南進すると、熊野道は、成川方面へと進む山側の道と鵜殿方面へと進む海側の道に分岐する。

図 246　徳本上人名号碑（正面・左面）

註

（１）御浜町誌編集委員会『御浜町誌』1982 年。
（２）県道御浜紀和線は、旧称は尾呂志街道と呼ばれていた。しかし、大正 14（1925）年刊行の『紀伊南牟婁郡誌』では、交通誌の阿田和村の中で、当該道について十津川道と記されている。そのため、本稿では十津川道とした。三重県南牟婁教育会『紀伊南牟婁郡誌』1925 年。
（３）「三重県庁文書」県指定有形文化財、三重県蔵。
（４）『西国巡礼細見記』安永５（1775）年、『新増補細見指南車』文政 12（1829）年、『天保新増西国順礼道中細見大全』天保 11（1840）年に記載がある。
（５）前掲註（１）。
（６）三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ―熊野街道―』、1981 年。
（７）前掲註（１）。
（８）「木造聖観音立像（井田観音像）」文化遺産オンライン、文化庁。
（９）前掲註（３）。
（10）紀宝町教育委員会『紀宝町の文化財』2023 年。

８　井田（いだ）から鵜殿（うどの）・成川（なるかわ）

○　井田

図 247　鵜殿経由道と井田上野道の分岐

図 248　王子谷の坂を上がる道との分岐

（図 247・248 は「紀伊国南牟婁郡井田村全図」部分）

井田の分岐　井田から新宮への道は３経路があったと考えられる（図 247・248）。１つめは井田集落内で浜街道と分岐し、山手の道を進み成川を目指す井田上野（うわの）道、２つめがそのまま直進して鵜殿を経由する道、３つめが途中までは鵜殿経由道と重複するが、分岐して井田と鵜殿の境界付近にある王子谷の坂を上がり、上野で井田上野道と合流する道である。

１つめの井田上野道は、江戸時代の道中日記などに経由地点である上野や耳切、成川（なるかわ）などの地名が頻繁に記載されることから、主要な参詣道だったことが窺える。江戸時代後期の「木国地図」においてもこの経路が描かれている[1]。また、元禄３（1690）年に刊行された『西国三十三所道しるへ』には「伊田村入口二茶屋あり右へハ濱へ行道左へハ山のわきを通る道なり此山ミちとをりてよし」とあり、右と左の表記が逆ではあるが、山手の道を推奨している[2]。

２つめの鵜殿経由道は、江戸時代の道中日記等にはみられないものの、『紀伊国絵図』では鵜殿経由の道が示されている[3]。さらに、この道は中世に遡ると考えられ、成川の渡しを経由した井田上野道と異なり、飛鳥の渡しを使い、阿須賀社あるいは熊野速玉大社を目指したものとされている[4]。なお、現在この２つの道の分岐地点には道標等の存在は認められない。

３つめの王子谷で分岐する道は、明治 20（1887）年３月付の「紀伊国南牟婁郡井田村全図」でも主要道を示す二重線で表現されており[5]、上記２つの道のバイパス的な役割を担っていたと想定される。

図 249　井田の地蔵菩薩坐像

井田から梶鼻王子への道　井田から鵜殿へは七里御浜沿いに直進する。井田との分岐から 200mほど進むと、右手に石仏祠が目に入る（図 249）。流紋岩製の地蔵菩薩坐像を祀り、基礎を含めた高さは 34.0cm である。基礎の部分には、胎蔵界大日を示す梵字アーンクが陰刻される。年号は見られないものの、作風的に江戸時代頃と考えられる。石仏祠から約 400m南下すると、再び国道 42 号と合流する。ここからは国道の歩道を利用し、鵜殿を目指す。やがて、山手方向に上がる国道 42 号と下を走る県道 35 号（紀宝川瀬線）との分岐が現れるが、県道側を進む。この付近が王子谷で、上野へ向かう旧道があった場所であるが、JR 紀勢本線の敷設等により、その痕跡を見出すことはできない。分岐から約 950m南下すると、緩くカーブをしている箇所があり、この左手には梶鼻王子の説明看板が設置されている。

梶鼻王子　県道からは視認し難いが、海辺側には大岩があり、この付近に梶鼻王子があったとされている（図 252）。梶鼻王子は、「加持鼻王子」とも記載され[6]、嘉永６（1853）年に刊行された『西国三十三所名所図会』では、井田村より成川村にいたる街道の左にあって、熊野九十九王子に数えられ

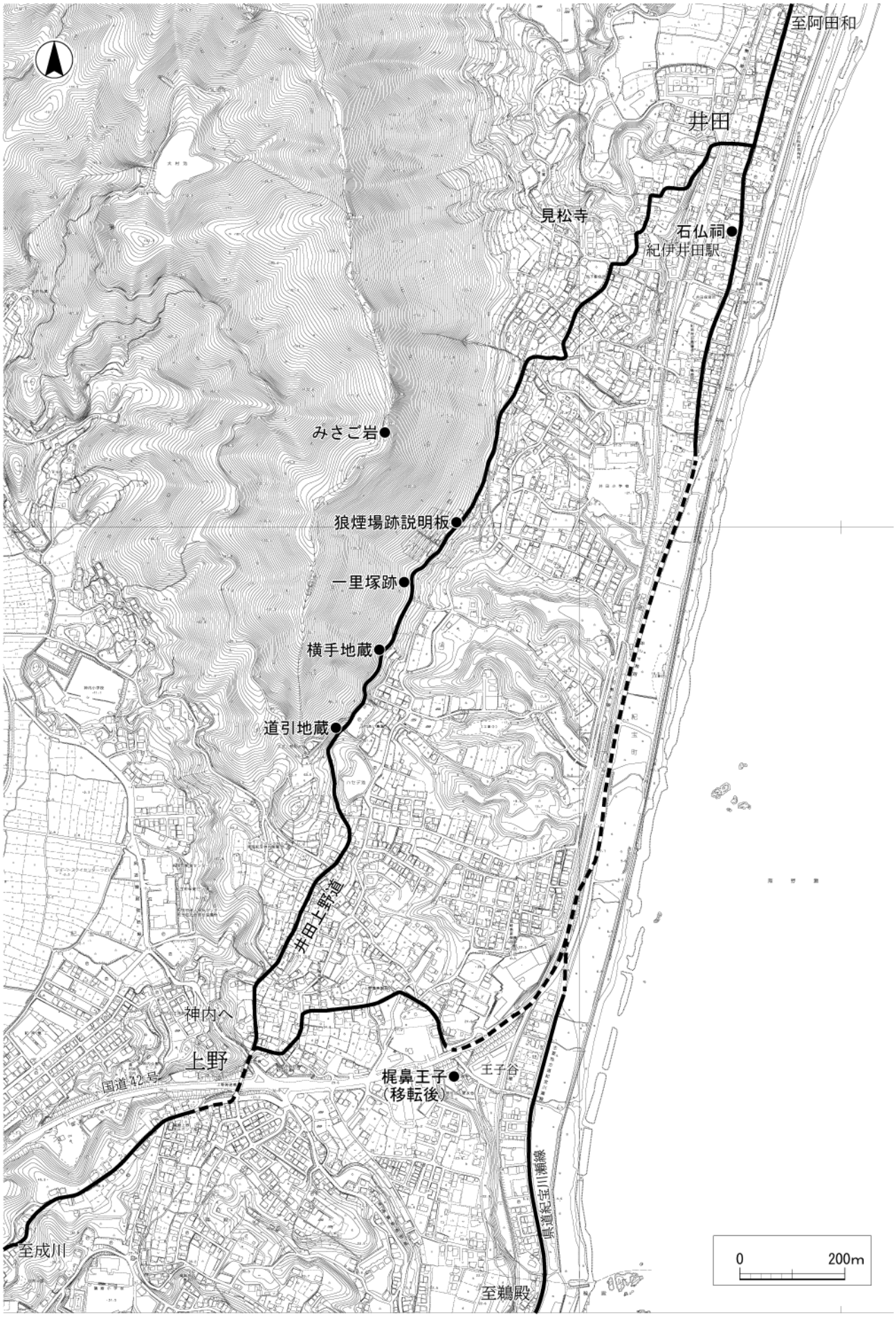


図 250　井田から鵜殿・成川への道（1/10,000）

ると紹介されている。王子とは、修験者が重視する童子の変形・転用と考えられる。熊野参詣道紀伊路および中辺路、新宮から那智にかけての道中で広くみられ、後鳥羽院など多くの皇族が紀伊路を経由して参詣したことで成立したとされる[7]。梶鼻王子の場合、そうした皇族関係の参詣記録には記載されず、『神道大系神社編・熊野三山』に収録されている文明５（1473）年の「九十九王子記」などの一部で確認されるのみであるため、成立経緯や実態については不明な点が多い[8]。

なお、梶鼻王子にあった社殿については、令和６（2024）年に鵜殿神社の元神主から新宮市教育委員会に寄贈された文書の中に「加持鼻文書」があり、それによると16世紀頃に造営されたとされている[9]。宝永４（1707）年には、地震による津波で梶鼻王子が流出したものの、間もなく復旧され、寛政 10（1798）年には紀州藩主８代目の徳川重倫（しげのり）が熊野巡行の際に立ち寄っている[10]。その後、安政元（1854）年の地震で起きた津波により再び崩壊したものとされている[11]。明治２（1869）年の『速玉大社文書』には荒廃の様子を伝える記事がみられ、その後、この場所に王子が復興されることはなかった[12]。現在の梶鼻王子は元の場所の北方約 500m、上野口の交差点から坂を少し上がった場所に移転している（図 253）。

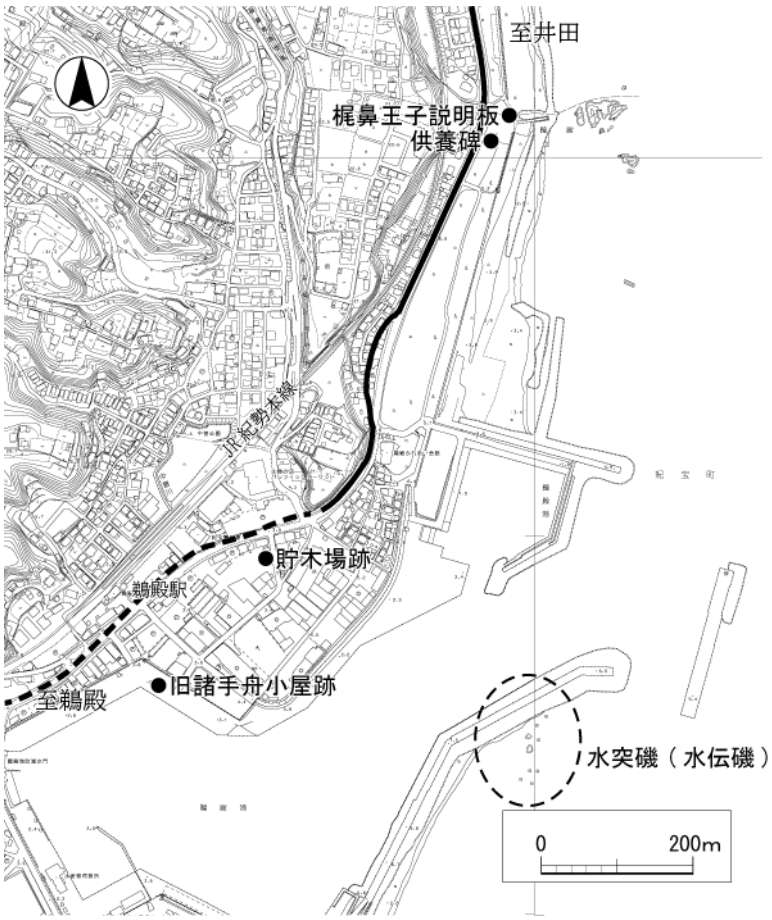


図 251　梶鼻王子付近の道（1/10,000）

梶鼻王子の説明看板から 50mほど南下すると、石祠に入った地蔵に到達し、その脇には２基の供養碑が認められる（図 254）。南側の墓碑は凝灰岩製の櫛形で、高さ 61.5cm（基礎を含めると約 89cm）である。正面に「妙法四聖六道法界」、側面には「山里氏」「明治廿五（1892）年／旧三月吉日」と陰刻する。この供養碑は、梶鼻王子付近で高潮により溺死した六部の墓とされている[13]。この付近は、鵜殿経由道において山地と海岸が最も接近している場所でもあり、供養碑等の存在からも難所だったことがうかがえる。北側の墓碑は自然石を利用したものである。

図 252　梶鼻王子付近の大岩

図 253　梶鼻王子社（移転後）

図 254　供養碑

○　鵜殿

梶鼻王子から鵜殿　梶鼻王子跡から 700 mほど新宮方面へ進むと、JR 紀勢本線鵜殿駅前にたどり着く。このあたりの左手には住宅地とその奥に鵜殿港があるが、元々は神内(こうのうち)川および熊野川の河口にあたり、往時は熊野川や北山川上流部で切り出した木材の貯木場があった[14]。また、現在、鵜殿港の防波堤となっている場所には「水伝磯(みずつてのいそ)」とよばれる場所があった。水伝磯は、万葉集でも歌われる景勝地であったことが『西国三十三所名所図会』に紹介されている。また、駅周囲は丘陵が迫っている場所も多く、江戸時代の道は川と山に挟まれた場所にあった。神内川を渡ると鵜殿の集落に入る。

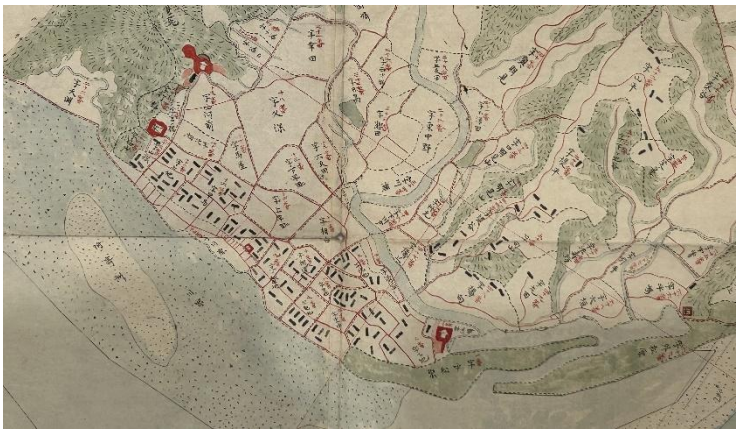


図 255　鵜殿（「紀伊国南牟婁郡鵜殿村全図」部分）

明治 19（1886）年 10 月付けの「紀伊国南牟婁郡鵜殿村全図」[15] では主要道を示す二重の赤線がみられないことから、鵜殿集落内をどのように通行していたかは不明であるが、成川方面へと向かう道としては次の３つが想定される（図 255）。１つめが烏止野(うどの)神社を目指す道、２つめが川縁を歩く道、３つめが集落内の角を屈曲しながら歩く道である。

図 256　地蔵祠と大小の庚申

烏止野神社を目指す道は、自然堤防上に立地している鵜殿集落の北辺を通り、道も地形に沿うような形状となっている。

川縁を歩く道は波静橋(なみしずばし)を渡り、２本目の路地で左へと入る[16]。100mほど南下すると、地蔵祠と大小２基（大：基礎含む高さ 84cm、笠幅 38cm、塔身幅 24.5cm、小：基礎含む高さ 62cm、笠幅 28cm、塔身幅 17.5cm）の庚申が安置されている場所が現れる（図 256）。庚申は風化による損傷が目立つが、作風から江戸時代頃のものとみられる。この庚申は元々50mほど西の丁字路にあったが、平成 27（2015）年頃に現在地へと移転した[17]。

図 257　宝篋印塔と常夜燈

さらに南下すると、宝暦９（1759）年に建立された宝篋印塔、その脇には文化４（1807）年に建立された常夜燈がある（図 257）。宝篋印塔は海上安全を祈願したもので、鵜殿廻船や新宮廻船だけでなく、大坂長堀の「荒物屋」「平野屋」という屋号もみられる。宝篋印塔から 150m西進した場所には流紋岩の板で覆われた庚申祠がある（図 258）。庚申は砂岩製で、残存長 38.2cm、像高は 25.8cm、幅 23.1cm である。

図 258　庚申祠

ここから先は北越コーポレーション紀州工場の敷地となっているため進めないが、本来は熊野川沿いに道があり、飛鳥の渡しがある矢渕へと通じていた。集落内の角を屈曲しながら進む道は、石造物などがみられず、道の形状も現在と大きく異なっている場所が多い。

【烏止野神社】　もとは大上神社とよばれ、中腹にある磐座で天照皇大神・伊邪那岐命・伊邪那美命・宇迦之御魂神を祀っていたとされる。明治 40（1907）年に別の場所にあった大己貴命・蛭子命・金山彦命も合祀し、現在の形となった[18]（図 259）。

図 259　烏止野神社

【鵜殿西遺跡】　一般国道 42 号新宮紀宝道路建設事業に伴い発掘調査が行われた遺跡である。調査の結果、平安時代末から江戸時代にかけての遺跡であることが判明し、大型の建物跡や溝で区画された屋敷地などが確認された。また、国内外で生産された土器と陶磁器類などが出土した。これらは、鎌倉時代や室町時代に当地域で活動していた有力者である鵜殿氏と関わりのあるものと考えられている[19]（図 260）。

図 260　鵜殿西遺跡の調査

【鵜殿城跡】　天保 10（1839）年に完成した『紀伊続風土記』四箇荘鵜殿村の項には「古城跡　村の西山にあり鵜殿石見守のいひ伝ふ」と記載される[20]。構造は曲輪の周囲に土塁を巡らせ、その南北に堀切を設けたシンプルなものである。集落との比高は 35mながら、熊野川河口部や熊野灘を見渡せる位置にあり、往時は海上交通を監視していたと考えられる（図 261）。

図 261　鵜殿城跡主郭部

鵜殿集落を通り過ぎると、鵜殿城跡が立地する小高い山が見えてくる。この山を迂回する途中に地蔵祠がある。祠には明治 41（1908）年 9 月に建立された地蔵菩薩立像があり、像高は 43.3cm である。この地蔵を過ぎると矢渕中学校が見えてくる。

貴祢谷社　中学校の西側の丘陵には貴祢谷社がある。現在の社殿自体は新しいが、中学校の体育館建設工事の際に古瀬戸製品の水注や壺など経塚由来の中世墓地が確認されていることから、本来の貴祢谷社は中学校のある場所にあったと考えられている[21]（図 262）。神社の由緒は、「熊野権現御垂迹縁起」によると、天台山（中国浙江省）から飛び立った熊野権現が伊予（愛媛県）や淡路（兵庫県）などを経由して新宮の神倉に降り立ち、翌年に阿須賀社の北にある石渕の谷に勧請された後、本宮や新宮へ遷されたとされる[22]。毎年 10 月に熊野速玉大社例大祭で行われる御船祭は、この遷宮を表現したものと伝わる。神幸船を曳航する諸手船の漕手は、遷宮を手伝った鵜殿の人々が務めている。なお、諸手船の倉庫は元々 JR 鵜殿駅付近にあったが、道路等の造成により烏止野神社の南側に移転している。また、神社の境内の一角には、近隣から集められた五輪塔や宝篋印塔からなる中世の石塔群があり、最も古いものは 14 世紀中葉と考えられている[23]。これらは鵜殿氏関連の石塔群と伝わり、町の指定文化財にもなっている（図 263）。

図 262　貴祢谷社参道と矢渕中学校

図 263　鵜殿氏石塔群

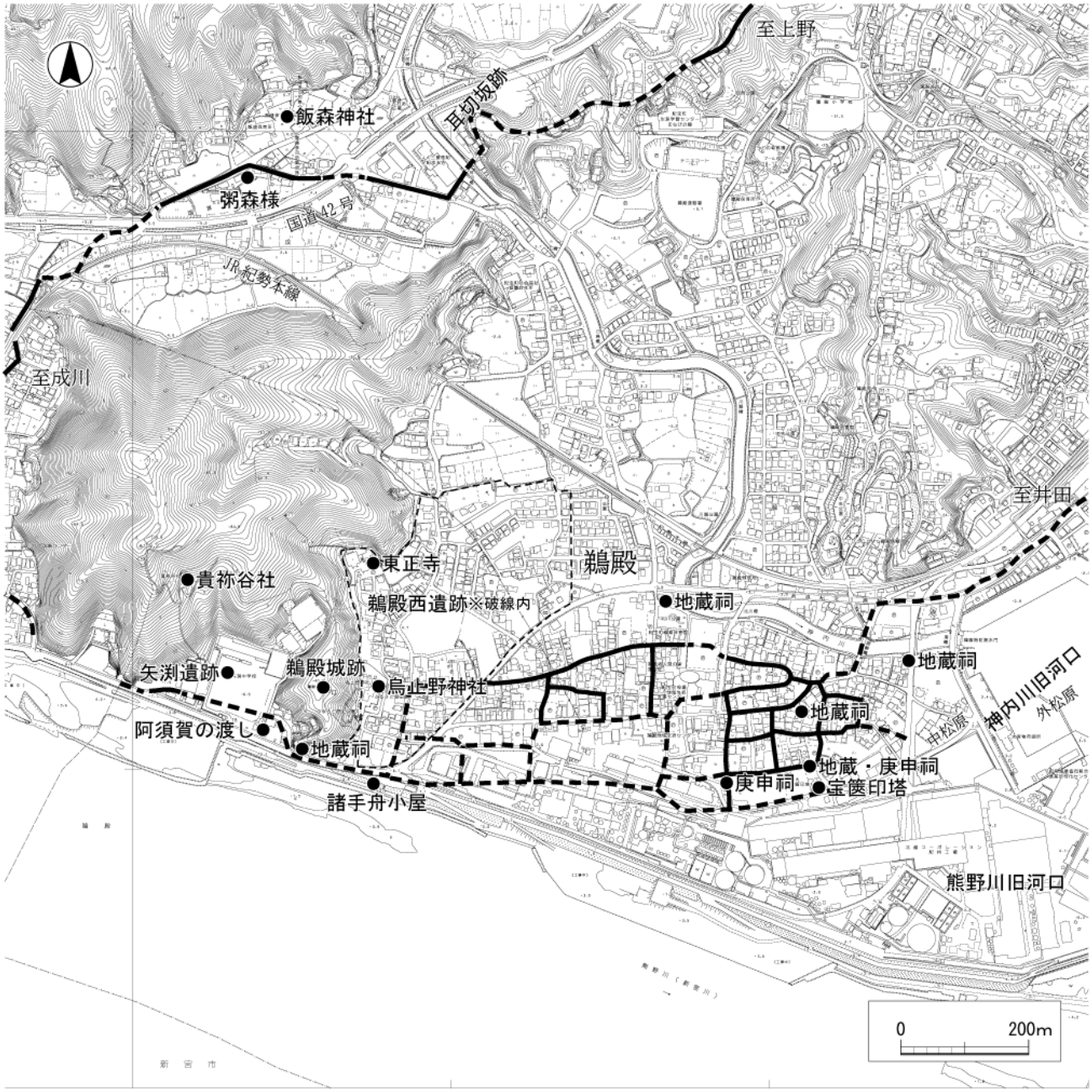


図 264　鵜殿集落内の鵜殿経由道（1/10,000）

中学校付近の河原には池田（新宮市）への渡し場があった。鵜殿や成川、神内の人々がよく利用し、昭和 30（1955）年頃まで営業していたとされる[24]。なお、中世には飛鳥の渡しがあり、対岸にある阿須賀社の脇に着いたことからこの名が付いたとされる[25]。飛鳥の渡しについては記録が乏しく池田の渡しとの関係は不明である。

○井田

井田上野道　七里御浜沿いを通ってきた道は、井田集落内で見松寺の看板を目印に右に曲がり、山手方向へ進む。JR 紀勢本線の踏切を渡り、左手にある道を選ぶ。ここからは登り坂で、集落内を直角に曲がる道を進みながら高度を上げていく。この何度も直角に折れる道は、明治 20（1887）年３月付けの「紀伊国南牟婁郡井田村全図」にも記され[26]、アスファルト舗装になっているものの、古道の趣が感じられる（図 247）。曲がり切った後には分岐が現れ、見松寺と横手地蔵の案内板がそれぞれ設置されているが、横手地蔵方向を示す左の道を進む。

【見松寺】　正徳２（1712）年に開基した曹洞宗の寺院で、新宮市に所在する全龍寺の末寺。本尊仏は虚空蔵菩薩である（図 265）[27]。

分岐から約 250m南下し、谷を迂回すると、右手にコンクリート舗装された幅約２ｍの狭い道が現れる。この道は、大烏帽子山の山裾を通るため緩やかな登り坂となるが、木々の間から熊野灘を眼下に望むことができる。狭い道の入口から 400mほど歩くと、右手の斜面に旧棚田の石垣が見え隠れし、さらに進むと狼煙場跡の案内板が左手に現れる。150mほど進むと、一里塚跡を示す石柱が設置されている場所へと至る。井田の一里塚は、新宮から一里にあたることから設置されたものである。もとは土盛りされた塚であったが、道路改修の際に消失し、地元住人の記憶を頼りに石柱が建立された（図 266）。熊野道伊勢路の一里塚は、正徳２（1712）年時の紀州藩主だった徳川吉宗が設置させたものである。

【狼煙場跡・みさご岩】　『紀伊続風土記』牟婁郡四箇荘井田村の項には「狼煙場　村の申酉の方みさこか峠にあり」という記載がみられ[28]、みさご岩付近に狼煙場があったと推測される。この狼煙場は、寛永年間（1624～1644）に紀州藩が異国船警備のため奥熊野の各所に配置させたもので、成川組が番をしていた[29]。みさご岩とは大烏帽子山の主稜線上にある巨岩で、ここからは井田集落から熊野市遊木（ゆき）町方面まで見渡すことができる。

一里塚跡から 200m南下すると横手地蔵に至る。３つの祠があるが、中央が横手地蔵で、文政 10（1827）年に石垣氏によって建立されたと伝わる。祠の中には砂岩製の船形光背を伴う地蔵菩薩立像が設置され、毎年１月 24 日の例祭では餅まきが行われる[30]（図 267）。横手地蔵の脇からは水が湧き出ており、霊水として今でも多くの人が水を求めに訪れ、夏場にはこの水で喉を潤す参詣者も見受けられる。

横手地蔵から 100mほど進むと、小さな赤い祠が現れる。この祠には、道引地蔵とよばれる立像と、頭部が欠損した地蔵菩薩立像の２躰が並んでいる（図 268）。道引の名は神内へ抜ける道との別れ道であったことに由来し、迷い人もいたために建立したとされる[31]。沖見地蔵という名も見受けられるが、木々が少ないため、ここから海まで見通せたことによると考えられる。道引地蔵は文政 10（1827）年に南伝之助によって建立され、光背には墨書で「カ」を示す梵字と「天保二年/□今中□□」がある[32]（図 269）。

道引地蔵から約 200m歩くと植林帯を抜け、集落に至る。新興住宅が多く、往時の面影を探ることは難しい。この住宅街は上野と称される地区で、井田の一地域ではあるが、文政 12（1829）年の『新増補細見指南書』には「宇和埜村」[33]、また、天保 11（1840）

図 265　見松寺

図 266　一里塚跡の石柱

図 267　横手地蔵

図 268　道引地蔵・首無地蔵

図 269　道引地蔵（墨書）

年の『天保新増西国巡礼道中細見大全』では「宇和野村」とみえる[34]。井田村と併記されていることから、参詣者には別々の村とみなされていたようである[35]。住宅街に入りしばらくすると、国道42号にかかる跨道橋が見え、これを右に折れると緩い下り坂となる。かつて、この坂の途中には茶屋跡や耳切坂とよばれる坂があったが、紀宝バイパスや新宮紀宝道路の建設で消失し、その痕跡を見ることはできない。

○成川

上野から成川へ　下り坂が終わると神内川にかかる橋を渡る。神内川は耳切川という名で『紀伊南牟婁郡誌』に記載される[36]。橋を渡り終わった後は2車線の町道と交わる。この場所を右に曲がると、国道42号との交差点「飯森」に出て横断する。交差点から150mほど進むと、数本の木が生えている小山が見えてくる。ここには、地元の人が「粥森様（かいもりさま）」と呼ぶ、高さ約1m、幅1.5mほどの石が祀られている。

図270　粥森様

【粥森様・飯森神社】　粥森様は北西にある飯森（いいもり）神社が小高い様に対して、なだらかな地形から名付けられたものといわれている（図270）[37]。飯森神社は成川飯森集落の氏神である。灯籠には「弘化三年丙午九日建」「飯森中／世話人速左ヱ□／世話人喜重郎」とある。

図271　龍光寺

さらに粥森様から200mほど歩き、再び国道42号を横断するとJR紀勢本線が見えてくる。線路沿いの道路を南下して踏切「大峪」を渡り、集落内の道路を抜けると熊野川に並行する県道紀宝川瀬線と合流する。合流の50mほど手前で交わる弧状をなす道が旧道である。合流後は西進し、200mほど歩くと龍光寺への分岐、さらに200m進むと中村神社がある。

【龍光寺】　元和2（1616）年の創建と伝わる[38]（図271）。山門前には16世紀代とみられる五輪塔が10基ほどあり、周辺から集められたものと考えられる。また、境内には紀宝町の史跡に指定されている成川屋佐兵衛の墓がある。五輪塔で火輪が欠損しているが、残高は188cmある。成川屋佐兵衛は、堺住吉周辺の出身とされる人物で、成川における有力な廻船問屋主として紹介され、地元では検使として浅里山の境界争いなどの職務にあたったとされる（図272）[39]。

図272　成川屋佐兵衛の墓

【中村神社】　大己貴命と罔象姫命（みつはのひめのみこと）が祭神で、本殿は神明造である。明治39（1906）年十二月には神饌幣帛料供進社に指定されている。また、明治40（1907）年には成川字深谷に所在していた熊野速玉大社の末社である深谷社を合祀する許可を得て、翌年に合祀祭を行っている。神社の例祭は11月3日であるが、毎年10月に行われる熊野速玉大社の御船祭において、御船島で神幸船を見守る巫女は中村神社の氏子とされており、また、神幸船が乙基河原（おともがわら）に上陸してからの先導は氏子の大矢家が担当していた（図273）[40]。

図273　中村神社

中村神社から 50mほど西へ進むと右手に高台へと上がる階段が見えてくる。この階段脇には地蔵祠がある。砂岩製で、両手で宝珠を持つ。像高は 65.2cm。銘文などはみられないが、作風から江戸時代頃のものと考えられる（図 274）。もとは河原へ下りる途中の民家敷地内にあったもので、昭和 40（1965）年頃の道路改修により現在地へ移された[41]。

図 274　地蔵菩薩坐像

地蔵祠から 300mほど歩くと、９連のワーレントラスが特徴的な熊野大橋が見えてくる。昭和 10（1935）年に三重県と和歌山県が共同施工した橋梁である。橋が架けられる前には成川の渡しがあり、道中記などにも度々記載されている。

成川の渡し　成川の渡しは、『熊野年代記』の徳治元（1306）年の記事にみられる「三月舟渡シ成川二渡ル往来人ノ道直新宮」が現時点で最も古い記録である[42]。その後、同文献では、永禄 8（1565）年に「鳴川へ渡場付替ル」の記事があるが、徳治元年に機能していた渡し場との関係は不明である。渡し代は、江戸時代を通じて 25 文であったようで、西国巡礼の中では最も高額とされている[43]。25 文のうち５文は船頭に渡し、20 文は渡しを管理していた新宮の社僧に支払ったらしい[44]。『西国三十三所名所図会』では「水の増減によって舟ちんの高下あり」の記載がみられることから、必ずしも固定された額ではなかった。船賃は成川にあった番所で支払っていたようである。

図 275　「熊中奇観」に見る舟番所　（○印部分）

番所は『熊野速玉大社古文書古記録』の宝永元（1704）年の記事に「成川順礼番所建替」と見え[45]、『熊中奇観』の絵図でもその存在が確認できる[46]（図 275）。成川の渡し場の位置は、明治 18（1885）年 1 月付けの「紀伊国南牟婁郡成川村全図」において[47]、「字渡シ上」が見え、現在の紀宝警察署成川交番付近に相当する（図 276）。ここから乗船し、対岸にある新宮の河原で下船して、熊野速玉大社を目指した。現代では渡しがないため熊野大橋を渡ることになり、最初の信号がある交差点で右折すると、熊野速玉大社の鳥居が現れる。ここが伊勢路の終着地点である。

図 276　「字渡シ上」の表記　（○印部分）
（「紀伊国南牟婁郡成川村全図」部分）

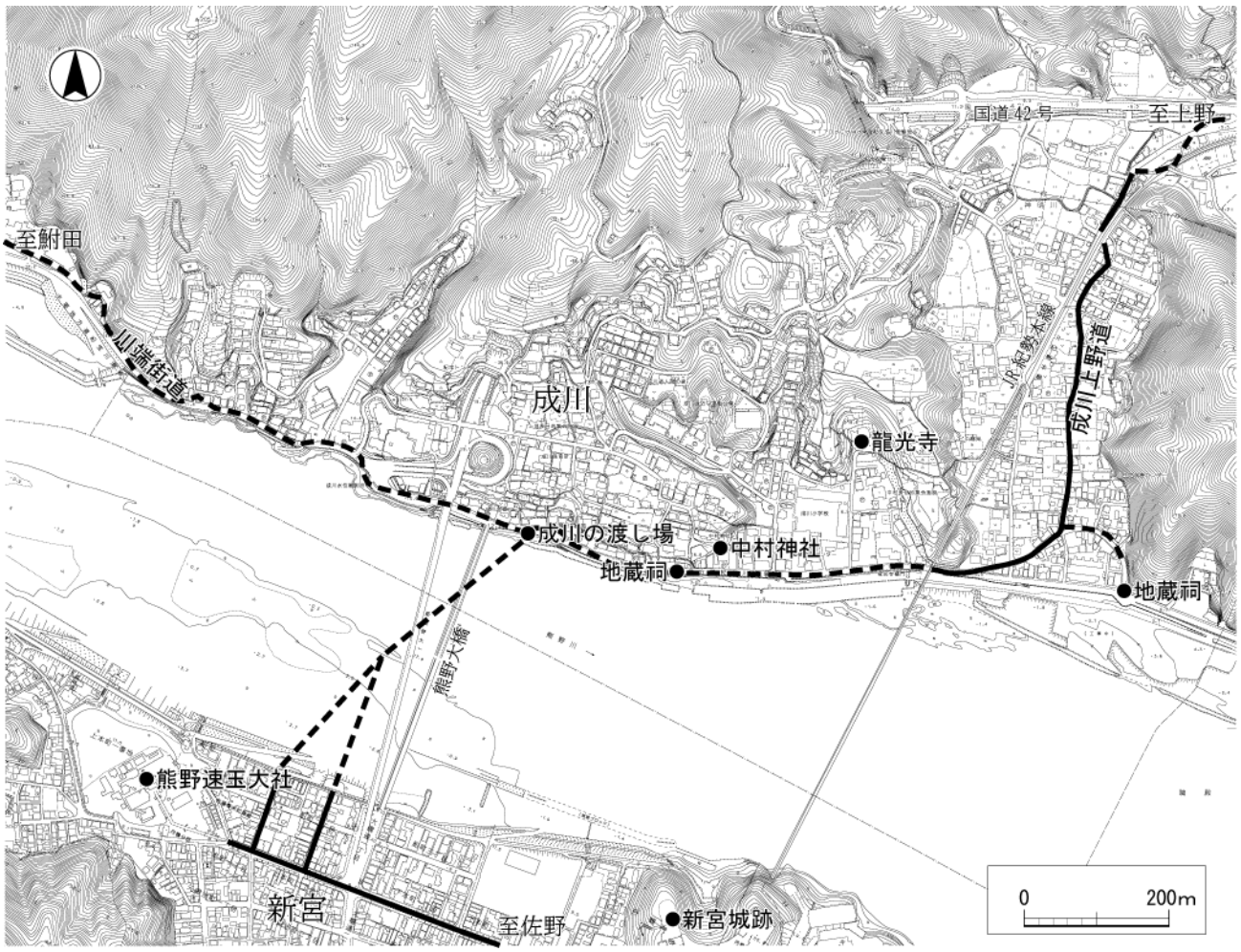


図 277　成川周辺の道と渡し（1/10,000）

註

（1）『木国地図』わかやま歴史館蔵。

（2）『西国三十三所道しるへ』元禄３（1690）年、国文学研究資料館デジタルアーカイブ。

（3）『紀伊国絵図』江戸時代、和歌山県立博物館蔵。

（4）大西為義「鵜殿経由熊野古道と渡船場について」『熊野誌』57 号、2010 年。

（5）「紀伊国南牟婁郡井田村全図」明治 20（1887）年、三重県蔵。

（6）仁井田好古『紀伊続風土記』第 3 輯、歴史図書社、1970 年。同書には、四箇荘鵜殿村の項に「王子権現　境内周百三十間　村の艮十八町にあり舊加持鼻といふにあり故に加持鼻王子権現といふ」とある。

（7）小山靖憲・笠原正夫編『南紀と熊野古道』街道の日本史 36、吉川弘文館、2003 年。

（8）財団法人神道大系編纂会『神道大系　神社編 43　熊野三山』、1989 年。この文献での表記は「梶鼻王子」。

（9）同文書では、梶鼻王子の切通しが井田村と鵜殿村の境目にあたることが記されている。和歌山県立博物館『聖地巡礼－熊野と高野－』特別展図録、2024 年。

（10）鵜殿村教育委員会『鵜殿村の文化財』2005 年。

（11）紀宝町教育委員会教育課『紀宝町の文化財』2023 年。

（12）滝川政次郎編『熊野速玉大社古文書古記録』、清文堂出版 1971 年。

（13）三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ（熊野街道）』1981 年。

（14）前掲註(10)。

（15）「紀伊国南牟婁郡鵜殿村全図」明治 19（1886）年、三重県蔵。

(16)「紀伊国南牟婁郡鵜殿村全図」においては神内川に橋の表記が見られないため、どのように渡河していたかは不明である。

(17) 前掲註(10)。

(18) 鵜殿村史編纂委員会『鵜殿村史　通史編』鵜殿村、1994 年。

(19) 三重県埋蔵文化財センター『鵜殿西遺跡（第 1～5・7～10 次）発掘調査報告』2025 年。

(20) 前掲註(６)。

(21) 伊藤裕偉『聖地熊野の舞台裏』高志書院、2011 年。

(22) 鵜殿村史編纂委員会『鵜殿村史　史料編』鵜殿村、1991 年。

(23) 伊藤裕偉「鵜殿の中世石塔群」『ふびと』66、三重大学歴史研究会、2015 年。

(24) 前掲註(10)。

(25) 新宮市編纂『新宮市誌』新宮市、1937 年。

(26) 前掲註(５)。

(27) 紀宝町誌編纂委員会編『紀宝町誌』紀宝町、2004 年。

(28) 前掲註(20)。

(29) 白石博則・矢野勝久「新発見の紀東の狼煙場跡推定地」『和歌山城郭研究』第 22 号、和歌山城郭調査研究会、2023 年。

(30) 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ（熊野街道）』前掲註 13 では、地蔵に「文政十丁亥七月吉日石垣氏」の銘が刻まれているとされるが、祠の扉が施錠されているため、正面からは確認できなかった。

(31) 前掲註(13)。

(32) 道引地蔵が設置されている祠は、2025 年の時点では三方を壁に囲まれているが、1981 年に発刊された三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ（熊野街道）』時点では、背後に壁が無かったため地蔵の背面に「文政十年亥七月日南伝之助」の刻銘があることが報告されている。

(33) 沙門某『新増補細見指南書』文政 12（1829）年、国文学研究資料館デジタルアーカイブ。

(34) 俣野通尚編『天保新増西国巡礼道中細見大全』天保 11（1840）年、国文学研究資料館デジタルアーカイブ。

(35)『紀伊続風土記』前掲註 6、四箇荘井田村の項では、「井田村　韋田　小名　上野」とあり、枝郷的な位置づけだったものとみられる。

(36) 三重県南牟婁郡教育会編『紀伊南牟婁郡誌』下巻、名著出版、1971 年。

(37) 紀宝町役場企画調整課広報広聴係編『広報きほう』7 月号、2019 年。

(38) 前掲註(27)。

(39) 大西為義「成川屋佐兵衛及び一族について」『熊野歴史研究』第 20 号、熊野歴史研究会、2015 年。

(40) 紀宝町編『文化財を訪ねて』、1990 年。

(41) 前掲註(40)。

(42)『熊野年代記』熊野三山協議会・みくまの総合資料館研究委員会、1989 年。同書は古代から明治時代前半までの熊野三山の歴史を熊野新宮の本願所であった新宮庵主霊光庵が編纂したものである。

(43) 前掲註(27)。吉野川の舟渡し代は３文、木津川は８文であり、成川の渡しの高額さが窺える。各川の渡し代は、宮本勉「『佐藤善兵衛道中記』の研究－元禄６年、駿州安倍郡水見色村庄屋の旅と意識－」『地方史静岡』第 16 号、地方史静岡刊行会、1988 年による。

(44)『西国順行要路談　天地心』天明３（1783）年、三重県立熊野古道センター蔵。

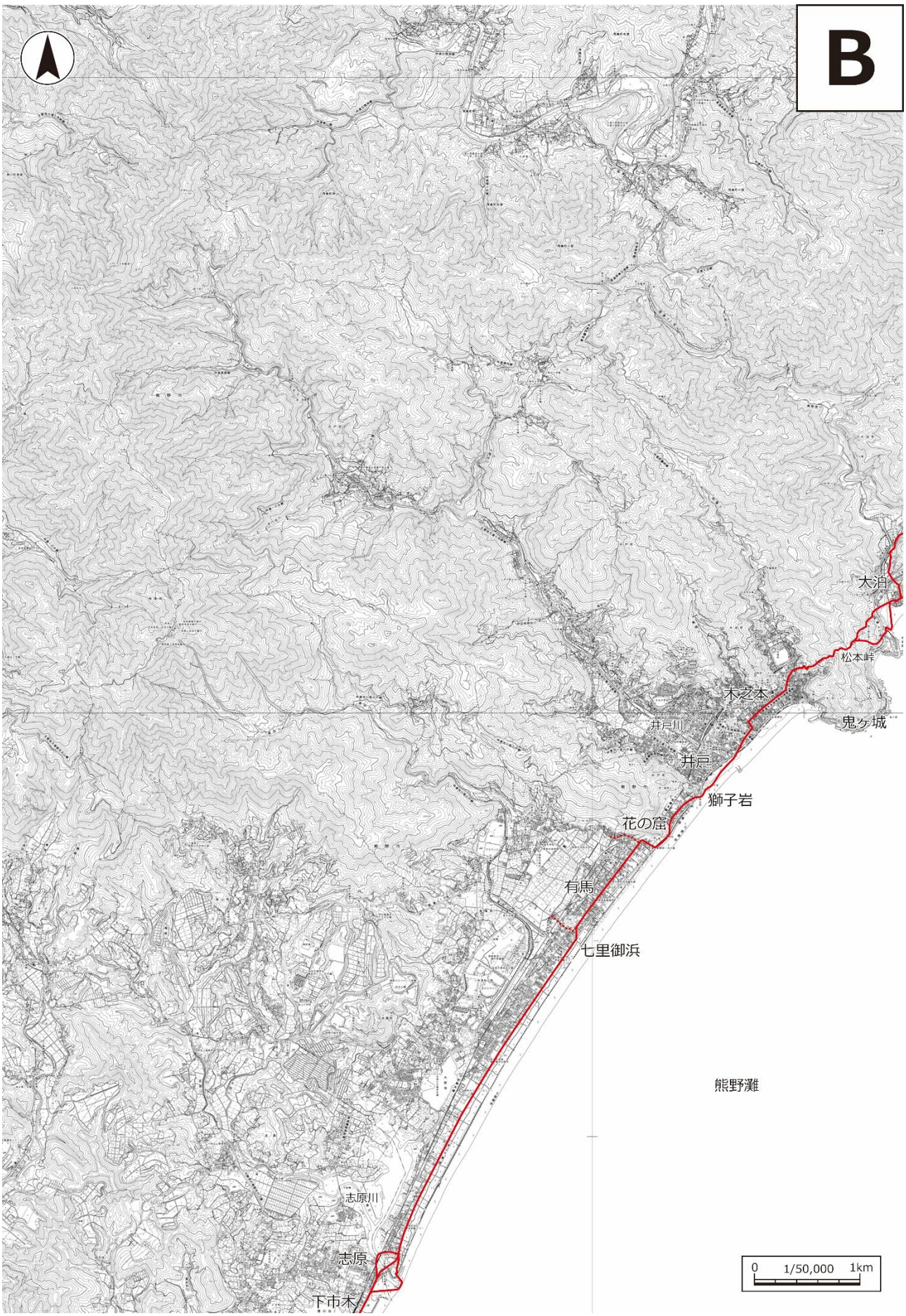
(45) 前掲註(12)。

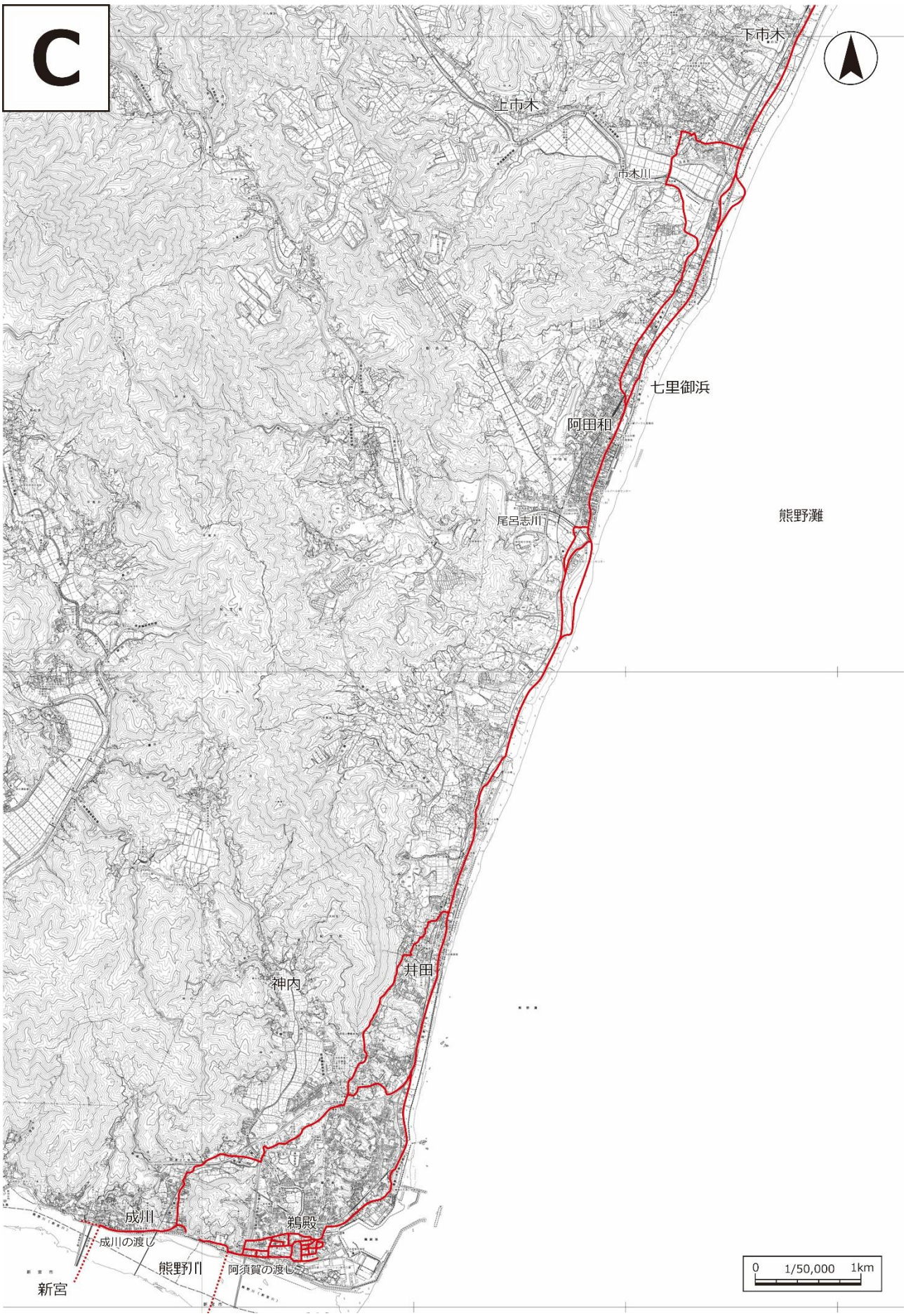
(46)『熊中奇観』江戸時代後期、和歌山県立博物館蔵。

(47)「紀伊国南牟婁郡成川村全図」明治 18（1885）年、三重県蔵。

A
B
C
0
20km

A
賀田
賀田湾
曽根
甫母峠
曽根次郎坂・太郎坂
甫母
二木島峠道・逢神坂峠道
逢神坂峠
二木島峠
二木島
二木島湾
新鹿
遊木
新鹿湾
波田須
波田須の道
観音道
清水寺
大吹峠
大吹峠道
熊野灘
0
1/50,000
1km


B
大泊
松本峠
木之本
鬼ヶ城
井戸川
井戸
獅子岩
花の窟
有馬
七里御浜
熊野灘
志原川
志原
下市木
0
1/50,000
1km


C
下市木
上市木
市木川
七里御浜
阿田和
尾呂志川
熊野灘
井田
神内
鵜殿
成川
成川の渡し
熊野川
阿須賀の渡し
新宮
0
1/50,000
1km

熊野参詣道伊勢路調査報告書Ⅲ

（尾鷲市～紀宝町）

令和８（2026）年３月

三重県教育委員会